

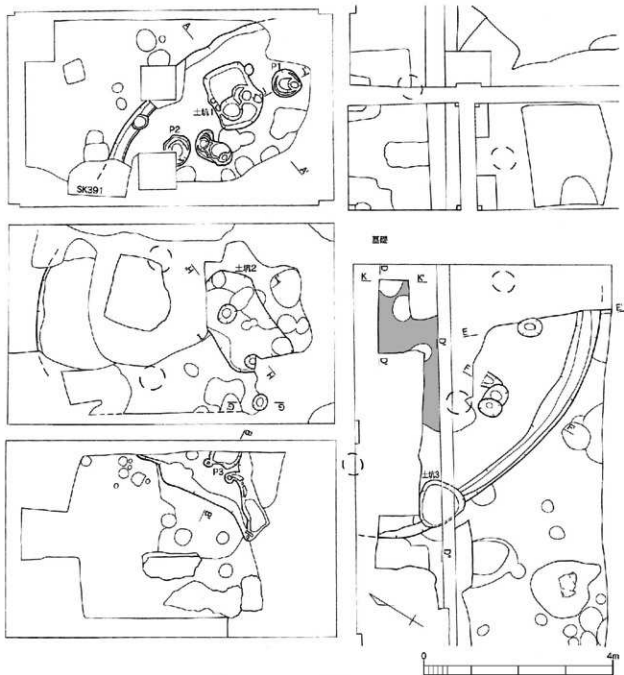
第V章 4次調査

第1節 弥生時代の遺構と遺物

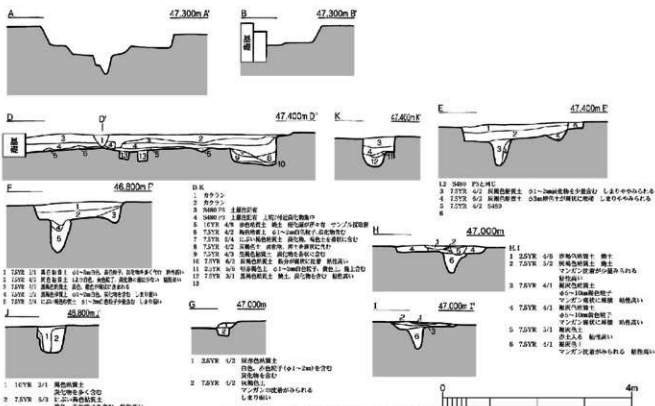
(1) 竪穴住居跡(SC)

SC480 (第182・183図、図版56)

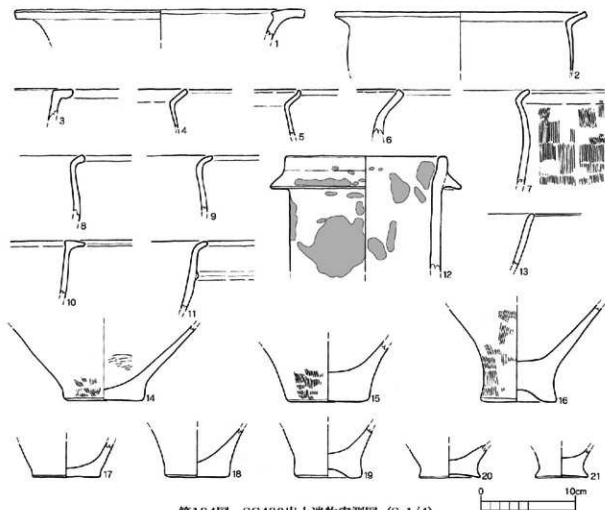
調査区のB-5に位置する。円形プランの住居跡で、東西長11.9m、推定南北長11.0mを測る。校舎基礎によって、遺構の大半が削平の影響を受ける。壁面の残存状況は良好で、床面から約0.35mの立ち上がりが認められる。また、周囲には壁溝が巡る。土坑跡は3箇所確認できた。土坑1は北側で確認し、規模は長軸0.68m、短軸0.52mを測り、長方形を呈する。深さ0.60mを測り、土器15が出土した。土坑2は中央近くで確認し、上面は赤化が認められた。規模は長軸1.10m、短軸0.62mを測り、長方形を呈する。深さは0.15mを測る。中央に柱穴跡が掘り込まれる。土坑3は南側で確認し、規模は長軸0.52m、短軸0.46mを測り、円形を呈する。深さは0.21mを測り、南側の周溝を削平する。床面にはピットがあり、P1からP3は住居跡の構成に含まれ、それ以外は規則的な配



第182図 SC480実測図 (S=1/80)



第183図 SC480実測図 (S=1/80)



第184図 SC480出土遺物実測図 (S=1/4)

置になっていない。また、遺構中央付近の土層D-D'で、赤化を呈する焼土範囲が認められ、熱化学分析を行った。

出土遺物

土器（第184図、図版71）

1は壺の破片で、口縁部は粘土帯貼付けにより肥厚である。2から11は甕である。口縁部の形態は1・4・5が跳ね上げ、3は外面へ屈曲し、平坦を呈する。4は「く」字形、7は外反、10は鋤先状、11は如意形を呈する。11は胴部上半に、断面が三角形の突帯を一条巡らす。12は筒形器台で、口縁部は緩やかに外反りを呈する。外面は断面が三角形の突帯を巡らす。13は鉢口縁部で、口縁部は丸く収まる。14から17は壺底部で、15は厚底で、外底は全て平底を呈する。16から21は甕底部で、外底は18が平底、16から21は底部裾が広がり、上げ底を呈する。

石器（第185図、図版84）

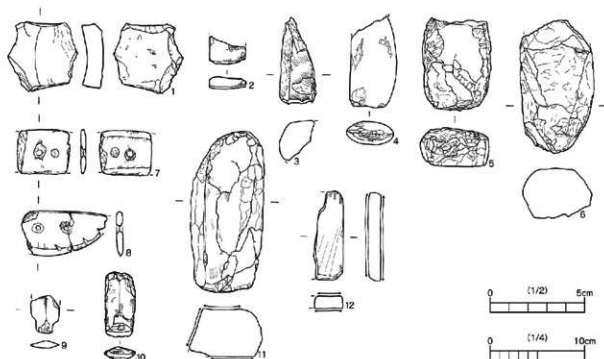
1は安山岩製の剥片で、風化が著しい。2は珪質頁岩製の扁平片刃石斧で、刃部を残存する。3から6は太形始片刃石斧である。3は凝灰岩製で、体部が残存する。4は凝灰岩製で、基部を欠損する。5・6は凝灰岩製で、敲打工程段階と考えられる。7は凝灰岩製の石庖丁で、両側を欠損する。穿孔は2カ所認められ、1カ所は未穿孔である。8は赤紫泥岩製の石庖丁である。9は砂岩製の石剣で、基部が残存する。10は赤紫泥岩製である。断面が菱形を呈し、刃部の成形が認められることから、柱状片刃石斧と考えられる。11は粘板岩製の砥石で、砥面は3面認められる。12は粘板岩製の砥石で、砥面は2面認められる。

(2) 土坑跡

円形土坑跡（フラスコ状）

SK420（第186図、図版57）

調査区のB-1に位置する。遺構は南西側の一部分が、SK404によって上端が削平される。規模は残存長で、上端は1.42×1.36m下端は1.42×1.45mを測り、円形状を呈する。壁面は袋状を呈し、深さは1.35mを測る。床面は中央部が凹む。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。



第185図 SC480出土遺物実測図（1はS=1/2、2～12はS=1/4）

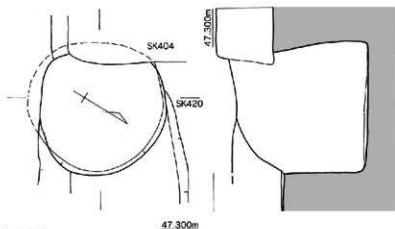
出土遺物

土器 (第189図、図版71)

1から3は甕口縁部の破片で、1の口唇部は跳ね上げるが、3の口唇部は粘土紐を貼り付けるが、一部欠損する。4は壺胴部の破片で、断面が三角形の尖帯を一条巡らす。

石器 (第194図、図版84)

1は黒曜石製の石鏃で、腰岳産である。2・3は石包丁で、2は凝灰岩製、3は赤紫色泥岩製である。穿孔は2箇所施される。4は粘板岩製の砥石で、砥面は2面認められる。



SK427 (第187図、図版57)

調査区のB-1に位置する。遺構の東側は、SK425の削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が 1.58×1.12 m、下端は 1.32×1.03 mを測る。壁面は南北が袋状、東西が逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.52 mを測る。床面は中央部が凹む。埋土は褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

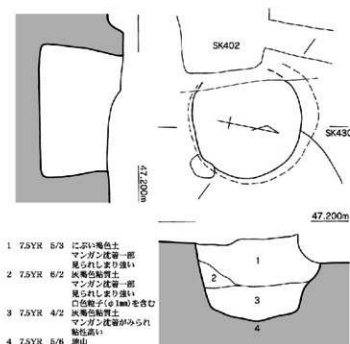
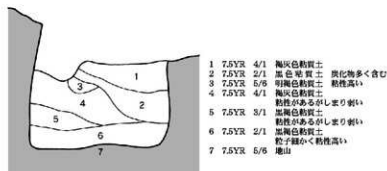
出土遺物

土器 (第189図、図版71)

5から8は甕の破片である。5の口縁部は短く外反し、胴部中に最大径が位置する。6の口縁部は平坦を呈し、内面に突出する。7の口縁部は外反、8の口縁部は短い。9は甕の底部と考えられ、外底は上げ底を呈する。

石器 (第194・243図、図版84)

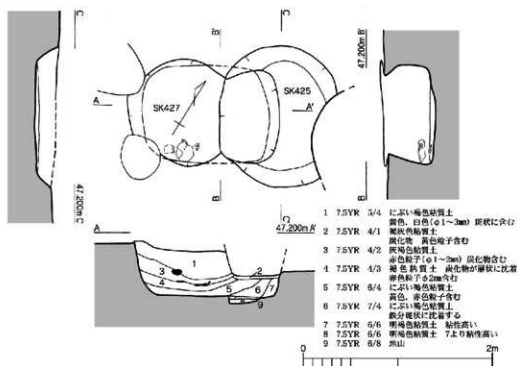
第194図5は凝灰岩製の石剣で、刃部が残存する。断面は、菱形を呈する。第243図5は粘板岩製の砥石で、砥面は1面認められる。



SK430 (第186図、図版57)

調査区のB-2に位置する。遺構の西側上端は、SK404によって削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が 1.14×1.00 m、下端は 1.36×1.08 mを測り、円形状を呈する。壁面は袋状を呈し、深さは0.90 mを測る。床面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

第186図 SK420・430実測図 (S=1/40)



第187図 SK425・427実測図 (S=1/40)

出土遺物

弥生土器片が出土したが、図示可能ではなかった。

SK433 (第188図、図版57)

調査区のB-2に位置する。遺構の上面と南東側は、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が1.22×0.92m、下端は1.23×0.41mを測り、円形状を呈する。壁面は袋状を呈し、深さは0.24mを測る。床面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土の単層である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

弥生土器片が出土したが、図示可能ではなかった。

SK442 (第188図、図版57・58)

調査区のD-2に位置する。遺構の上層は、削平の影響を受ける。規模は上端が1.74×1.60m、下端は1.68×1.54mを測り、円形状を呈する。壁面は袋状を呈し、深さは0.43mを測る。床面は平坦で、壁面側に周溝を巡らす。埋土は2層に分かれる。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器 (第189図、図版71)

10は壺口縁部の破片で、口唇部にキザミと、外面は縦位のハケが施される。11は鉢口縁部から胴部上半まで残存する破片で、如意形を呈する。12から14は甕底部と考えられる。外底は12が平底、13が浅い上げ底を呈する。14の外底は、円形の穿孔が施される。

SK457 (第188図)

調査区のC-4に位置する。遺構の規模は、上端が0.98×0.94m、下端が1.02×0.92mを測り、円形を呈する。深さは0.14mである。埋土は褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

弥生土器片が出土したが、図示可能ではなかった。

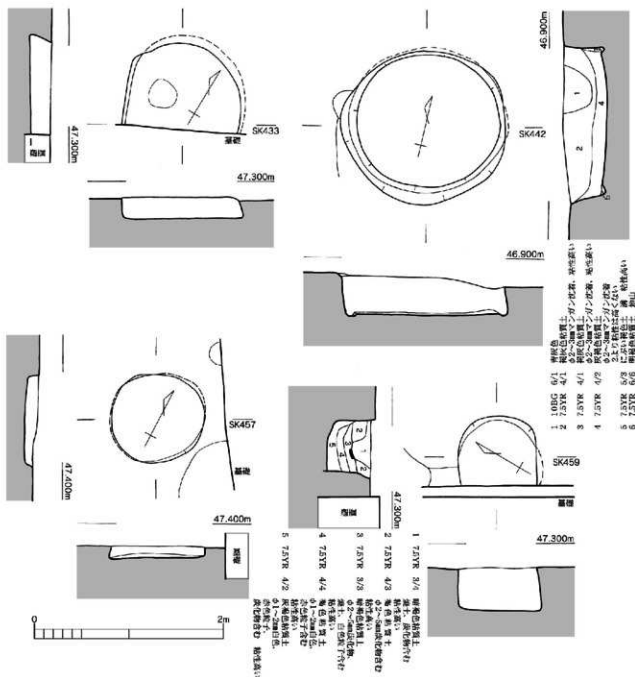
SK459 (第188図、図版58)

調査区のB-3に位置する。遺構は南東側が、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が0.84×0.82m、下端が0.90×0.72mを測り、隅丸方長方形を呈する。壁面は袋状を呈し、深さは0.56mを測る。床面は平坦である。埋土は灰褐色、褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器 (第189図)

15は甕の破片で、口縁部は短い。16は甕底部で、外底は上げ底を呈する。



第188図 SK433・442・457・459実測図 (S=1/40)

SK460 (第190図、図版58)

調査区のC-2に位置する。遺構の西側と南側を、校舎基礎によって削平を受けている。規模は残存長で、上端は1.20×0.84m、下端は1.32×1.18mを測り、円形状を呈し。壁面は袋状に立ち上がり、深さは1.53mを測る。床面は平坦で柱穴跡と、壁面に周溝を巡らす。埋土は中位で黒褐色の炭化物層、下位でぶい褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器 (第191図、図版71)

1・2は、壺口縁部の破片である。2は、粘土帯を貼付けて肥厚する。3から7は甕の破片である。3の口縁部は平坦で、内面は粘土帯を貼付けて突出する。4の口縁部は、外面へ屈曲する。調整は内面が縦位のナデ、外面が斜位のハケが施される。5・6の口縁部は如意形を呈し、胴部上半に一条の沈線を巡らす。7の口縁部は如意形を呈し、胴部上半に断面が三角形の突帯を一条巡らす。8は高杯の口縁部と考えられ、口唇部は内傾する。8・9は壺底部と考えられる。外底は平底を呈する。10から12は壺底部と考えられる。外底は10が平底、11・12は脚台状を呈し、上げ底を呈する。13は、縄文土器の破片である。

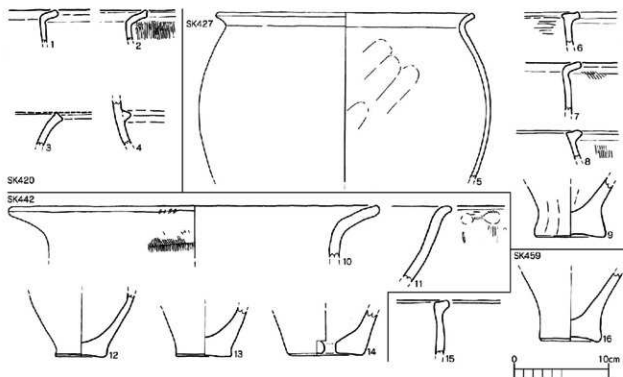
SK462 (第190図、図版58・59)

調査区のC-3に位置する。遺構の西側は、削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が1.66×0.84m、下端は2.06×0.95mを測り、円形状を呈する。壁面は袋状を呈し、深さは1.61mを測る。床面は平坦で、北側のみ周溝が認められる。埋土は30層に分けられ、中位で灰白色層が確認できた。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

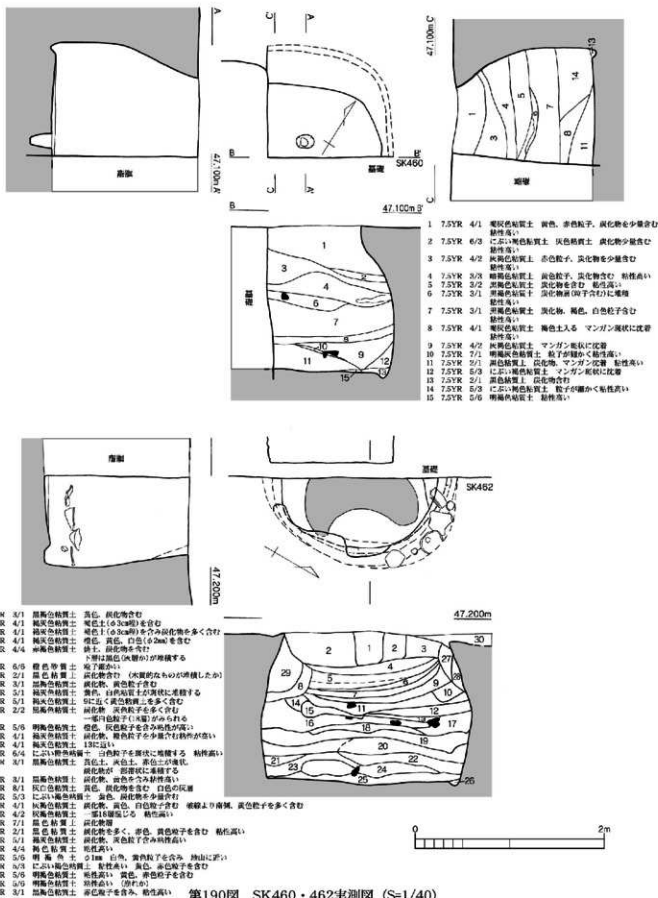
土器 (第192・193図、図版71)

1から6は壺の破片である。1の口縁部は大きく開く。2の内面は縦位のミガキ、口唇部に縦位のキザミ、外面は縦位のハケが施される。3は頸部の破片である。調整は内面が横位のミガキ、外面が縦位のハケが施された後、内面に断面が三角形の突帯を一条巡らし、外面は四条の沈線を巡らす。4

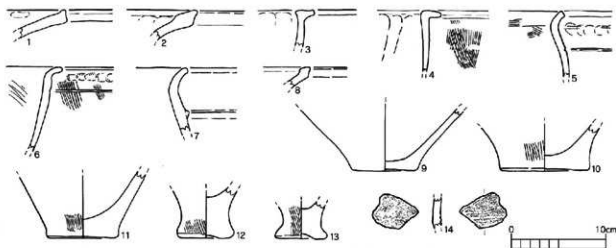


第189図 SK420・427・442・459出土遺物実測図 (S=1/4)

は断面が三角形の突帯を一条巡らし、無軸羽状文を施す。5は一条の沈線を巡らし、沈線を挟んで上側は無軸羽状文、下側は貝殻腹縁の押型による弧状が施される。6は一条の沈線を巡らし、無軸羽状文を二段と上半円と下半円の弧状が施される。7から15は甕の破片である。7の口縁は外反し、胴



第190図 SK460・462実測図 (S=1/40)



第191図 SK460出土遺物実測図 (S=1/4)

部上半に一条の沈線を巡らす。調整は内面に斜位のミガキが施される。8は口縁部が短く外反し、頸部が窄まり、胴部最大径が上位に位置する。9から15の口縁部は如意形を呈し、12・15は外面の胴部上半に一条、14は二条の沈線を巡らす。11・13は外面の胴部上半に、断面が三角形の突帯を一条巡らす。10の口縁部は外面へ屈曲し、胴部上半に二条の沈線を巡らす。16は鉢口縁部の破片で、口縁部は外面へ折れ曲がる。7は高坏または鉢坏部で、口唇部は下方へ垂下し、外面は斜位のミガキが施される。18から22は、壺の底部と考えられる。18は胴部下半まで残存し、底部は厚底を呈する。調整は内面が工具ナデ、外面が縦位のハケが施される。21・22の外底は、僅かに上げ底を呈する。22は胴部上半まで残存し、底部は厚底で外底は上げ底を呈する。調整は内面が横位のナデ、外面が縦位のハケ後横位のミガキが施される。23から32は、甕底部と考えられる。調整は内面がナデ、外面が縦位のハケが施される。外底は23・27から32は、上げ底を呈する。25・26から29・30は、平底を呈する。24は、底部の円形の穿孔を一箇所設ける。34は蓋である。

石器 (第194図、図版84)

6は黒曜石製の石鏃である。7は凝灰岩製の磨製石鏃である。基部の一部を欠損する。8は珪質頁岩製の柱状片刃石斧である。基部の一部を欠損する。9は粘板岩製の砥石で、小形である。砥面は2面認められる。10は安山岩製の打製石斧である。11から13は砥石で、粘板岩製ある。砥面は11が1面、12が4面、13が1面認められる。12の砥面は、船底場を呈する。

SK465 (第195図、図版59)

調査区のD-4に位置する。遺構の規模は残存長で、上端が1.86×0.84m、下端は1.75×1.56mを測る。壁面は逆「U」字形で立ち上がり、深さは0.31mを測る。床面は平坦である。埋土は灰褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器 (第197図、図版72)

1は壺底部と考えられる。外底は平底を呈し、器厚である。

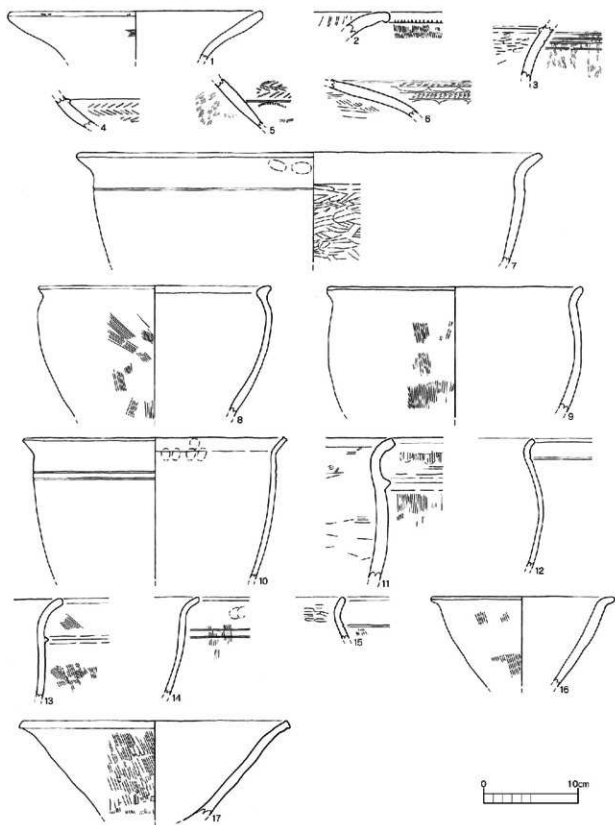
SK475 (第195図、図版59)

調査区のB-3に位置する。遺構の西側は、削平の影響を受ける。規模は上端が1.1×1.1m、下端は1.4×1.1mを測り、円形を呈する。壁面は袋状で立ち上がり、深さは0.4mを測る。床面は平坦である。埋土は灰褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器 (第197図、図版72)

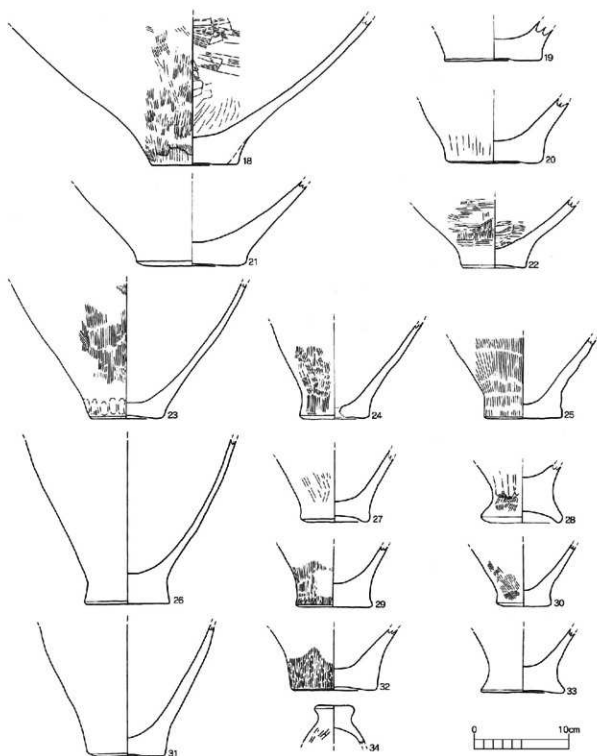
2は鉢の破片で口縁部は短く、断面は方形を呈する。3・4は甕底部で、外底は上げ底を呈する。



第192図 SK462出土遺物実測図① (S=1/4)

SK484 (第195図、図版59)

調査区のD-4に位置する。遺構の西側を、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は上端が 1.34×0.4 m、下端は 1.1×0.42 mを測り、円形を呈する。壁面は袋状を呈し、深さは0.96 mを測る。床面は中央が凹む。埋土は黒色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。



第193図 SK462出土遺物実測図② (S=1/4)

出土遺物

土器 (第197図、図版72)

5から8は甕の破片である。口縁部の形態は5が垂下し、内面は粘土帯を貼付けて突出する。9は如意形を呈する。10は外反、6から8は「く」字形を呈する。10は鉢口縁部の破片で、口縁部は胴部から外面へ屈曲する。11から14は甕底部で、外底は上げ底を呈する。調整は内面がミガキ、外面はハケが施される。

石器 (第206図、図版84)

1は珪質頁岩製の柱状片刃石斧である。基部を欠損する。

SK490 (第195図、図版59)

調査区のB-5に位置する。遺構の北側は、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は上端が1.4×1.2m、下端は1.36×1.26mを測り、円形を呈する。壁面は袋状を呈し、深さは0.51mを測る。床面は平坦である。埋土は褐灰色、黒褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

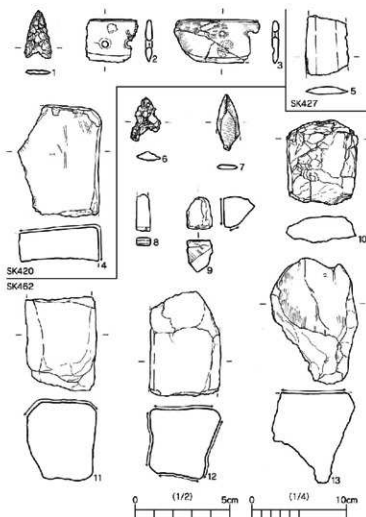
出土遺物

土器 (第197図、図版72)

14・15は、甕口縁部の破片である。14の口縁部は外反し、胴部上半に断面が三角形の突帯を一条巡らす。調整は内面が縦位のナデ、外面が縦位のハケが施される。15の口縁部は、緩やかに外反する。16は壺底部と考えられ、外底は上げ底を呈する。調整は内面が横位のミガキが施される。17から20は壺底部と考えられる。底部裾は広がり外底は上げ底を呈する。調整は外面が縦位のハケが施される。

SK505 (第196図、図版59)

調査区のD-4に位置する。遺構の北側は、削平の影響を受ける。規模は上端が1.44×0.9m、下端は1.8×0.96mを測り、円形状を呈する。壁面は袋状を呈し、深さは0.92mである。床面周囲に周溝が認められる。埋土は褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。



第194図 SK420・427・462出土遺物実測図
(1・6・7はS=1/2、2・5・8~13はS=1/4)

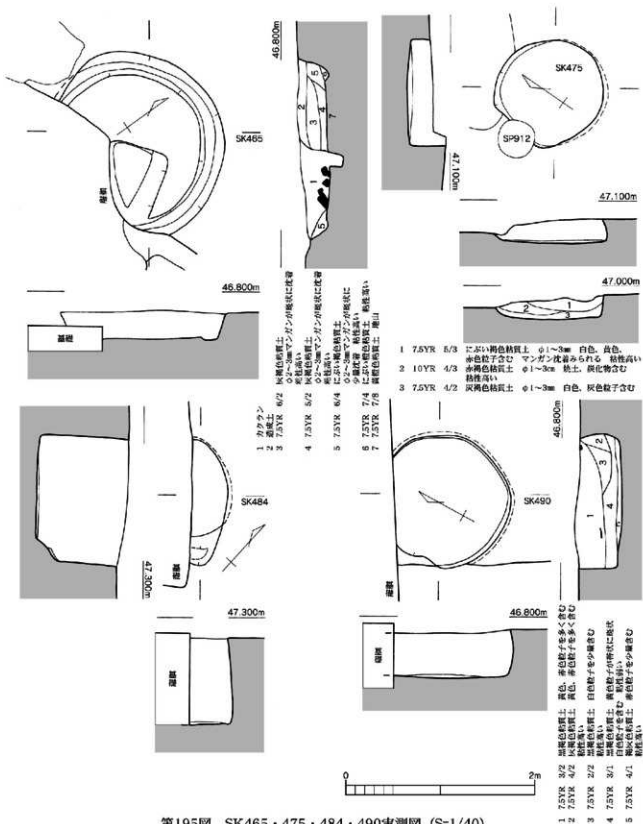
出土遺物

土器 (第197図、図版72)

21は壺口縁部の破片である。23・24は甕の破片の資料である。23の口縁部は外反し、外面に一条の沈線を巡らす。24の口縁部は、如意形を呈する。22は鉢口縁部の破片で、垂下する。26・25は壺、27は壺底部と考えられ、外面は縦位のハケを施し、外底は平底を呈する。

SK552 (第198図、図版59・60)

調査区のB-7に位置する。遺構の上面および両側壁は、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が1.54×1.46m、下端は2.04×2.02mを測り、形状は円形を呈する。壁面は袋状に立ち上がり、深さは1.98mを測る。床面は平坦である。埋土は灰褐色粘質土である。堆積の下層から中層にかけて、完存に近い壺と甕を確認した。壺は口縁部を下へ向き、傾いた状態で、壺内および口縁部周辺で炭化米を確認できた。甕は、伏せた状況であった。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

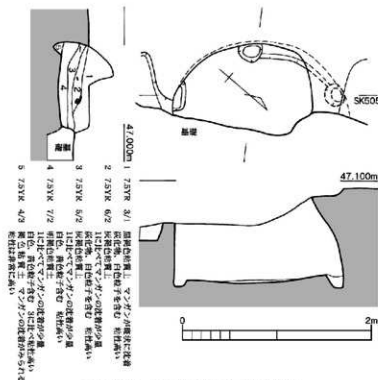


第195図 SK465・475・484・490実測図 (S-1/40)

出土遺物

土器 (第199～201図、図版72～74)

1は、口縁部から底部まで完形の壺である。口縁部は垂下し、内面は粘土帯を貼付けて突出する。口縁部から頸部は窄まり、外面に断面が三角形の突帯を一条巡らす。胴部径は中位に最大値が位置し、外面に断面が台形の突帯を一条巡らす。底部は厚底で、平底を呈する。調整は内面が横位のミガキ、外面は胴部下半が縦位、胴部中位から上半が横位のミガキが施される。頸部は縦位の暗文が施される。



面へ屈曲し、頸部は窄まる。頸部から胴部は「ハ」字形に広がる。調整は内面がミガキ、外面はハゲが施される。12は、口縁部から胴部中位まで完形である。口縁部は外反し、胴部上半に断面が三角形の突帯を一条巡らす。調整は内面が斜位の工具ナデ、外面が斜位のハゲが施される。13は小形の破片で、口縁部は内傾する。14の口縁部は垂下し、内面は粘上帯を貼付けて突出する。胴部上半に断面が三角形の突帯を一条巡らす。15は口縁部が内傾し、頸部内面が突出する。調整は内面がナデ、外面が縦位のハゲが施され、胴部上半から口縁部内面に、ススの付着が認められる。16から28の口縁部は、外反する。18・19の外面の調整は縦位のハゲ後、胴部上半に二条の沈線を巡らす。19・21の外面は、縦位のハゲが施される。24・25・27は胴部上半に、断面が三角形の突帯を一条巡らす。29は口縁部で、口唇部が垂下する。30・31は器台で、32の外面は縦位のハゲが施される。32は高坏脚部の破片で、裾が広がる。33から36は壺底部と考えられる。37の調整は内面がミガキ、外面が縦位のハゲが施され、底部は焼成後に円形の穿孔を一箇所設ける。外底は35が上げ底以外、平底を呈する。36の内底は、凹む。37から49は、甕底部と考えられる。調整は内面がナデ、外底が縦位のハゲ、外底はナデが施される。外底は39・49が脚台状、それ以外は上げ底を呈する。44は胴部下半に、穿孔が施される。

2は赤紫色泥岩製の石剣である。断面は三角形を呈し、切先と基部を欠損する。3は赤紫色泥岩製の石剣と考えられる。断面は杏形を呈し、刃部と基部の境に、加工が施される。4から6は、粘板岩製の砥石である。小形品であるが6は厚さが認められる。砥面は4が3面、5が2面、6が1面認められる。7は石英質岩製の磨石で、一部欠損する。

調査区のB-7に位置する。遺構の北東側は、後出のS572やSP962の削平の影響を受ける。規模は上端が 1.78×1.38 m、下端は 1.7×1.6 mを測り、形状は円形を呈する。壁面は南北が雲状、東西が逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは1.04 mを測る。床面は平坦である。埋土は明橙色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器（第202図、図版74・75）

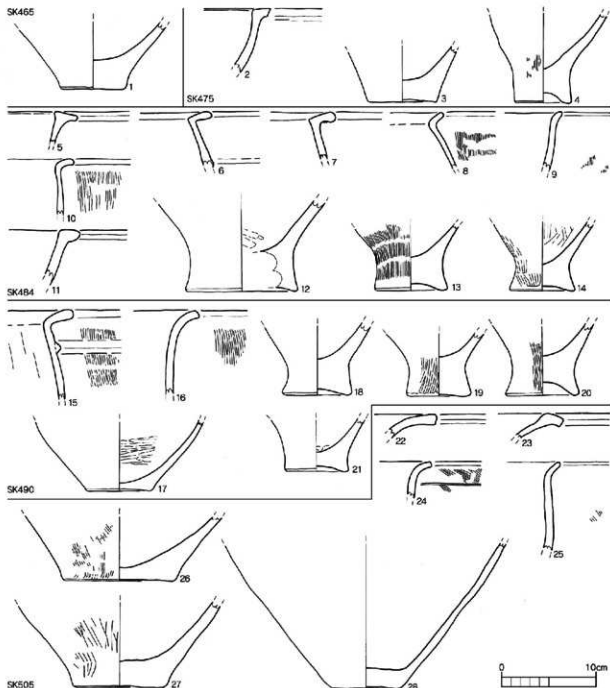
1・2は壺である。1は口縁部が大きく開き、内外面に一条の沈線を巡らす。2は肩部の破片で、無軸羽状文と弧状が施される。3から5は甕である。3は、口唇部に縦位のキザミが施される。4・5の口縁部が如意形を呈し、4の内面は斜位のナデ、外面は縦位のハケが施される。両者の外面は、胴部上半に一条の沈線を巡らす。6は蓋で、頂部は凹む。7から11は壺底部と考えられる。外底は平底を呈する。

石器（第206図、図版84）

8は、粘板岩製の砥石である。小形で、砥面は3面認められる。

SK562（第203図、図版60）

調査区のC-3に位置する。遺構の北側は校舎基礎、東側はSK565による削平の影響を受ける。



第197図 SK465・475・484・490・505出土遺物実測図（S=1/4）

Archaeological site plan of the Katsuta Site (Katsuta Site, Katsuta City, Ibaraki Prefecture). The plan shows the layout of the site with various numbered areas (1-13) and their corresponding soil types and features. A scale bar at the bottom indicates 0 to 20 meters. A north arrow is located in the upper right corner. The plan includes a detailed view of the Katsuta Site (Katsuta Site) and a detailed view of the Katsuta Site (Katsuta Site).

Scale: 0 20m

North Arrow: ↑

Site Plan Details:

- 1. 5 Y R 3/1 黒褐色粘質土 φ1~2mmの黒色土を混在に含む
- 2. 7.5 Y R 5/4 黒褐色粘質土 φ1~2mmの黒色土を混在に含む
- 3. 7.5 Y R 6/3 黒褐色粘質土 φ1~2mmの黒色土を混在に含む
- 4. 7.5 Y R 3/2 黒褐色粘質土 φ1~2mmの黒色土を混在に含む
- 5. 7.5 Y R 5/1 黒褐色粘質土 φ1~2mmの黒色土を混在に含む
- 6. 7.5 Y R 6/6 黒褐色粘質土 φ1~2mmの黒色土を混在に含む
- 7. 5 Y R 6/2 黒褐色粘質土 φ1~2mmの黒色土を混在に含む
- 8. 5 Y R 6/2 黒褐色粘質土 φ1~2mmの黒色土を混在に含む
- 9. 5 Y R 6/2 黒褐色粘質土 φ1~2mmの黒色土を混在に含む
- 10. 5 Y R 6/2 黒褐色粘質土 φ1~2mmの黒色土を混在に含む
- 11. 5 Y R 6/2 黒褐色粘質土 φ1~2mmの黒色土を混在に含む
- 12. 5 Y R 6/2 黒褐色粘質土 φ1~2mmの黒色土を混在に含む
- 13. 5 Y R 6/2 黒褐色粘質土 φ1~2mmの黒色土を混在に含む

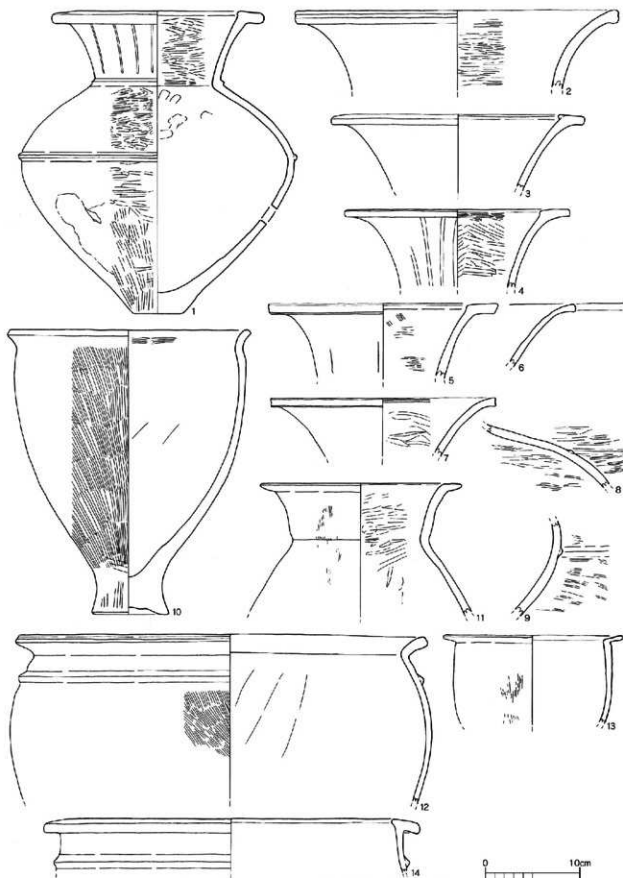
Site Name: Katsuta Site (Katsuta Site, Katsuta City, Ibaraki Prefecture)

第198図 SK552・560実測図 (S=1/40)

出土遺物

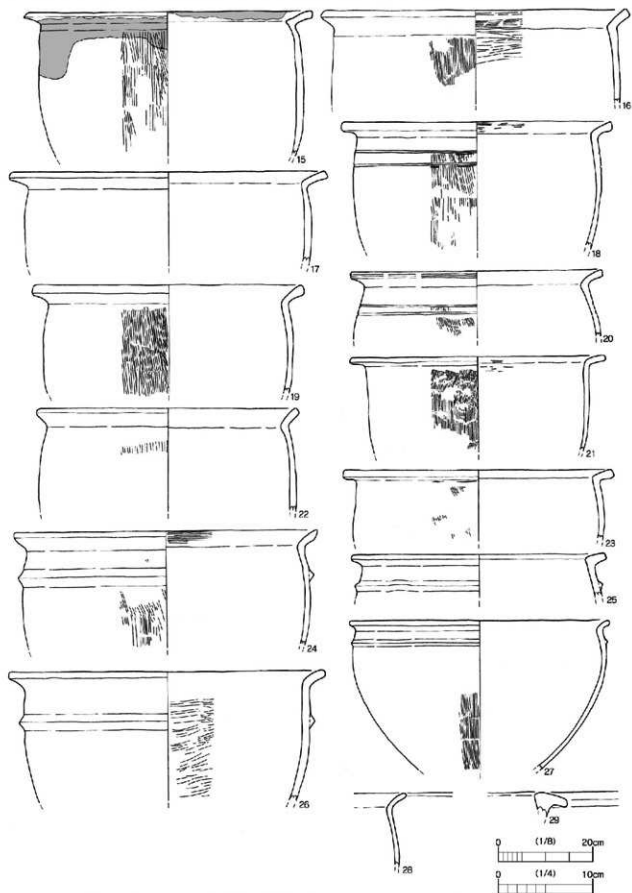
土器 (第204図、図版75)

1から3は壺である。1は口縁部から胴部上半までの破片で、口縁部は外反し、頸部外面に断面が

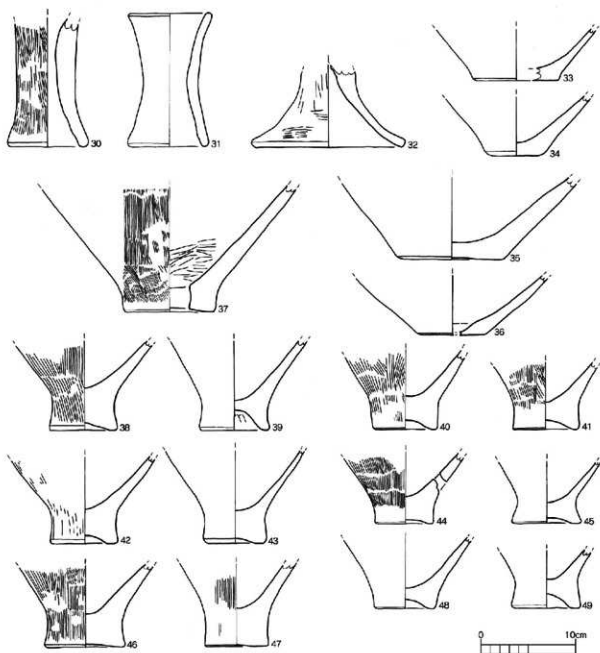


第199図 SK552出土遺物実測図① (S=1/4)

低い三角形の突帯を一条巡らす。2は口縁部が垂下する。3は頸部から底部まで残存し、最大径は肩部に位置する。内面の調整はナデが施され、底部は平底を呈する。4から10は甕である。口縁部は4・5が内傾、7から9は外反する。4・7の胴部外面は、断面が三角形の突帯を一条巡らす。8の胴



第200図 SK552出土遺物実測図② (15~26・28・29はS=1/4, 27はS=1/8)



第201図 SK552出土遺物実測図③ (S=1/4)

部外面は断面が三角形の突帯を一条巡らす。11から13は壺底部である。調整は内面がナデ、外面が縦位のハケが施される。外底は11・13が上げ底、11が平底を呈する。14から17は甕底部と考えられる。15は内面に縦位の暗文、外面は縦位のハケ後ミガキが施される。

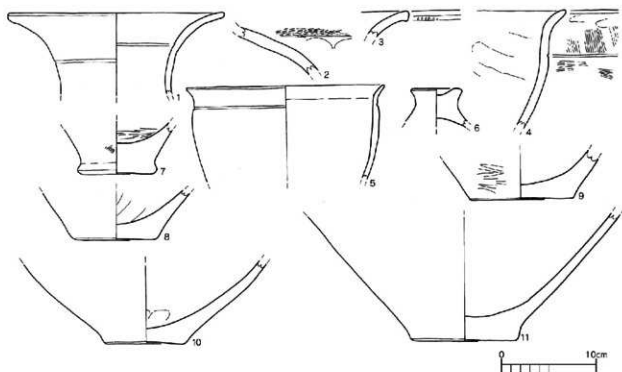
SK570 (第203図、図版60)

調査区のC-2に位置する。遺構の規模は、上端が1.94×18.4m、下端は1.92×1.1mを測り、形状は円形を呈する。壁面は袋状に立ち上がり、深さは1.04mである。床面は平坦で、周溝が確認できる。埋土はにぶい黄橙色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器 (第205図、図版75)

1・2は壺口縁部の破片で、1は口縁部が肥厚、2は大きく開く。3・4は甕口縁部の破片で、3は鋸先状、4の口縁部は上面が平坦で、短い。5・6は壺底部と考えられ、5の外底は上げ底、6は厚底を呈する。7・8は甕底部と考えられ、7は上げ底状、8は脚台状を呈する。



第202図 SK560出土遺物実測図 (S-1/4)

石器 (第206図・図版84)

9は、粘板岩製の砥石である。小形品で、砥面は2面認められる。

円形土坑跡 (逆「ハ」字形)

SK410 (第207図・図版60・61)

調査区のA-2に位置する。遺構は北側の一部が調査区外へ延び、西側はSK415によって削平の影響を受ける。規模は上端が2.9×2.72m、下端は2.6×2.34mを測り、円形状を呈する。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは1.15mである。床面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

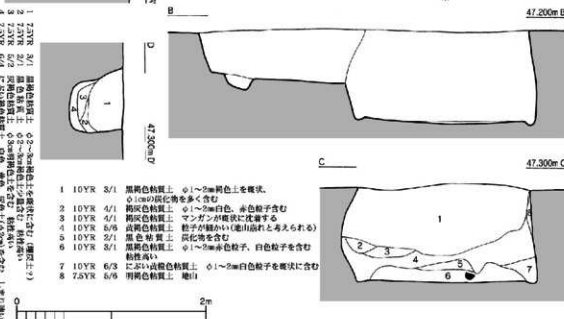
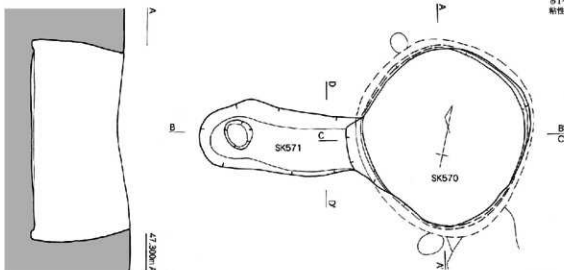
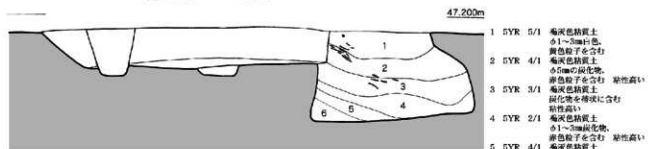
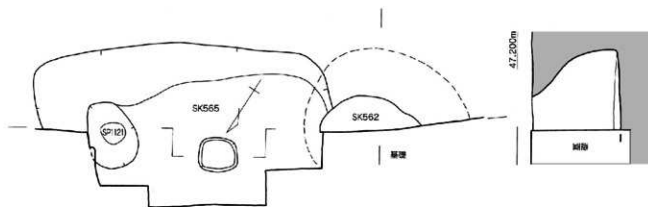
出土遺物

土器 (第208・209図・図版75・76)

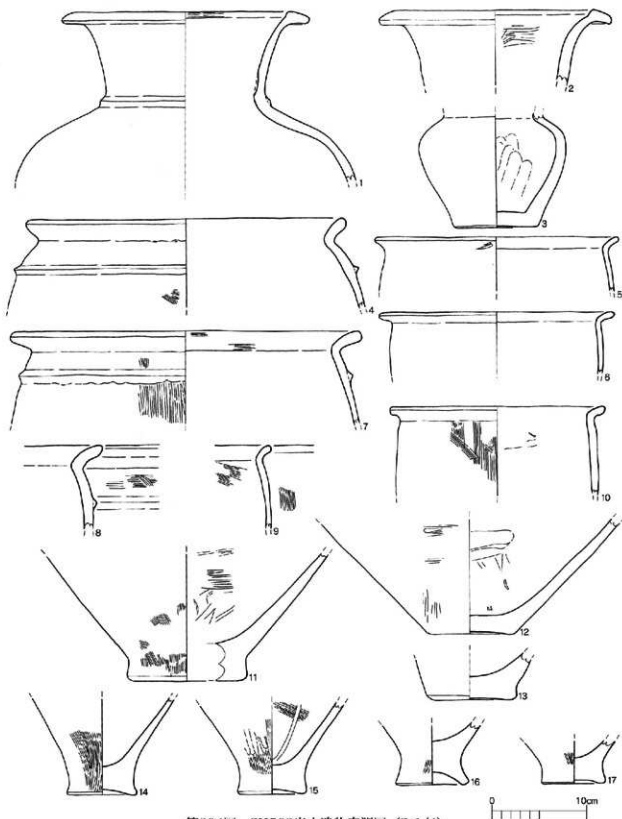
1から6は壺である。1は口縁部から胴部下半まで残存する破片で、口縁部は短く、平坦を呈する。2は口縁部から胴部上半まで残存する破片で、口縁部は外方へ開き、頸部に断面が三角形の突帯を一条巡らす。3から5は口縁部の破片で、3は鋤先状で内面に突出、4は外反、5は開く形状を呈する。6は胴部破片で、偽三角突帯を二条巡らす。7から14は甕である。7・9は口縁部が外反し、外面は縦位のハケを施した後、二条の沈線を巡らす。8は口縁部が平坦に近い形状で、胴部上半に断面が三角形の突帯を一条巡らす。10・11の口唇部は、跳ね上げ状を呈する。12・13の口縁部は、屈曲が弱く、外面は縦位のハケが施される。12の口縁部は、「く」字形を呈し、外面は縦位のハケが施される。14は、口縁部が垂下する。14・15は蓋の破片である。14は頂部が凹み、外面は縦位のハケが施される。17・18は器台で、17の底部は広がらず、内面は工具ナデが施される。18の底部は広がる。19から21は、壺底部と考えられる。19は胴部中位から底部までの破片で、平底を呈する。20の底部は平底を呈し、内面は指頭圧痕が確認できる。21の底部は平底を呈し、外面は縦位のハケが施される。23から25は、甕底部と考えられる。24・25の外面は、縦位のハケが施される。25の外底は浅いが、全て上底を呈する。

石器 (第217図・図版85)

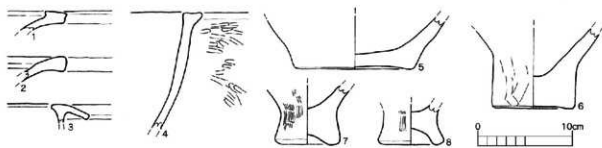
1は粘板岩製の砥石で、砥面は1面認められる。2は砂岩製の砥石で、砥面は1面認められる。



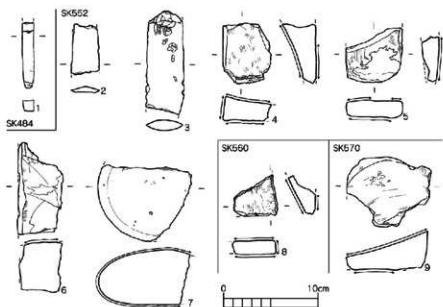
第203図 SK562・565・570・571実測図 (S=1/40)



第204図 SK562出土遺物実測図 (S=1/4)



第205図 SK570出土遺物実測図 (S=1/4)



第206図 SK484・552・560・570出土遺物実測図 (S=1/4)

SK417

(第210図、図版61)

調査区のB-1に位置する。遺構の西側は後出のSK445による削平、北側は校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が1.2×0.4m、下端が1.1×0.3mを測り、形状は隅丸長方形が考えられる。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.42mである。床面は平坦である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器 (第211図、図版61)

1は壺肩部の破片で、無軸羽状文と弧状が施される。2は甕口縁部の破片で、如意形を呈する。

SK443 (第210図、図版64)

調査区のD-1に位置する。遺構の規模は、上端が0.72×0.7m、下端が0.52×0.48mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.52mである。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器 (第211図、図版76)

4は甕底部と考えられ、浅い上げ底を呈する。

SK445 (第210図、図版61)

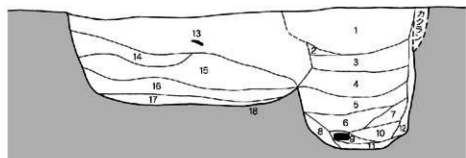
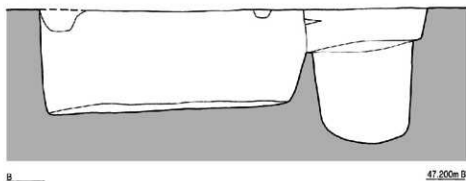
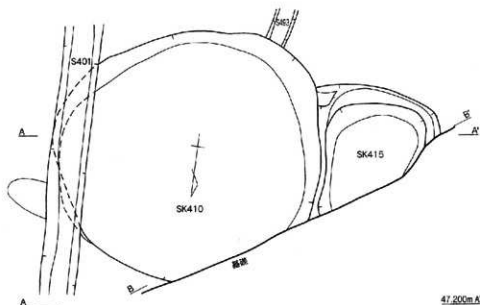
調査区のB-1に位置する。遺構の北側は、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は、上端が1.42×0.64m、1.24×0.56mを測る。壁面は南側が袋状、東・西側が逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.72mである。床面は平坦である。埋土は灰褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器 (第212・213図、図版76・77)

1から4は、壺の破片である。1・2は大きく開き、口唇部は肥厚する。3・4は肩部破片で、3は無軸羽状文と弧状が施される。4は無軸羽状文を施し、断面が三角形の突帯を一条巡らす。5から14は甕である。口縁部は、外反を呈する。5は口縁部から胴部下半まで残存し、胴部上半に断面が三角形の突帯を一条巡らす。調整は内面が指ナデ後斜位のミガキ、外面が頸部付近に指押え、縦位のハケ後横位のミガキが施される。6は口唇部にキザミが施される。胴部上半は一条の沈線を巡らす。7は小形を呈し、調整は胴部上半に縦位のハケ後、一条の沈線を巡らす。8の調整は、外面が斜位のハケが施される。11の調整は内面が横位のミガキ、外面が縦位後、斜位のハケが施される。12から16は甕の破片である。12から16の口縁部は如意形を呈し、15は口唇部に縦位のキザミ、胴部上半に断面が三角形の突帯を一条巡らす。17・18・22は口縁部が短く、17は内面に突出、18・22は外反する。19は頸部に、断面が三角形の突帯を一条巡らす。内面は頸部に横ハケ、口縁部に指押

えが施される。22は頸部下に一条の沈線を巡らし、調整は縦位後斜位のハケが施される。20・21の口縁部は、跳ね上げ状を呈する。20は一部欠損するが、口縁部から底部まで残存する脚付の鉢である。口縁部は如意形を呈し、底部の断面は肥厚である。調整は内面がナデ、外面が縦位のハケが施される。21は蓋と考えられる。27は蓋で、頂部は凹む。23・27は壺の底部と考えられ、調整は内面がナデ、外面が縦位のハケを施し、外底は平底を呈する。25から27は甕底部と考えられ、脚台付を呈する。外底は全て、上げ底を呈する。25・27の調整は外面が縦位のハケが施される。

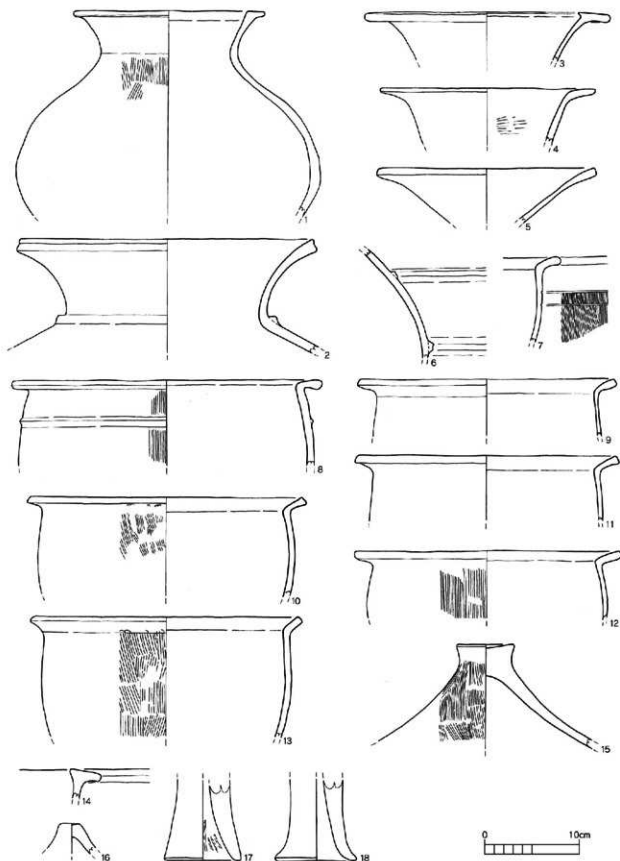


- | | | | |
|----------------------|-------------------|-------------------------------|--------------------|
| 1 7.5YR 3/3 暗褐色鉄質土 | 炭化物多く含む | 11 7.5YR 6/6 褐色粘質土 | 炭化物φ1~2mm白色、赤色砂子、 |
| 2 7.5YR 3/3 暗褐色鉄質土 | 褐色土が底状に入る | 粘土少量含む (11.9.12層の間に灰色粘質層みられる) | |
| 3 7.5YR 3/2 暗褐色鉄質土 | 褐色土が底状に入る | 12 7.5YR 5/4 にぶい褐色粘質土 | 炭化物φ1~2mm白色、赤色砂子含む |
| 4 7.5YR 4/2 灰褐色鉄質土 | 小礫、炭化物含む 遺物取上げ中層 | 13 7.5YR 4/1 灰褐色粘質土 | 炭化物、小礫、白色、赤色砂子多く含む |
| 5 7.5YR 4/3 褐色粘質土 | 小礫、炭化物含む 遺物取上げ中層 | 14 7.5YR 4/4 褐色粘質土 | φ5mmの自然礫、炭化物を含む |
| 6 7.5YR 4/2 灰褐色鉄質土 | 褐色土が底状に入る | 15 7.5YR 5/4 にぶい褐色土 | φ3cmの自然礫を少量含む |
| 7 7.5YR 4/3 褐色粘質土 | 褐色土が底状に入る | 16 7.5YR 5/4 にぶい褐色土 | φ1~2mmの自然礫を含む、粘性高い |
| 8 7.5YR 5/3 にぶい褐色粘質土 | φ1~2mm白色、赤色砂子多く含む | 17 7.5YR 4/2 灰褐色粘質土 | 砂子が細かく、粘性が高い |
| 9 7.5YR 2/1 炭化物層 | 土壌サンプル層 | 18 7.5YR 7/6 褐色土 | 堆土 |
| 10 2.5Y 6/6 明褐色層 | 粘土 | | |

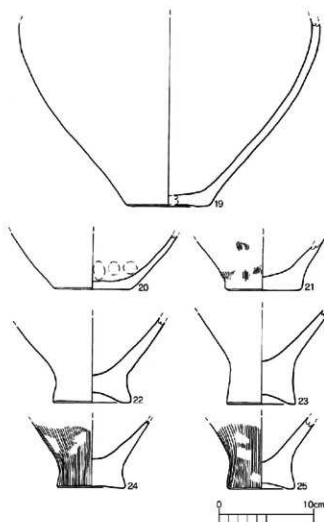
第207図 SK410・415実測図 (S=1/40)

石器 (第217図、図版85)

3は安山岩製の剥片で、風化が著しい。4・5は、凝灰岩製の太形蛤刃石斧である。4は擦化が認められる。6は粘板岩製の砥石で、砥面は1面認められる。



第208図 SK410出土遺物実測図① (S=1/4)



第209図 SK410出土遺物実測図② (S=1/4)

SK446 (第210図)

調査区のD-1に位置する。遺構の規模は、上端が 0.38×0.36 m、下端が 0.24×0.16 mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは 0.43 mである。埋土は灰色粘質土の単層である。

出土遺物

弥生土器片が出土したが、図示可能ではなかった。

SK452 (第210図)

調査区のB-2・3に位置する。遺構の規模は、上端が 1.10×1.10 m、下端が 0.90×0.82 mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは 0.82 mを測る。埋土は灰色粘質土の単層である。

出土遺物

弥生土器片が出土したが、図示可能ではなかった。

SK455 (第214図、図版61)

調査区のC-2に位置する。遺構の規模は上端が 1.62×1.40 m、下端は 1.44×1.35 mを測り、円形状を呈する。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは 1.60 mを測る。床面は平坦である。埋土は検出層が褐色粘質土である。SK451より新しい。遺

構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

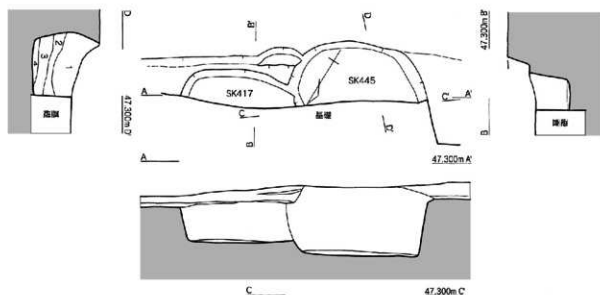
出土遺物

土器 (第215・216図、図版77)

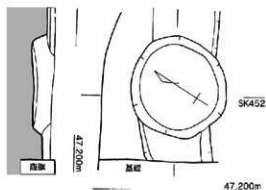
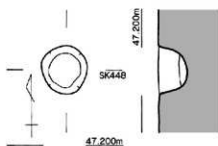
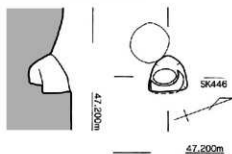
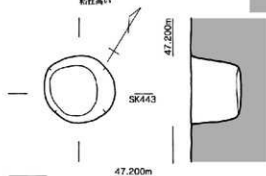
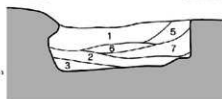
1から13は壺の破片で、口縁部が大きく開く。1・3から5は、口縁部に粘土帯を貼付けて肥厚する。調整は内外面ミガキが施され、2は明瞭に確認できる。7・9の外面は、縦位のハゲが施される。10・13は頸部に二条の沈線を巡らせ、13は朱の塗布が認められる。11は頸部の破片で、一条の「M」字状の突帯を巡らす。14は小形の甕で、口縁部は短く外方へ屈曲し、底部は上げ底を呈する。15から29は、甕の破片である。口縁部の形態は、17・16・19・20・24・25が如意形、17が短く平坦、20・24が外反、15から23・29は「く」字形、28は垂下する。調整は内面がナデ及びミガキ、外面はハゲ及びミガキが施される。22は、胴部上半に断面が三角形の突帯を一条巡らす。29から31は、鉢の破片である。29の口縁部は、外面へ少し屈曲する。30の口縁部は、内面に粘土帯を貼付けて突出する。調整は内面がミガキ、外面はナデが施される。31の口縁部は短く、外面へ屈曲し、垂下する。33から37は、壺底部と考えられる。33・35・36の外底は平底、34・37は上げ底を呈する。38から48は、甕底部と考えられる。外底は $40 \cdot 42$ から 44 が上げ底、39・47は平底を呈する。調整は内面がナデ、外面は縦位のハゲが施される。

石器 (第217図、図版85)

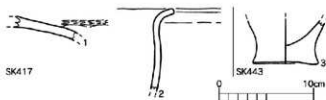
7は黒曜石製の石鏃である。8は凝灰岩製の石庖丁で、約1/2欠損する。9は粘板岩製の砥石で、砥面は1面認められる。10は花崗岩製の砥石で、砥面は1面認められる。



- 1 2.5YR 4/6 赤褐色粘質土 焼土含む ほり削い
- 2 2.5YR 4/3 にがい赤褐色粘質土 焼土含む ほり削い
- 3 2.5YR 4/2 灰褐色粘質土 炭化物、焼土含む ほり強い
- 4 2.5YR 7/6 地山
- 5 10YR 5/4 赤褐色土 焼土(φ5cm)含む
- 6 10YR 3/1 暗赤褐色粘質土 炭化物、焼土含む ほり削い
- 7 7.5YR 4/2 灰褐色粘質土 φ10cm 灰色粒子塊状に含む 粘性强い



第210図 SK417・443・445・446・448・452実測図 (S=1/40)



第211図 SK417・443出土遺物実測図 (S=1/4)

平坦である。埋土は褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

弥生土器片が出土したが、図示可能ではなかった。

SK549 (第218図)

調査区のC-7に位置する。遺構の上面は、別遺構の削平の影響を受ける。規模は、上端が 0.7×0.54 m、下端が 0.34×0.3 mを測り、形状は円形を呈する。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは 0.5 mである。床面は平坦である。埋土はにぶい橙色粘質土である。

出土遺物

土器 (第219図、図版77)

- 1は甕口縁部の破片で、口縁部は「く」字形を呈し、頸部下に断面が三角形の突帯を一条巡らす。
- 2は鉢口縁部の破片で、口縁部が長く平坦を呈する。

SK554 (第218図、図版61)

調査区のC-4に位置する。遺構は、南側をSK556による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が 0.64×0.64 m、下端が 0.53×0.43 mを測り、形状は円形を呈する。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは 0.12 mである。床面は平坦である。

出土遺物

土器 (第219図、図版77)

- 3は甕底部と考えられ、外底は上げ底を呈する。

SK579 (第218図)

調査区のC-4に位置する。浄化槽撤去に伴い確認した遺構である。遺構の南西側は、削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が 1.20×0.68 m、下端が 0.55×0.40 mを測り、形状は隅丸方形と考えられる。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは 0.37 mである。床面は平坦であるが、東側で段を一段設ける。

出土遺物

弥生土器片が出土したが、図示可能ではなかった。

長方形土坑跡 (深)

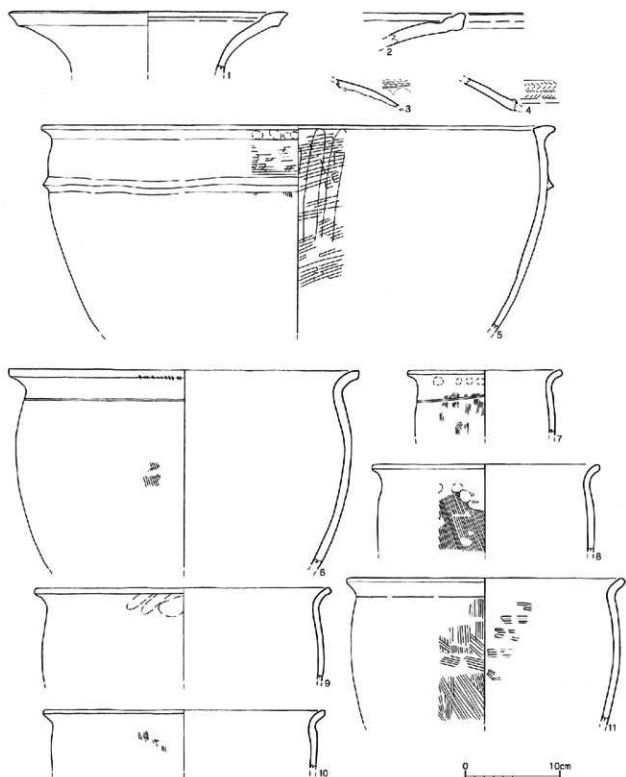
SK415 (第207図、図版61)

調査区のA-2に位置する。遺構は、北側の一部が、調査区外へ延びる。規模は残存長で、上端が 1.66×1.26 m、下端が 0.88×0.77 mを測り、隅丸方形形状を呈し、壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは 1.57 mである。床面は平坦である。埋土は褐色粘質土で、堆積は11層に分層が可能である。

出土遺物

土器 (第220図、図版77)

- 1は甕口縁部で、大きく開き、口唇部は肥厚する。2は、甕の頸部から胴部上半まで残存する破片で、頸部に断面が三角形の突帯を一条巡らす。3から5は甕である。3は口縁部から胴部中位まで残

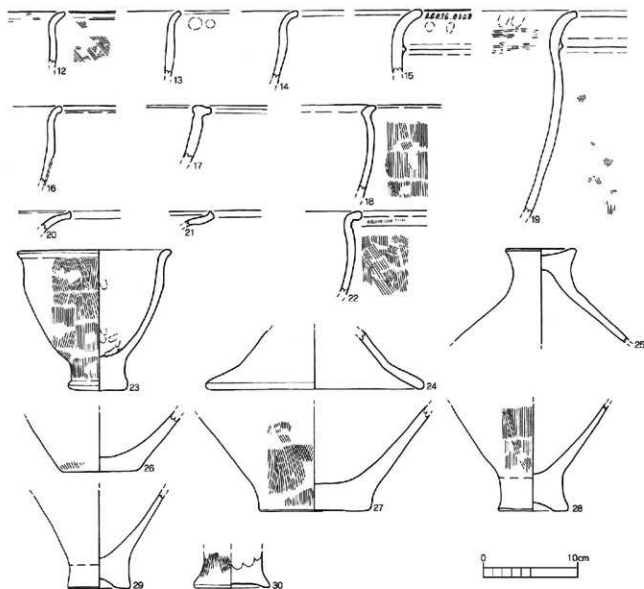


第212図 SK445出土遺物実測図① (S=1/4)

存し、胴部中位に断面が三角形の突帯を一条巡らす。4は口縁部が残存する破片で、外反する。5は口縁部から胴部中位まで残存する破片で、口縁部は「く」字形を呈する。3・4の外面は、縦のハケが施される。6は高坏の坏部から脚部が残存し、脚部内面はケズリが施される。7は甕底部で、外底は上底を呈する。

SK419 (第221図、図版61)

調査区のA-1に位置する。遺構は校舎基礎によって遺構は南北に分かれ、東側と南側は削平の



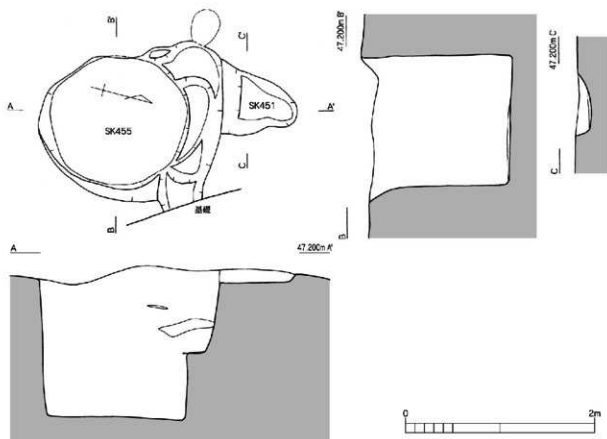
第213図 SK445出土遺物実測図② (S=1/4)

影響を受ける。規模は残存長で、北側の上端が 1.55×1.41 m、下端は 1.15×0.95 m、深さ 0.5 m、南側の上端が 1.32×1.16 m、下端が 1.12×0.95 m、深さ 0.76 mを測る。形状は隅丸長方形が考えられる。壁面は逆「八」字形で立ち上がる。床面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器 (第222図、図版78)

1から3は壺である。1は胴部から口縁部へ内湾し、口縁部と胴部上半に断面が三角形の突帯を一条巡らす。2・3は、口縁部が肥厚する。4から12は壺の破片である。4から8・12の口縁部は如意形を呈し、4は外面に斜位のハケを施した後、一条の沈線を巡らす。9の口縁部は外反、11は口縁部が短く、「く」字形を呈する。13は鉢口縁部の破片である。14・15は鉢である。14の口縁部は断面が方形を呈し、底部から胴部は湾曲せず立ち上がる。底部は肥厚で、外底は平底を呈する。口縁部下には、断面が三角状の把手を2箇所設ける。調整は内面が横位のミガキ、外面が斜位のハケが施される。15は底部を欠損する。口縁部は断面が丸く整形され、外面に断面が隅丸台形の把手を2箇所設ける。胴部から口縁部は、内湾気味に立ち上がる。16は甕口縁部と考えられる。17は器台である。18から20は壺底部である。19は肥厚で、外面に縦位のハケが施される。底部は20が平底、



第214図 SK451・455実測図 (S=1/40)

それ以外は上げ底を呈する。21 から 27 は甕の底部である。底部は 24 が脚台状、それ以外は平底を呈する。

SK440 (第 223 図、図版 62)

調査区の B-2 に位置する。遺構の上面は、削平の影響を受ける。規模は残存長で上端が 2.62×1.36 m、下端が 1.97×1.20 m を測り、形状は隅丸長方形を呈する。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは 0.57 m である。南東側は一段テラスが認められ、床面は平坦である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器 (第 225 図、図版 78)

1 は甕口縁部の破片で、短く外方へ屈曲する。2 は鉢口縁部の破片で、口縁部が僅かに外方へ屈曲する。3 は甕の底部で、底端部から窄まり胴部へ立ち上がる。外底は上げ底を呈する。

SK454 (第 223 図、図版 62)

調査区の A-2 に位置する。遺構の西側は、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が 2.08×0.50 m、下端が 1.34×0.23 m を測り、形状は隅丸長方形が考えられる。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは 0.59 m である。床面は平坦である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

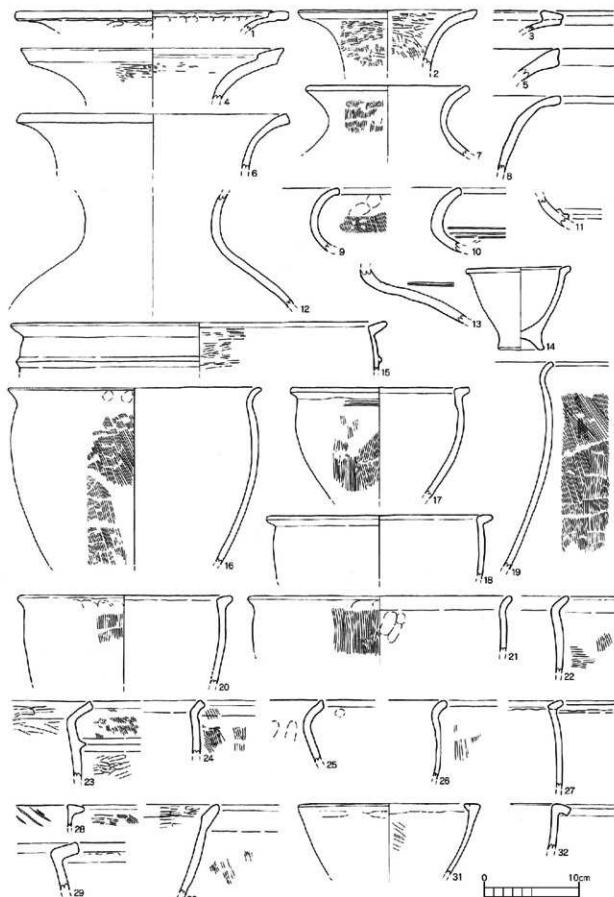
出土遺物

土器 (第 225 図、図版 78)

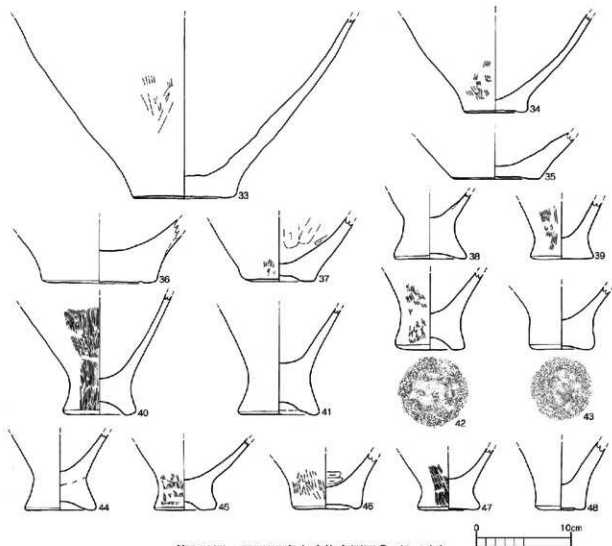
4 から 6 は甕である。4 は口縁部から胴部が残存する破片で、口縁部は短い。5 は頸部から胴部が残存し、縦位のハケ後、頸部に一条の沈線を巡らす。6 は口縁部から胴部が残存し、「く」字形に近い様相を呈し、胴部上半に断面が三角形の突帯を一条巡らす。7 は甕底部で、外底は上げ底を呈する。

石器 (第 226 図、図版 85)

1 は粘板岩製の砥石で、砥面は 1 面認められる。



第215図 SK455出土遺物実測図① (S=1/4)



第216図 SK455出土遺物実測図② (S=1/4)

SK463 (第223図、図版62)

調査区のB-2に位置する。遺構は、SK427・SK433・S413による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が1.42×0.96m、下端が0.80×0.42mを測り、形状は隅丸長方形が考えられる。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.59mである。床面は平坦である。

出土遺物

なし。

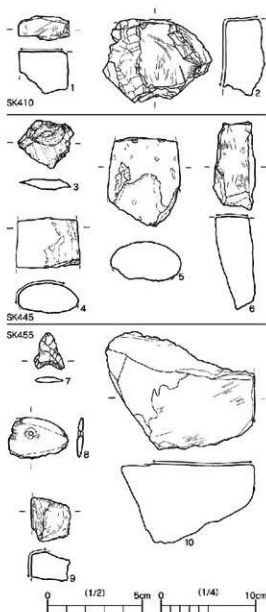
SK464 (第224図、図版62)

調査区のA-1に位置する。遺構の北側は校舎基礎、上面はSD401による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が1.10×0.30m、下端は0.70×0.21mを測る。壁面は袋状に立ち上がり、深さは0.9mである。床面は平坦である。埋土は黒褐色、である。遺構の性格は、埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器 (第225図、図版78)

8は壺口縁部で、頸部から口縁部は大きく開く。9は壺口縁部である。口唇部は、ナデによって凹む。10は壺である。口縁部は短く外側へ外反する。調整は、外面に縦ハケ、内面は口縁部に横ハケが施される。11は壺底部と考えられる。外底は、浅い上げ底を呈する。調整は、外面に縦位のミガキ後縦ハケが施される。12は壺底部と考えられ、外底は平底を呈する。



第217図

SK410・445・455出土遺物実測図

(1・2・4～6・8～10はS=1/4, 3・7はS=1/2)

の粘土紐を一条巡らす。外面は、縦位のハゲが施される。20の口縁部は、逆「L」字形を呈する。口唇部は、跳ね上げを呈する。調整は内面が縦位と斜位のミガキ、外面が縦位のハゲが施される。21・22は口縁部が平坦を呈し、断面が方形の粘土紐を巡らす。23は、甕底部と考えられる。外面は、縦位のハゲが施される。外底は上げ底で、踏ん張る形態を呈する。

SK540 (第227・228図、図版62)

調査区のB-7に位置する。遺構は校舎基礎およびSP1112・1113による削平の影響を受け、SK550との関係は不明である。規模は残存長で、上端が1.55×1.40m、下端は1.44×1.10mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.41mである。床面は平坦である。埋土は褐色粘質土である。

出土遺物

土器 (第229図、図版78)

1は壺口縁部の破片である。2は壺底部の破片で、外面は縦位のミガキが施される。

SK466 (第224図、図版62)

調査区のB-3・4に位置する。遺構の中心は、校舎基礎による削平の影響を受け東西に分かれる。規模は上端が0.85×0.25m、下端は0.80×0.65mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.41mである。床面は平坦である。埋土は褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器 (第225図、図版78)

13・14は甕である。口縁部から体部まで残存し、口縁部は如意形を呈する。15・16は、壺の底部と考えられる。15の外底は平底を呈し、器厚である。16の外底は、浅い上げ底を呈する。

石器 (第226図、図版85)

2は凝灰岩製の太形始刃石斧で、基部と刃部を欠損する。

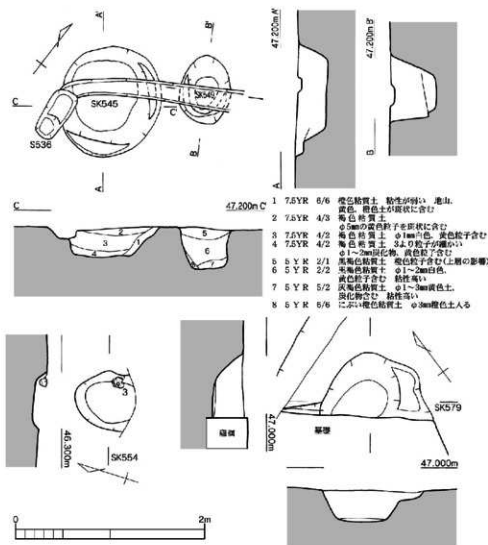
SK525 (第224図、図版62)

調査区のB-8に位置する。遺構の北・西側は、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が1.28×0.72m、下端が0.50×0.42mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.91mである。床面は緩やかに凹む。埋土は明褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

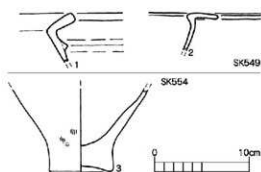
出土遺物

土器 (第225図)

18は壺口縁部の破片で、頸部から口縁部にかけて外反する。内面は、横位のミガキが施される。17・19から22は甕の破片である。17の口縁部は、如意形を呈する。調整は外面に縦位のハゲ後、胴部上半に一条の沈線を巡らす。19は口縁部外面に、断面が低い三角形



第218図 SK545・549・554・579実測図 (S=1/40)



第219図 SK549・554出土遺物実測図 (S=1/4)

石器 (第230図、図版85)

1・2は凝灰岩製の石庖丁である。1は体部が残存し、穿孔は1カ所施される。2は器壁が薄く、体部が残存する。穿孔は1カ所施されるが、小さい。

SK550 (第227・228図、図版63)

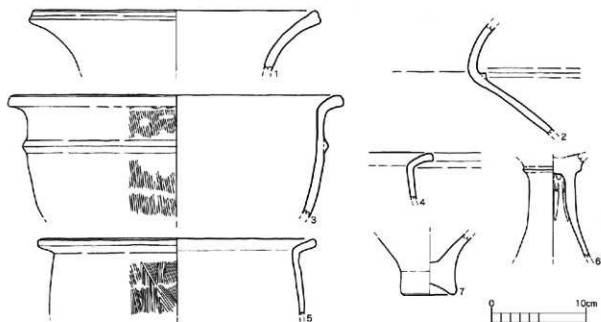
調査区のB-7に位置する。遺構は、校舎規模およびS539による削平の影響を受け、西側の立ち上がりは確認できなかった。規模は残存長で、上端が3.80×3.70m、下端は3.28×3.22mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.70mを測る。

埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物

土器 (第229図、図版78)

3は壺口縁部の破片で、粘土帯を貼付けて肥厚する。4から6は甕の破片で、口縁部は5が外面へ屈曲、4・6は如意形を呈する。7は甕底部と考えられ、調整は内面がナデ、外面が縦位のハケが施される。外底は上げ底を呈する。8は壺底部と考えられ、外底は平底を呈する。



第220図 SK415出土遺物実測図 (S=1/4)

石器 (第230図、図版85)

3は凝灰岩製の石剣である。刃部の鋸は三角形に施され、断面は杏形を呈する。把手は袈りが2カ所施される。

SK574 (第224図、図版64)

調査区のC・D-2に位置する。遺構の東側は校舎基礎、中央は柱穴跡による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が 2.3×0.32 m、下端が 1.1×0.24 mを測り、形状は隅丸長方形と考えられる。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.12 mである。埋土は黒褐色粘質土の単層である。

出土遺物

弥生土器片が出土したが、図示可能ではなかった。

長方形土坑跡 (浅)

SK424 (第231図、図版63)

調査区のC-1に位置する。遺構の北側は、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が 1.92×1.22 m、下端は 1.8×1.16 mを測り、隅丸方形を呈する。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.30 mを測る。である。床面は平坦である。埋土はにぶい褐色粘質土の単層である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器 (第232図)

1は壺底部と考えられ、浅い上げ底を呈する。2・3は壺底部と考えられ、平底を呈する。

SK426 (第231図、図版63)

調査区のB-2に位置する。遺構は、北東側のSK422の削平の影響を受ける。規模は、上端が 1.48×0.8 m、下端は 0.56×0.54 mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは22 mである。床面は平坦で、東側は段を一段設ける。埋土は緑灰色粘質土である。

出土遺物

土器 (第232図、図版78)

4は壺の破片で、口縁部は内傾し、外面は断面が三角形の突帯を一条巡らす。

石器 (第233図、図版86)

1は黒曜石製の石鏃である。

SK435 (第231図)

調査区のA-2に位置する。遺構は、SP909による削平の影響を受ける。規模は上端が2.10×1.42m、下端は1.54×1.15mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.27mを測る。

床面は平坦である。埋土は褐色粘質土の単層である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

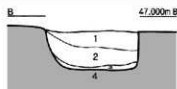
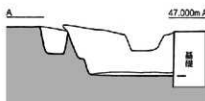
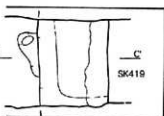
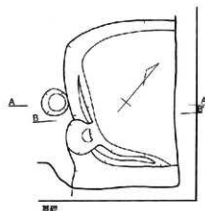
出土遺物

土器 (第232図、図版78)

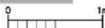
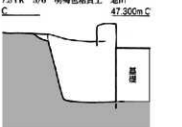
5は壺肩部の破片で、断面が三角形の突帯を一条巡らし、無軸羽状文が施される。7から9は甕である。8は口縁部の破片で、内面の頸部に一条の沈線、外面は縦位のハケ後、頸部に低い断面が三角形の突帯を一条巡らす。7は口縁部から胴部上半まで残存する破片で、胴部上半に一条の沈線を巡らす。7・9は口縁部から胴部まで残存する破片で、口縁部は如意形を呈し、外面は縦位のハケ後、一条の沈線を巡らす。10は壺、11・12は甕の底部と考えられ、上げ底を呈する。

石器 (第233図、図版86)

2は砂岩製の砥石である。砥面は1面認められる。



- 1 7.5YR 2/1 黒色粘質土 炭化物大きい 粘性高い
- 2 7.5YR 4/1 黒褐色粘質土 炭化物(0.2mm)含む 粘性高い
- 3 7.5YR 3/1 黒褐色粘質土 粒子細かく粘性高い
- 4 7.5YR 5/6 明褐色粘質土 地山



第221図 SK419実測図 (S=1/40)

SK470 (第231図、図版63・64)

調査区のC-3に位置する。遺構は、校舎基礎による削平を受ける。規模は残存長で、上端が0.99×0.88m、下端は0.95×0.87mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.18mを測る。床面は平坦である。埋土は2層に分層が可能で、上層は暗褐色粘質土、下層は褐粘質土である。上層の西側から、土器片が集中して出土したため、廃棄土坑と判断した。

出土遺物

土器 (第232図、図版78)

13は壺で、頸部が残存する。頸部には断面が低い三角形の突帯を一条巡らし、無軸羽状文と弧状が施される。

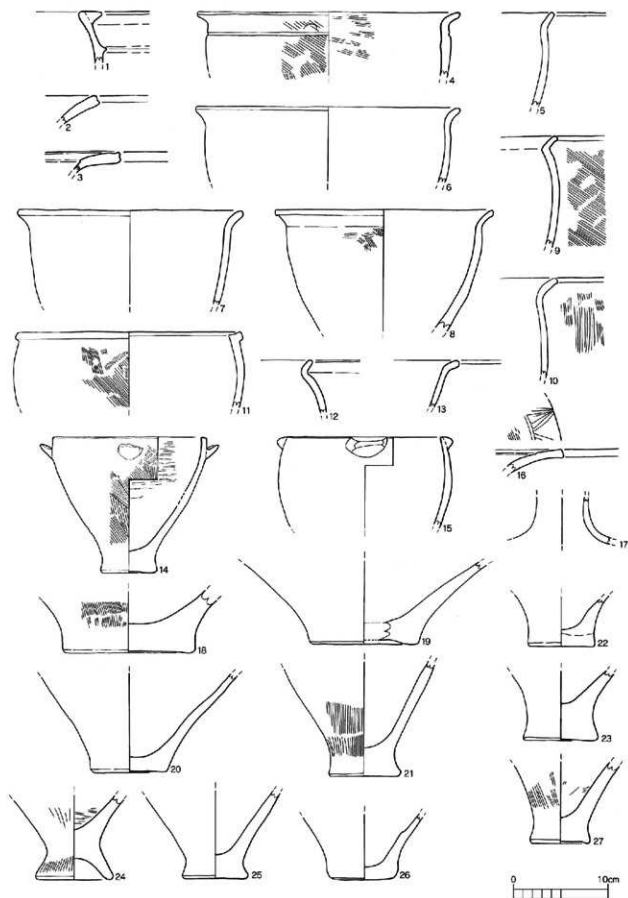
SK485 (第231図、図版64)

調査区のA-1・2に位置する。遺構の東側は、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が1.76×0.78m、下端は1.40×0.46mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.35mを測る。床面は平坦である。埋土は黒褐色、灰褐色粘質土である。

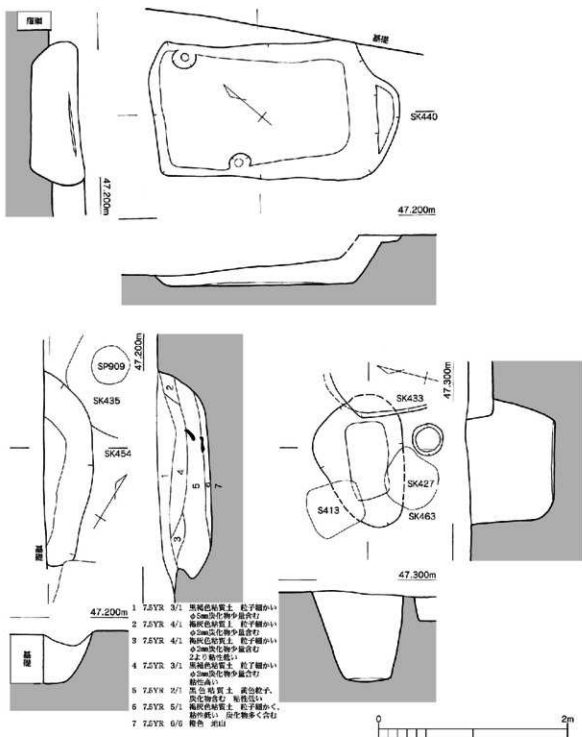
出土遺物

土器 (第232図、図版78)

14・15は、壺肩部の破片である。14は、無軸羽状文と弧状を施す。15は断面が低い三角形の突帯を一条巡らせ、無軸羽状文を施す。16は甕底部と考えられ、調整は内面がナデ、



第222图 SK419出土文物实测图 (S=1/4)



第223図 SK440・454・463実測図 (S=1/40)

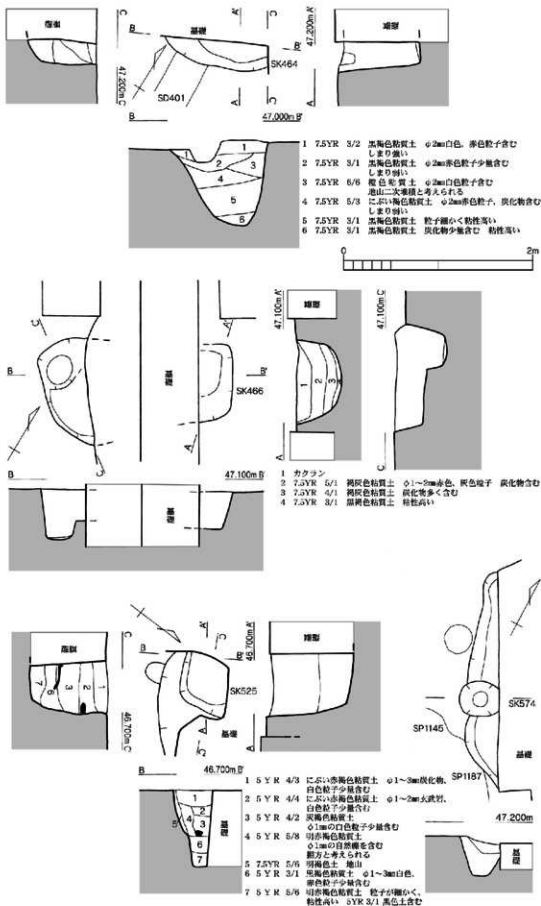
外面は縦位のハケが施される。外底は円形の穿孔が一箇所施される。

SK512 (第234図)

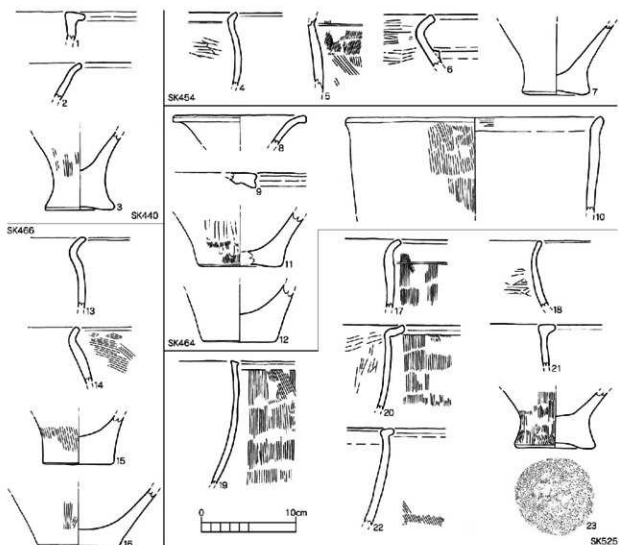
調査区のC-6に位置する。遺構の南・東・西側は校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が 0.74×0.64 m、下端が 0.56×0.54 mを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは 0.34 mを測る。床面は、北側へ傾斜する。

出土遺物

弥生土器片が出土したが、図示可能ではなかった。



第224図 SK464・466・525・574実測図 (S=1/40)



第225図 SK440・454・464・466・525出土遺物実測図 (S=1/4)

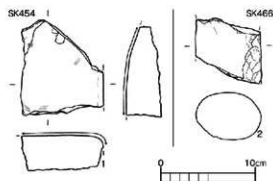
SK565 (第203図)

調査区のC-3に位置する。遺構の北側は校舎基礎、東側はSP821の削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が2.48×1.64m、下端が2.23×1.37mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.49mを測る。床面は平坦で、中央に径0.36m、深さ0.11mのSP1133が確認される。埋土は2層に分層が可能で、上層がにぶい黄褐色粘質土、下層が灰黄褐色粘質土である。

出土遺物

土器 (第235図、図版79)

1は帯の破片で、胴部が球状を呈し、胴部中位に断面が半円状の突帯を一条巡らす。2から5は甕である。3は、胴部上半に断面が三角形の突帯を一条巡らす。4・5は口縁部が短く、外反する。6は甕底部と考えられ、底端部は広がり、外底部は上げ底を呈する。

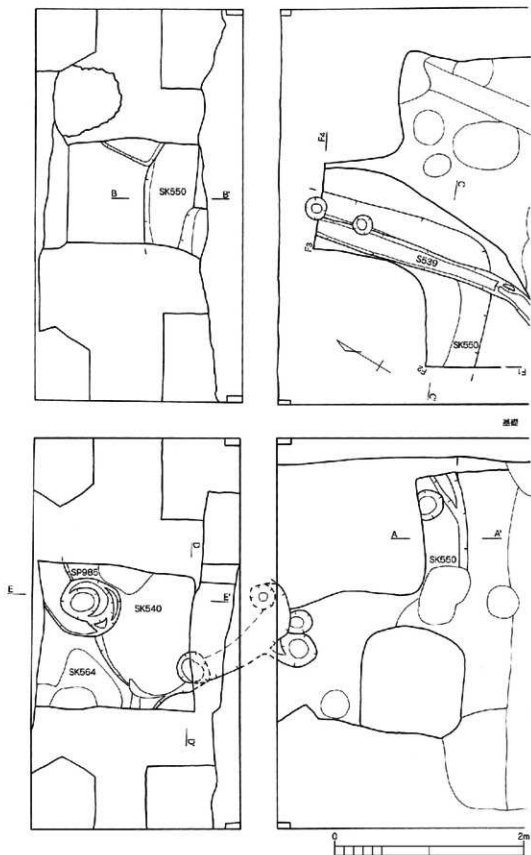


第226図 SK454・466出土遺物実測図 (S=1/4)

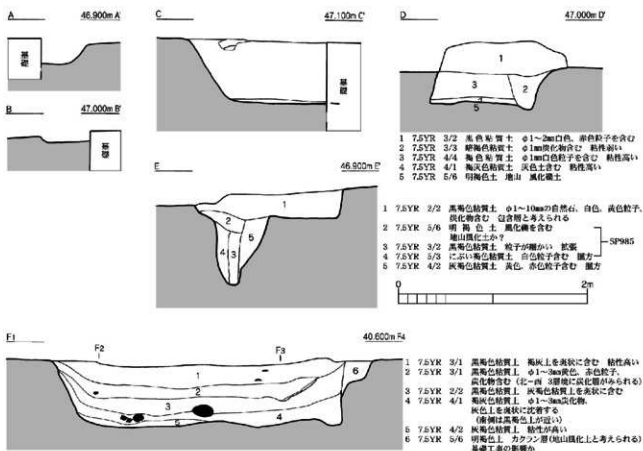
SK566 (第234図、図版64)

調査区のC-3に位置する。遺構の上面は擾乱、北側は、SP1192の削平の影響を受ける。規模

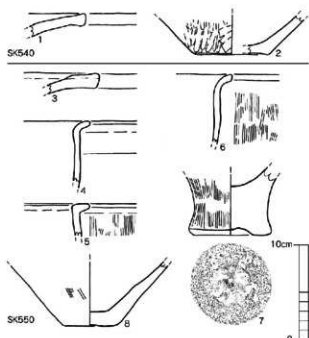
は上端が1.66×1.23 m、下端は1.41×1.09 mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.24 mを測る。床面は平坦である。埋土は褐灰色粘質土の単層である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。



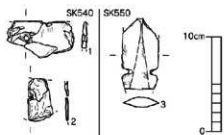
第227図 SK540・550実測図 (S=1/40)



第228図 SK540・550実測図 (S=1/40)



第229図 SK540・550出土遺物実測図 (S=1/4)



第230図 SK540・550出土遺物実測図 (S=1/4)

出土遺物

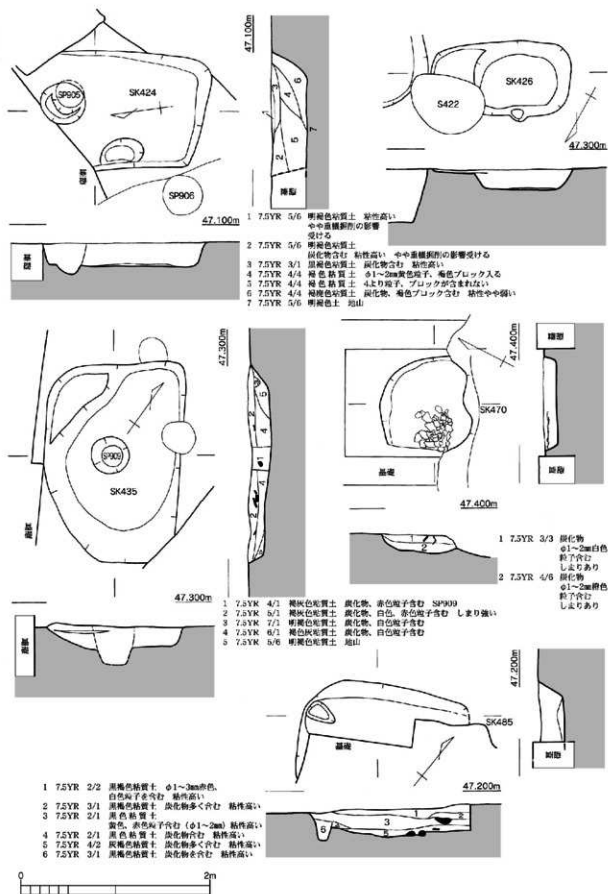
土器 (第235図)

7から9は壺底部と考えられ、外底は7・9が上げ底、8は僅かに上げ底を呈し、底部裾が広がる。

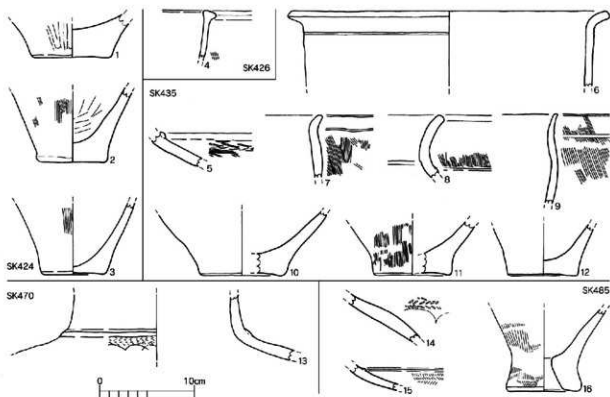
SK571 (第203図、図版64)

調査区のC-3に位置する。遺構の東側は、後出のSK570の削平の影響を受ける。規模は、上端が1.72×0.74m、下端は1.42

×0.42mを測り、形状は隅丸長方形を呈する。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.52mである。床面は平坦で、西側で径0.3m、深さ0.12mの柱穴跡が確認できる。埋土はにぶい褐色粘質土である。



第231図 SK424・426・435・470・485実測図 (S=1/40)

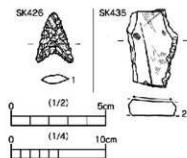


第232図 SK424・426・435・470・485出土遺物実測図 (S=1/4)

出土遺物

土器 (第235図)

10は壺口縁部で、口縁部外面に粘土帯を貼付けて肥厚する。11は小形の壺の破片で、「く」字形を呈する。12は甕口縁部で、短く外面へ屈曲し、ナデにより口縁部上面は凹む。13は、甕底部と考えられる。調整は外面が縦位のハケが施される。外底は中央付近が上げ底を呈する。



第233図

SK426・435出土遺物実測図
(1はS=1/2, 2はS=1/4)

SK587 (第234図)

調査区のB・C・5に位置する。遺構は、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が1.34×0.94m、下端は1.20×0.73mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.37mである。床面は平坦である。埋土にはぶい褐色粘質土である。

出土遺物

なし。

方形土坑跡

SK423 (第236図、図版64)

調査区のB・2に位置する。遺構の西側は、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が1.34×1.26m、下端は1.09×1.09mを測り、隅丸形状を呈する。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.44mを測る。床面は平坦である。

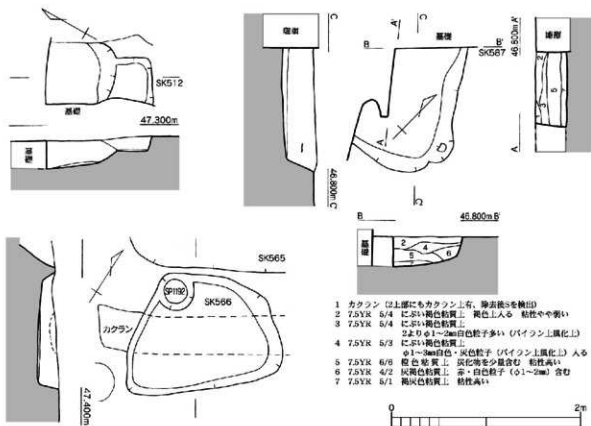
出土遺物

土器 (第238図、図版78)

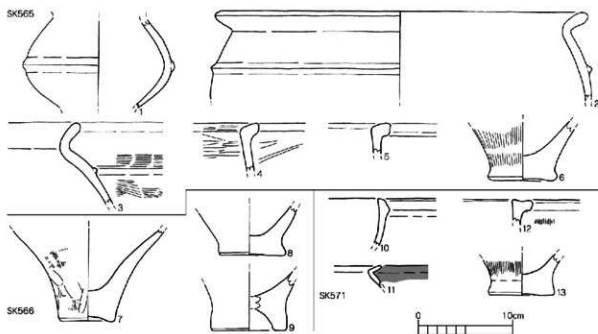
1は壺肩部の破片で、外面は横位のミガキ後、断面が三角形の低い突帯を一条巡らし、無軸羽状文が施される。

SK434 (第236図)

調査区のC-2に位置する。遺構の西側は、校舎基礎による削平の影響を受ける。遺構の規模は、上端が0.80×0.60m、下端が0.71×0.41mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.27mである。床面は平坦である。



第234図 SK512・566・587実測図 (S=1/40)



第235図 SK565・566・571出土遺物実測図 (S=1/4)

出土遺物

土器 (第238図、図版78)

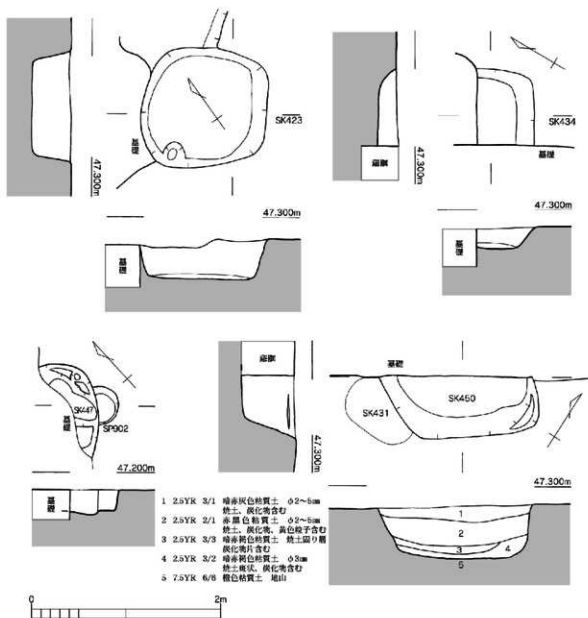
2は甕の破片で、口縁部から胴部が残存する。調整は内面が横位のミガキ、外面が横位のハケが施される。

SK447 (第236図)

調査区のC-2に位置する。遺構はSP902を削平し、西側は、校舎基礎による削平の影響を受け、SP902より後出である。規模は残存長で、上端が0.80×0.50m、下端が0.25×0.24mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.27mである。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から廃棄土坑と判断した。

出土遺物

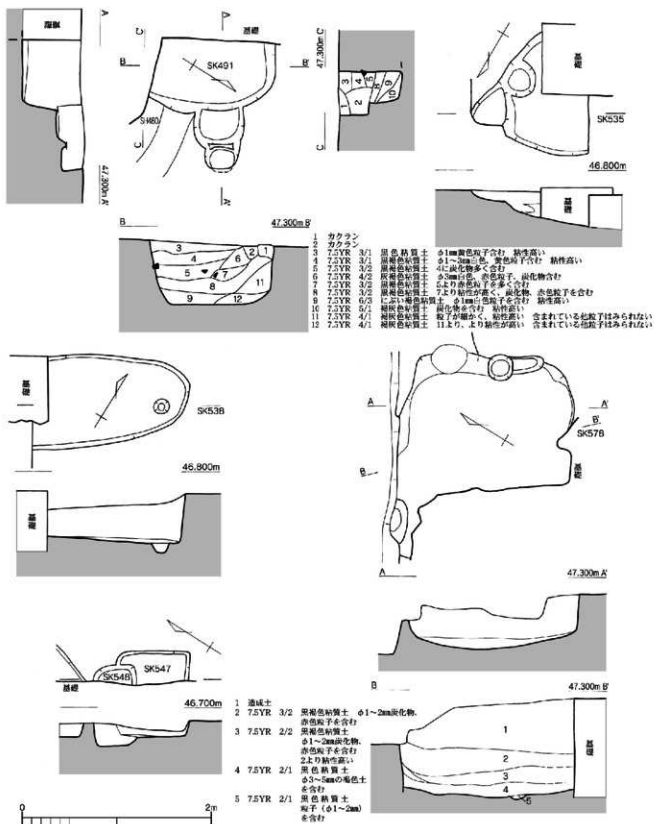
弥生土器片、上層より土師器が出土した。



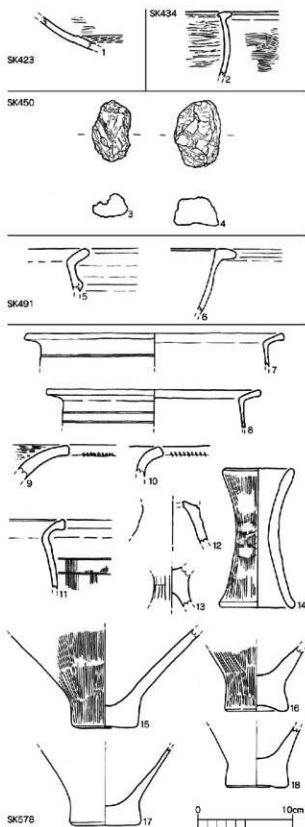
第236図 SK423・434・447・450実測図 (S=1/40)

SK450 (第236図)

調査区のC-2に位置する。遺構の北側は、校舎基礎による削平の影響を受け、SK431より後出である。規模は残存長で、上端が1.50×0.66m、下端が1.36×0.43mを測り、形状は隅丸長方形が考えられる。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.58mである。床面は平坦である。埋土は暗褐色粘質土である。



第237図 SK491・535・538・547・548・578実測図 (S=1/40)



第238図 SK423・434・450・491・578
出土遺物実測図 (S=1/4)

SK547 (第237図、図版65)

調査区のD-8に位置する。遺構の西側は、校舎基礎とSK548による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が 0.78×0.34 m、下端が 0.69×0.32 mを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは 0.13 mを測る。

出土遺物

土製品 (第238図、図版79)

3・4は焼土で、胎土内に繊維の痕跡が明瞭に残る。

SK491 (第237図、図版64)

調査区のB-5に位置する。遺構は西・南側に校舎基礎と性格不明な遺構の削平を受け、SC480より後出である。規模は残存長で、上端が 1.28×0.76 m、下端は 1.18×0.66 mを測り、隅丸方形を呈する。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは 0.62 mである。床面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物

土器 (第238図、図版78)

5・6は、甕の破片である。5の口縁部は「く」字形を呈し、胴部上半に断面が三角形の突帯を一条巡らす。6の口縁部は、外面へ屈曲し、垂下する。

SK535 (第237図)

調査区のD-8に位置する。遺構の南側は、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が 1.26×0.56 m、下端が 1.09×0.80 mを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは 0.37 mを測る。床面は、西側へ傾斜する。

出土遺物

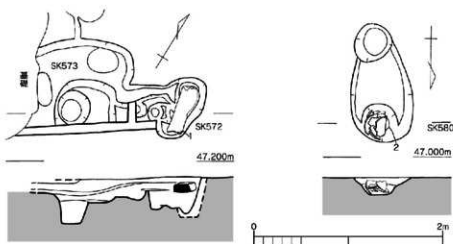
弥生土器片が出土したが、図示可能ではなかった。

SK538 (第237・255図)

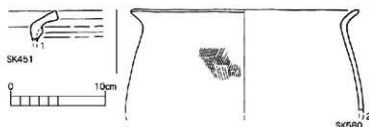
調査区のD-8に位置する。遺構は西側にSK582、東側に校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が 1.52×0.98 m、下端が 1.45×0.88 mを測る。壁面は「ハ」字形に立ち上がり、深さは 0.39 mを測る。床面の東側に窪みが認められ、東側へ傾斜する。

出土遺物

弥生土器片が出土したが、図示可能ではなかった。



第239図 SK572・573・580実測図 (S=1/40)



第240図 SK451・580出土遺物実測図 (S=1/4)

出土遺物

弥生土器片が出土したが、図示可能ではなかった。

SK548 (第237図、図版65)

調査区のD-8に位置する。遺構の西側は、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が 0.45×0.18 m、下端が 0.35×0.15 mを測る。壁面は「ハ」字形に立ち上がり、深さは0.24 mを測る。

出土遺物

弥生土器片が出土したが、図示可能ではなかった。

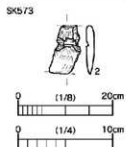
SK578 (第237図、図版65)

調査区のD-3に位置する。遺構の北側はSK559の削平の影響を受け、東側SK573との前後関係は不明、西側は調査区外へ延びる。遺構の規模は残存長で、上端が 1.68×1.46 m、下端が 1.82×1.68 mを測り、形状は隅丸方形と考えられる。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.64 mを測る。床面は緩やかに凹む。埋土は黒色粘質土である。

出土遺物

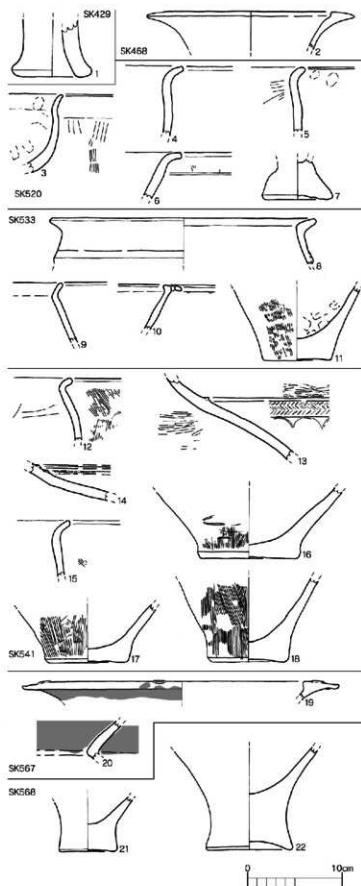
土器 (第238図、図版79)

7から11は甕の破片である。7の口唇部は跳ね上げを呈し、胴部上半の外面には一条の沈線を巡らす。8の口縁部から頸部は「く」字形、11は口唇部が跳ね上げ状を呈し、胴部上半の外面には二条の沈線を巡らす。9・10は、口唇部に斜位のキザミが施される。12・13は高坏脚部で、12は外面に縦位の工具ナデが施される。13は器台の破片で、胴部外面は指頭圧痕が認められ、縦位のハケ



第241図
SK572・573出土遺物
実測図

(1はS=1/8, 2はS=1/4)



第242図 SK429・468・520・533・541・567・568
出土遺物実測図 (S=1/4)

が施される。15から18は、甕底部と考えられる。調整は15・16が縦位のハケが施される。外底は15・17が平底、16・18が上げ底を呈する。

その他土坑

SK451 (第214図)

調査区のB・C-2に位置する。遺構の規模は残存長で、上端が0.80×0.54m、下端は0.57×0.45mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.62mを測る。床面は南側へ傾斜する。埋土は褐色粘質土の単層である。

出土遺物

土器 (第240図)

1は爽口縁部から頸部の破片で、「く」字形を呈し、頸部に断面が三角形の突帯を一条巡らす。

SK572 (第239図、図版65)

調査区のD-3に位置する。遺構の西側SK573との前後関係は不明、南側は調査区外へ延びる。規模は残存長で、上端が0.71×0.44m、下端は0.40×0.32mを測り、形状は隅丸長方形と考えられる。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.42mである。床面は一定ではない。埋土はにぶい褐色粘質土である。

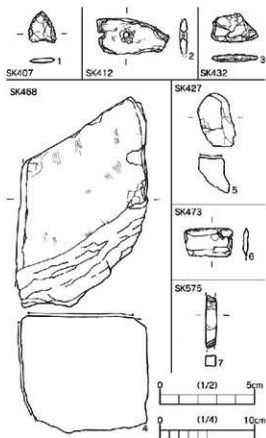
出土遺物

石製品 (第241図、図版86)

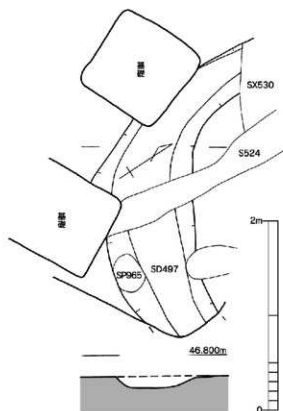
1は砂岩製の砥石である。大形で、砥面は3面認められる。

SK573 (第239図、図版65)

調査区のD-3に位置する。遺構の東側SK572と西側SK578との前後関係は不明、南側は調査区外へ延びる。規模は、上端が1.02×0.98m、下端は0.92×0.79mを測り、形状は隅丸長方形と考えられる。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.48mである。床面は一定ではない。埋土はにぶい褐色粘質土である。



第243図
SK407・412・427・432・468・473・575
出土遺物実測図 (1はS=1/2, 2~7はS=1/4)



第244図 SD497実測図 (S=1/40)

出土遺物

石製品 (第241図)

2は凝灰岩製の石庖丁である。

SK580 (第239図、図版65)

調査区のC-4に位置する。遺構の南側は、SP1167による削平の影響を受ける。遺構の規模は、上端が0.88×0.66m、下端は0.80×0.52mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.37mである。床面は平坦であるが、北側で確認できた裏の付近は、一段落ちる。

出土遺物

土器 (第240図、図版79)

2は甕の破片で、口縁部から胴部中位まで残存する。口縁部は外反を呈する。

SK538

調査区のC-8に位置する。遺構の東側は、校舎基礎による削平の影響を受ける。遺構の規模は残存長で、上端が1.00×0.98m、下端は1.45×0.88mを測り、形状は隅丸長方形を呈する。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.39mを測る。床面は平坦である。遺構の性格は、埋土の堆積状況から廃棄土坑と判断した。

出土遺物

弥生土器が出土したが、図示可能ではなかった。

その他一括

SK429

調査区のB-2に位置する。遺構の規模は上端が0.60×0.54m、下端は0.50×0.29mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.29mを測る。床面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物

土器 (第242図、図版79)

1は器台で、底部は裾広がりの様相を呈し、器厚である。

SK468

調査区のB-3に位置する。遺構の規模は上端が0.88×0.64m、下端は0.66×0.52mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.26mである。床面は平坦である。埋土は、にぶい褐色粘質土の単層である。

出土遺物

土器（第242図、図版79）

2は壺の破片で、口縁部は鋤先状を呈する。

石器（第243図、図版87）

4は花崗岩製の砥石である。大形で、砥面は2面認められる。

SK473

調査区のB-2に位置する。遺構の規模は残存長で、上端が 0.82×0.42 m、下端は 0.72×0.36 mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.16 mである。床面は平坦である。

出土遺物

石器（第243図、図版87）

6は凝灰岩製の石剣で、切先と基部を欠損する。断面は菱形を呈する。

SK520

調査区のB-7に位置する。遺構は、S526・SP961の削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が 1.94×1.65 m、下端は 1.85×1.57 mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.25 mを測る。床面は平坦である。

出土遺物

土器（第242図、図版79）

3は壺で、口縁部から胴部下半まで残存する。4・5は甕の破片資料で、口縁部は如意形を呈する。6は鉢の破片資料で、胴部上半に一条の沈線を巡らす。7は甕底部と考えられ、台付状を呈する。

SK533

調査区のB-7に位置する。立ち上がりが明確でなく、堆積層として判断した。

出土遺物

土器（第242図、図版78）

8・9は甕の破片で、「く」字形を呈する。8の胴部外面は、断面が低い三角形の突帯を一条巡らす。10は甕の破片で、口縁部は内面が突出する鋤先状を呈する。11は甕底部と考えられ、調整は内面が工具ナデ、外面は縦位のハケが施される。外底は平底を呈する。

SK541

調査区のB-7に位置する。遺構は校舎基礎による削平の影響を受けており、SK553・550と繋がる可能性が高い。規模は残存長で、上端が 1.18×1.10 mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.60 mを測る。

出土遺物

土器（第242図、図版79）

12は壺の破片で、口縁部は外反する。13・14は壺肩部の破片である。13の調整は、内外面に横位のミガキを施した後、外面に断面が三角形の突帯を一条巡らせ、無軸羽状文と弧状が施される。14は外面にハケを施した後、断面が三角形の突帯を二条巡らす。15は甕破片で、口縁部は外反する。16から18は壺底部で、調整は内面がナデ、外面が縦位後斜位のハケが施される。外底は上げ底を呈する。

SK567

調査区のC-4に位置する。遺構の規模は上端が 0.92×0.66 m、下端は 0.80×0.53 mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.10 mを測る。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物

土器（第242図、図版79）

19は壺口縁部で、鋤先状を呈し、口縁部に円形の浮文を3箇所確認できる。20は壺頸部で、「く」字形を呈する。

SK568

調査区のC-4に位置する。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物

土器（第242図）

21・22は甕底部と考えられ、器厚で上げ底を呈する。

SK575

調査区のC-3に位置する。遺構の規模は上端が2.18×1.44m、下端は1.45×0.47mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.33mである。埋土は灰黄褐色粘質土で、炭化物含む。

出土遺物

石器（第243図、図版87）

7は珪質頁岩製の柱状片刃石斧で、基部を欠損する。

（3）溝跡（SD）

SD497（第244図、図版65）

調査区のC-8に位置する。遺構の上面をSD504、北側をSK530、東側をSK542、南側を校舎基礎による削平の影響を受ける。遺構の規模は、最大幅の上端が1.0m、下端は0.51mを測り、「L」字状を呈する。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.18mを測る。床面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土の単層である。

出土遺物

弥生土器片が出土したが、図示可能ではなかった。

（4）柱穴跡

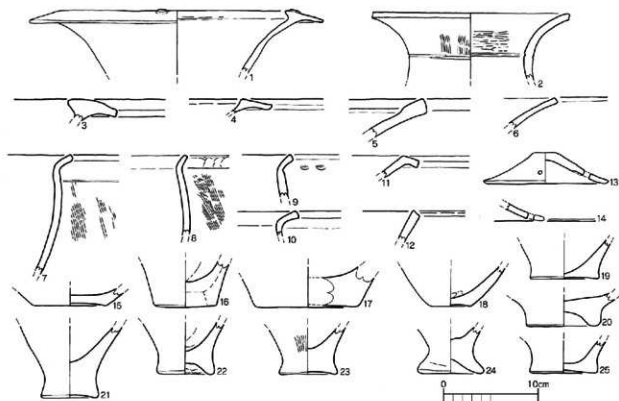
SP（図版66）

4次調査では220基の柱穴跡を確認し、時期は出土遺物から弥生時代と考えられる。

出土遺物

土器（第245図、図版80）

1はSP1019出土の壺口縁部の破片である。口縁部は鋤先状を呈し、円形の浮文を貼付ける。2はSP1180出土の壺で、口縁部から頸部が残存する。調整は内面が横位のミガキ、外面は縦位のハケが施される。頸部の内外面は、一条の沈線を巡らす。3はSP1203出土、4はSP1033出土の壺口縁部で、鋤先状を呈する。5はSP1070出土の壺口縁部で、粘土帯による貼付により肥厚する。6はSP1074出土の壺口縁部で、断面は方形を呈する。7はSP1206出土、8はSP1203出土の甕の破片で、口縁部は如意形を呈する。9はSP1203出土の甕の破片で、口縁部は外反する。10はSP1203出土の甕口縁部の破片で、外反する。11はSP1060出土の鉢口縁部の破片で、頸部から口縁部は「へ」字状を呈する。12はSP1011出土の鉢口縁部の破片で、断面が方形を呈する。13・14は蓋の破片で、口縁部上に、円形の穿孔を施す。15はSP1180出土の壺の底部と考えられ、外底は上げ底を呈する。16はSP1172出土の壺底部と考えられ、厚底で外底は平底を呈する。17はSP1187出土の壺底部と考えられ、厚底で外底は上げ底を呈する。18はSP1201出土の壺底部と考えられ、外底は上げ底を呈する。19はSP1019出土の壺底部と考えられ、厚さは薄く、外底は上げ底を呈する。20はSP1067出土の壺底部と考えられ、外底は上げ底を呈する。21はSP1186出土の甕底部と考えら

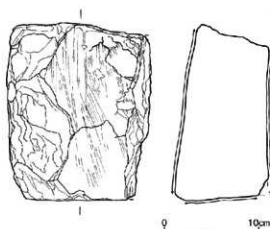


第245図 SP出土遺物実測図 (S=1/4)

れ、厚底で外底は上げ底を呈する。22はSP1120出土の甕底部と考えられ、外底は上げ底を呈する。23はSP1175出土の甕底部と考えられ、底部裾は「ハ」字形に広がり、外底は上げ底を呈する。24はSP1044出土の甕底部と考えられ、脚台状を呈する。25はSP1166出土の甕底部と考えられ、外底は上げ底を呈する。

石器 (第246図、図版86)

1はSP1109より出土した砂岩製砥石である。底面は、3面認められる。



第246図 SP出土遺物実測図 (S=1/4)

(5) 性格不明遺構 (SX)

SX530 (第247図、図版65)

調査区のB-8に位置する。遺構は、SK496・S524による削平の影響を受け、SP969より後出である。規模は残存長で、上端が1.64×1.00m、下端は1.43×0.90mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.34mを測る。床面は平坦である。遺構の性格は、不明である。

出土遺物

土器 (第248図、図版79・80)

1は壺の破片で、口縁部が外面へ屈曲する。調整は、内外面横位のミガキが施される。2から3は甕の破片である。2は口縁部が短く、内傾する。4は甕で、口縁部から胴部まで残存する。口縁部は短く外反する。調整は胴部外面に縦位のハケ後、上位に一条の沈線を巡らす。5は甕で、口縁部から胴部まで残存する。調整は外面に縦位のハケが施される。6は甕底部と考えられ、調整は、外面がハケ、内面はミガキが施される。外底は上げ底を呈する。

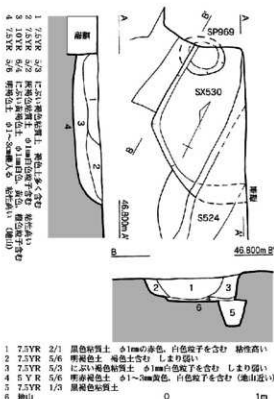
SX544

調査区のC-7に位置する。遺構の規模は残存長で、上端が1.37×1.10m、下端が1.30×1.02mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.02mである。床面は平坦である。埋土は灰褐色粘質土である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から貯蔵穴と判断した。

出土遺物

土器（第248図、図版80）

7は甕で、口縁部から胴部まで残存する。胴部上半に、断面が三角形の突帯を一条巡らす。調整は外面に斜位ハケ、内面が横位のミガキが施される。8は、壺の底部と考えられる。外底は、平底を呈する。調整は外面が横位後縦位のハケ、内面が縦位のミガキが施される。9は、甕底部と考えられる。外底は上げ底で、踏ん張る形態を呈する。調整は外面がハケ、内面が横位のミガキが施される。



第247図 SX530実測図 (S=1/40)

第2節 古代の遺構と遺物

(1) 土坑跡 (SK)

SK437 (第249図)

調査区のC-2に位置する。遺構の南側は、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は残存長で、上端が2.06×1.46m、下端は1.18×0.85mを測り、隅丸長方形を呈する。壁面は緩やかな逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.11mを測る。床面は北側が深い。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から廃棄土坑と判断した。

出土遺物

土師器（第250図、図版80）

1は、高台付埴である。高台端部の内面は、ケズリが施される。3は、底部から体部へ立ち上がる皿である。

陶器（第250図、図版80）

2は碗底部の破片で、外底は回転糸切である。内面は釉薬の剥がれが認められ、胎土は白色粒子を含む。京都・洛西産の緑釉陶器である

土製品（第250図、図版80）

4は土鏝で、両端部を欠損する。

SK447 (第236図)

調査区のC-2に位置する。弥生時代の土坑跡上層より土師器が出土し、混入と考えられる。

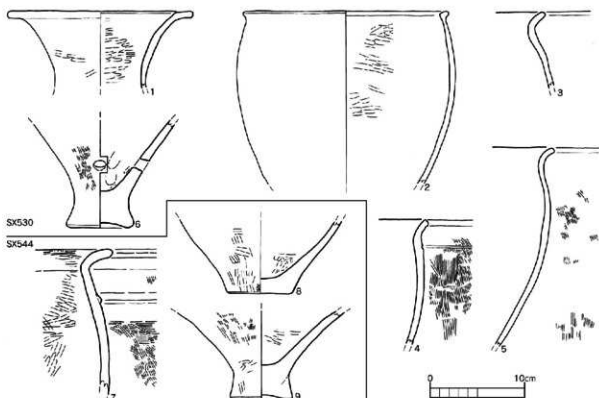
出土遺物

土師器（第251図、図版80）

4は埴で、口縁部の破片である。

SK448 (第210図)

調査区のC-2に位置する。遺構の規模は上端が0.50×0.48mの円形を呈し、下端は0.36×0.34mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.31mを測る。床面は平坦である。遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から廃棄土坑と判断した。



第248図 SX530・544出土遺物実測図 (S=1/4)

出土遺物

土師器 (第251図、図版80)

5は高台付碗で、高台は「ハ」字形を呈する。

(2) その他

須恵器 (第251図、図版80)

1は、SK410上層出土の甕胴部である。外面は平行タタキ、内面は同心円文当て具痕が認められる。2・3はSK425上層から出土する。2は碗の口縁部が残存し、口縁部は外方へ開く。3は皿の口縁部から底部まで残存する。口縁部は外方へ開く。

土師器 (第251図、図版80)

4は、SK447上層出土の碗口縁部である。口縁部は、丸い。6はSK448上層出土の高台付である。高台は、「ハ」字形を呈する。

第3節 近代の遺構と遺物

(1) 溝跡 (SD)

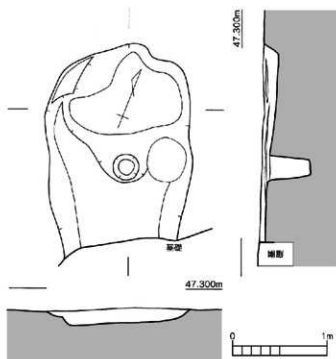
SD401 (第252図、図版66)

調査区のA-1・2に位置する。遺構の規模は残存長で、長軸7.26m×短軸0.38mを測り、SK402から北側へ延びる。断面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.30mである。床面は北側から南側へ傾斜し、平坦である。埋土は灰色粘質土である。

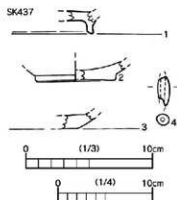
出土遺物

陶器 (第254図)

1は土管である。受け口は直角に近く屈曲し、内面に三条の櫛目が施される。差し口は外面に三条のくし目が施される。



第249図 SK437実測図 (S=1/40)

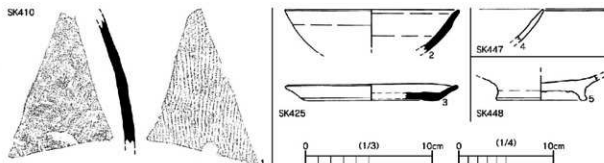


第250図
SK437出土遺物実測図
(1・2・4はS=1/3, 3はS=1/4)

出土遺物

陶器 (第254図)

6は火鉢口縁部の破片で、口縁部に釘状を貼り付ける。



第251図 SK410・425・447・448出土遺物実測図 (1はS=1/4, 2~5はS=1/3)

(2) 土坑跡 (SK)

SK402 (第252図、図版66)

調査区のA-B-2に位置する。遺構の規模は上端が0.94×0.82m、下端は0.80×0.55mを測り、方形状を呈する。床面はコンクリートを張り、周壁をレンガで構築する。確認できた深さは、レンガ床面まで0.22mを測る。遺構の性格は、SD401と繋がっており、集水の役割が考えられる。

出土遺物

陶器、レンガが出土したが、図示可能ではなかった。

SK404

調査区のA-1に位置する。遺構の規模は残存長で、上端が3.62×1.06mを測る。コンクリート製で、壁面は「V」字形の落ち込みがあり、深さは0.76mを測る。埋土は茶褐色粘質土である。遺構の性格は、形態からトイレ遺構と判断した。

出土遺物

陶器 (第254図、図版81)

2・3は火鉢で、口縁部は外面へ屈曲し、内面は内傾または湾曲を呈する。3は内面には工具痕が認められる。4・5は和式便器で、内外面に緑釉が塗布される。

SK408

調査区のB-2に位置する。遺構の規模は残存長で上端が1.62×1.14m、下端は1.51を測る。深さは0.09mを測る。床面は平坦である。埋土は灰堆積層色である。遺構の性格は、埋土の状況から堆積層と判断した。

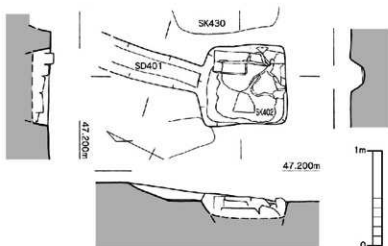
SK467 (第253図)

調査区のB-3・4に位置する。遺構はコンクリート製で、規模は残存長で上端が7.90×1.70 m、下端は7.10×1.55 mを測る。壁面は一部波形を呈し、逆「ハ」字形で立ち上がる。深さは0.15 mを測る。床面は平坦である。遺構の性格は、形態の状況から園地の役割が考えられる。

出土遺物

陶器 (第254図)

7は甕の底部である。外面は、黒釉が施される。



第252図 SD401・SK402実測図 (S=1/40)

SK478

調査区のC-6に位置する。遺構は方形プランで、川原石が詰めてあった。遺構の性格は、形態から旧校舎基礎と判断した。

出土遺物

ガラス製品 (第254図、図版81)

8は瓶で、肩部に「TRADE MARKU」、胴下部に「ANGLOJAPANESE BREWERY COMPANY, LTD. TOKYO」とエンボスが施される。

SK517 (第255図、図版66)

調査区のB-5・C-9に位置する。遺構は校舎基礎による削平の影響を受け、規模は残存長で上端が0.93×0.70 m、下端は0.57×0.54 mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.16 mである。床面は平坦である。埋土は黒色土で、灰層である。遺構の性格は、埋土の堆積状況から廃棄土坑 (造成) と判断した。

出土遺物

陶器 (第256図、図版81)

1は壺の破片で、口縁部内面に蓋受けが設けられる。2は植木鉢である。底端部は波状を呈し、底部は円形の穿孔を一箇所設ける。

磁器 (第256図、図版81)

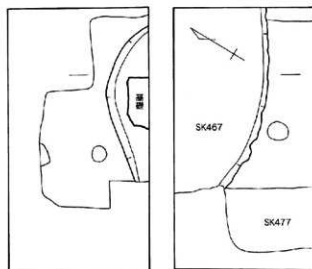
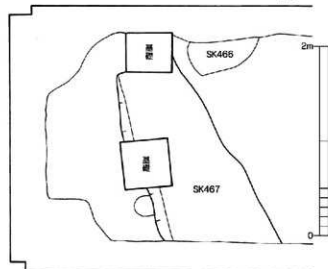
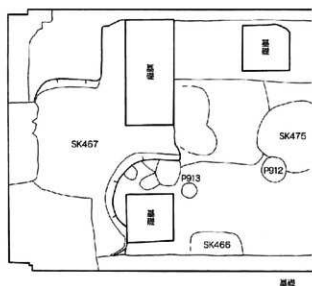
3から8は碗である。3から8は煎茶碗で、4は外面に青磁釉、外底は二段に施される。6は、高台に「香山」の印刻が認められる。7は、外底に「大日本〇山製」と記される。8は掛け分けが施され、外底に「山岩製」と記される。10から13は湯呑碗で、口縁部は10が端反り、その他は直に延びる。14は握みを欠損する蓋である。15は角皿である。

石製品 (第256図、図版81)

16は硯で、海部を欠損する。外面はキザミが施される。

SK518 (第255図、図版66・67)

調査区のC-9に位置する。遺構はSK517より後出で、校舎基礎による削平の影響を受ける。また、北側は安全上の理由から、遺構の半分ほど未掘である。規模は堆積状況から、上層と下層に分けた。上層は残存長で上端が3.50×2.00 m、下端は3.24×1.40 mを測る。深さは0.46 mを測る。下層は残存長で、上端が3.50×2.14 m、下端は2.30×1.10 mを測る。深さは0.98 mを測る。床



第253図 SK467実測図 (S=1/40)

面は平坦である。埋土は上層が灰褐色土、下層が橙色土である。遺構の性格は、堆積状況から廃棄土坑（造成）と判断した。

出土遺物

上層出土

陶器（第257図、図版81）

1は短頸壺で、内外面に軸が施される。2・3は急須で、胎土から朱泥製である。2は平底、3は上げ底を呈する。4は植木鉢で、口縁部は肥厚で、底部に一箇所の穿孔が施される。5は壺で、注口を欠損する。6は火鉢で、内面は断面三角形の受け部を巡らす。外面は、「柴田宅次郎」と印刻が認められる。

磁器（第257図、図版81）

7から9は、煎茶碗である。7・8の口縁部は端反り、9は掛け分けが施される。8の器形は丸形を呈する。10から13は湯呑碗である。10の外面は、六角に面取りが認められる。11から13の器形は筒形を呈する。14から17は皿である。14は桜花皿である。15・16は、型紙摺りが施される。17は角皿である。18は蓋で、望料形碗に伴うと考えられる。

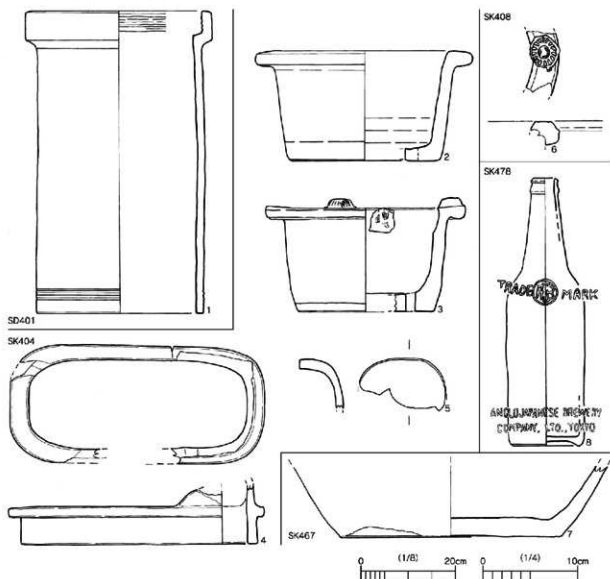
下層出土

陶器（第257図、図版81）

19は五徳で、環状を下に三本の爪が上方に延び、爪先は内側に折り曲げる。21は壺で、内面に蓋受けが設けられる。22は蓋で、握みは丸く、体部に貝殻文が施される。23は擦卸で、把手を欠損する。24は煎茶碗で、体部下半に印刻が確認できる。25は徳利と考えられ、肩部と胴部下半が屈曲する。20は素焼きの壺で、口縁部は短い。26は火鉢口縁部で、口縁部に釘状の突起を貼付け、内面は引っ掛けが施される。

磁器（第258図、図版81）

27・28は湯呑碗で、27は銅板転写、28は銅板摺りである。29は煎茶碗である。31・32は飯碗で、31の口縁部は端反り、32は丸碗を呈する。33は水差しである。34は完形の合子で、蓋外面に「煉歯磨大博士 松本製」と描かれる。36から39は皿で、外底は蛇の目釉剥ぎが施される。



第254図 SD401・SK404・408・467・478出土遺物実測図
(1・4・5はS=1/8、2・3・6~8はS=1/4)

36は角皿で、前面に釉が施される。

石製品 (第260図、図版81)

54・55は硯である。55の海部は、墨の摺痕が確認できる。

ガラス製品 (第259・260図、図版81)

46はコップで、外面に錆が施される。48は蓋と考えられ、把手が残存する。49は蓋である。56・57化粧クリーム瓶である。59は容器である。61は目薬瓶で、外面に「外用 一二水」、「紀州 和田赤心堂」とエンボスが施される。

金属器 (第259・260図、図版81)

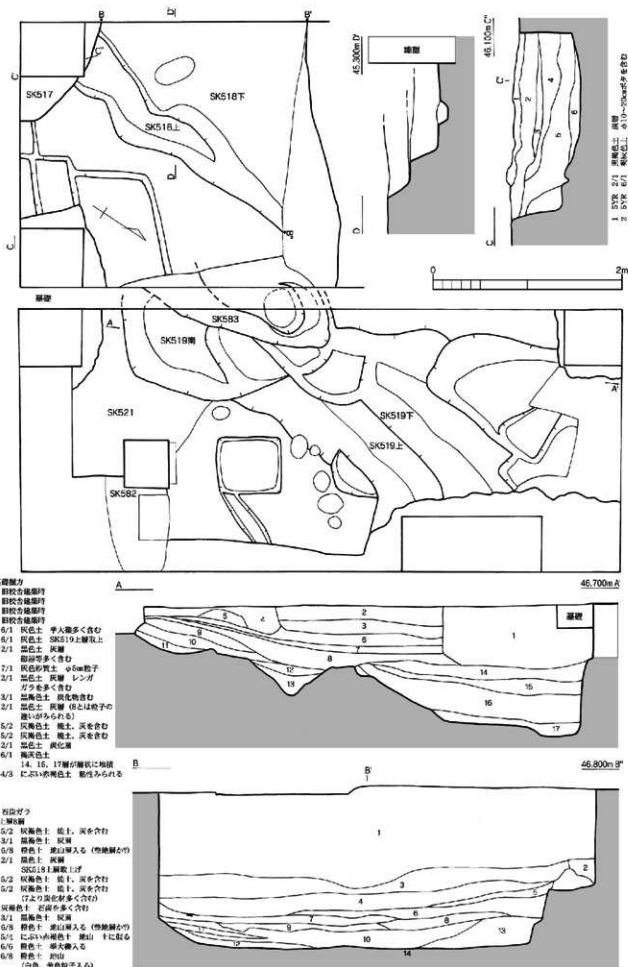
50は銅製のキセルで、刀豆形を呈する。62は、アルマイトの弁当箱蓋である。63は記事で、桜が描かれる。

骨製品 (第259図、図版81)

51・52は、歯ブラシの頭部と把柄部である。53は棒針で、基部にキザミが施される。

瓦 (第259図、図版81)

40から45は瓦である。40・41は棧瓦、43から45は軒丸瓦、42は平瓦で、○印の中に「上」と刻印が施される。



第255図 SK517・518・519・538・583実測図 (S=1/60)

SK519 (第255図、図版66・67)

調査区のB・C-8・9に位置する。遺構はSK583、校舎基礎による削平の影響を受ける。規模は堆積状況から、上層・下層・南に分けた。南上層の上端は残存長で、 3.65×2.70 m、下端は 2.80×2.40 m、深さは0.51 mを測る。床面は北側へ傾斜する。埋土は黒色粘質土である。下層は残存長で、上端が 3.20×1.70 m、下端が 2.50×1.30 m、深さは0.39 mを測る。南は残存長で、上端が 2.68×3.00 m、下端が 1.20×0.85 m、深さは0.40 mを測る。調査の結果、遺構の東から西へ傾斜する旧地形を確認した。遺構の性格は、埋土の堆積状況から廃棄土坑（造成）と判断した。

出土遺物

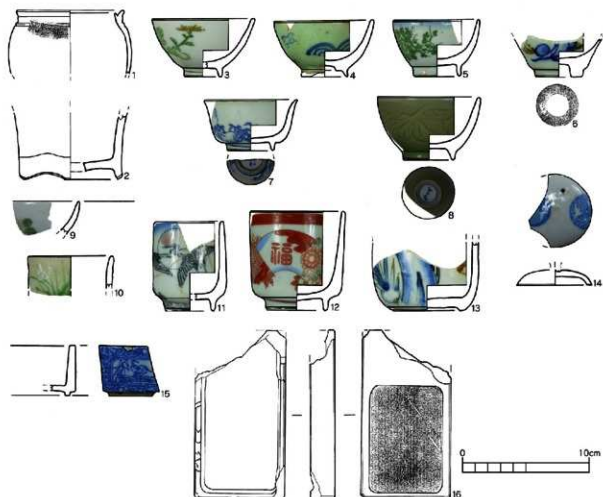
上層出土

陶器（第261図、図版82）

1は碗の破片で、口縁部は摘み上げる。3から5は壺である。3は焼締で、口縁部は丸く収まる。4は口縁部が短く、胴部が内湾する。5は短頸壺である。6は口縁部から底部まで残存する植木鉢で、口縁部は平坦を呈し、底部は低い高台と、円形の穿孔が一箇所設ける。8は落とし蓋、9は撮みが付く蓋である。7は播鉢で、摩耗に伴い底部の一部が欠ける。10は瓦質の火鉢で、内面に断面が台形の受け部を設ける。11は火鉢で、口縁部から底部まで残存する。口縁部は撮みが貼り付けられ、内面に五徳を掛ける場所が設けられる。サヤは一部、欠損する。12は火鉢窓部の扉と考えられる。把手部は、方形に突出する、13は土管の受け部である。

磁器（第262・263図、図版82）

14から29は、煎茶碗である。器形は丸碗を呈し、21から24の外底は、二段に設けられる。23・26の高台は「八」字形を呈する。36は、湯呑碗である。25は小碗、35は小坏である。30から34



第256図 SK517出土遺物実測図 (S=1/3)

は飯碗である。31・32の口縁部は、波状を呈する。37は高台が低く、腰に丸みを持つ碗である。38は逆「ハ」字形に開く形を呈し、底部は円形の孔が成形される。39は容器である。40から45は皿である。44は口縁部内面に、圈線が巡る。45は菱形皿で、角は面取りが施される。46・47は瓶である。46は口縁部から肩部を欠損する。47は花挿しで、外面は三条の沈線と、正面に楕円形



第257図 SK518出土遺物実測図① (1・7・9～16・18はS=1/3、2～6・8・17はS=1/4)

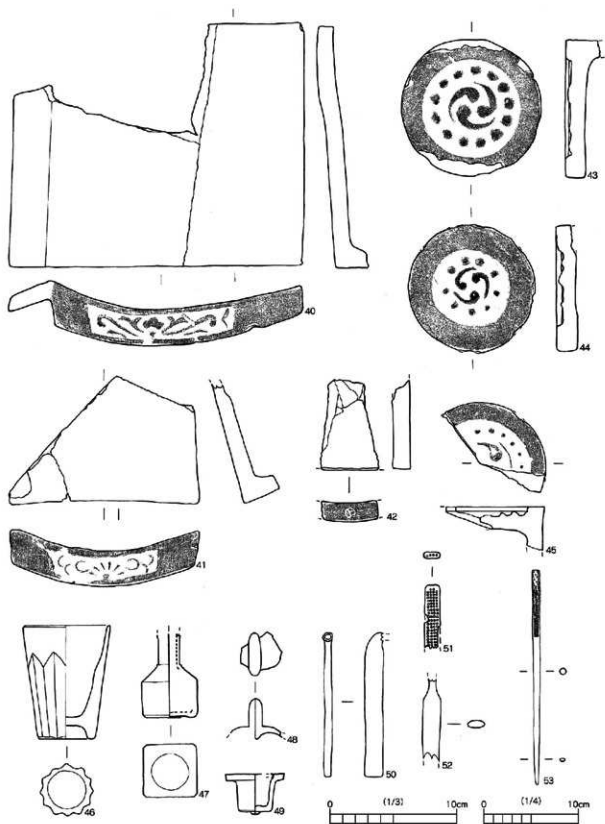


第258図 SK518出土遺物実測図② (19・22・24・27～39はS=1/3、20・21・23・25・26はS=1/4)

の窓、背面に掛ける孔が穿たれる。48・49は蓋である。48は塑料碗の蓋で、外面は型紙摺りが施される。49は撮みが楕円形を呈し、返りを持つ。

瓦（第264図、図版81）

50は棧瓦で、釘孔が一箇所認められるが、貫通はしていない。



第259図 SK518出土遺物実測図③（41～45はS=1/4、46～53はS=1/3）

石製品 (第264図、図版82)

51・52は硯で、51は縁の一部を欠損、52は厚さが薄い。

ガラス製品 (第264・265図、図版82・83)

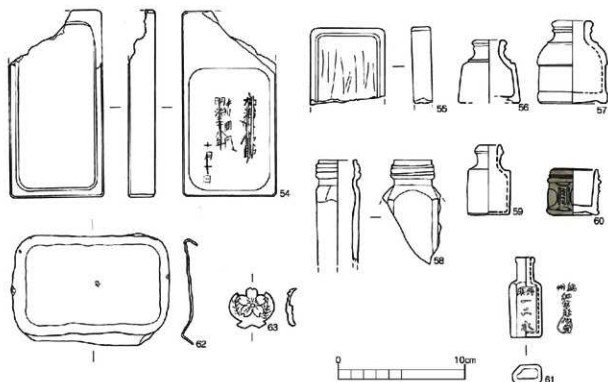
53・54はラムネの瓶で、外底に「D 3」とエンボスが認められる。56・57は清涼飲料水の瓶で、外面にエンボスが認められるが、「非買〇」以外は解読不明である。55は56・57と同形式の瓶で、被熱を受けて歪みが著しい。58は清涼飲料水の瓶で、「みかん水」とエンボスが認められる。59は清涼飲料水の瓶で、ニッキ水と考えられる。60は調味料の瓶で、外底に「味の素 N」とエンボスが認められる。61は六角形の瓶である。62はビールの瓶で、外面に「日本麥酒醸造株式会社」、外底に「2:3」とエンボスが認められる。65は角形のサイダーの瓶と考えられ、外面に「〇徳鏡泉株式会社」とエンボスが認められる。62はクリームの瓶で、白色を呈する。65から72はインクの瓶である。66・67は円形を呈し、色調は66が透明、67は青色を呈する。68は被熱の影響を受け器形が歪む。69はアルミ製容器に入り、肩部に「BONTON」、外底に「〇」とエンボスが認められる。70は四角形を呈する。71は円柱形を呈し、コルク栓が残存する。72の外底は、「登録 M」とエンボスが認められる。76は外面に鍍が施される。73は胴部上半に「イマツ」、底部に「450gr」と「450瓦入」とエンボスが認められる芳香油の瓶である。74・75・77から79・81は薬の瓶である。74・75・77から79の色調は透明である。79は「村崎齒科醫院」と容量のメモリのエンボスが認められる。81は目薬の瓶で、「本舗 山田安民」と「ロート目薬」のエンボスが認められる。色調は濃い青色を呈する。80は電球である。色調は緑色を呈する。

金属器 (第265図、図版82)

82・83は鉄製のヤカンである。

その他 (第265図、図版82)

84・85はセルロイド製品で、84は容器蓋、85は櫛である。86はプラスチック製の鉛筆キャップである。



第260図 SK518出土遺物実測図④ (S=1/3)

下層出土

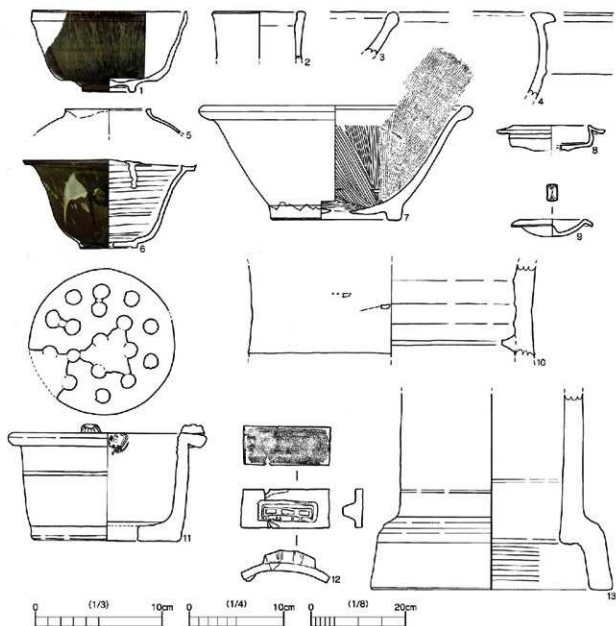
須恵器 (第266図、図版82)

91は口縁部から肩部まで残存する甕で、口縁部は短く、外反する。成形は、回転ナデが施される。瓦質土器 (第269図)

146は口縁部の破片で、鉢と考えられる。

陶器 (第266図、図版82)

88は水滴で、口縁部は小さい。89は瓶の破片で、注ぎ口は体部に円形の穿孔が三つ認められる。90は完形の瓶で、外面は鉄釉、外底から底端部は釉剥ぎが施される。92は火鉢の破片で、内面に断面が三角形の受け部を巡らす。95は瓦質の鉢で、受け部が残存する。93・96は蓋である。93は逆「八」字形を呈し、外面は回転ナデが認められる。96の握みは鉤状を呈する。94は不明製品である。高台は高く、「八」字状を呈し、胴部は方形の透かしの一部が認められる。97は鉢の破片で、釉は体部下半まで黒釉が施される。底部は回転ナデが施される。98は花瓶で、表面に布袋が型押し



第261図 SK519上層出土遺物実測図①

(1・3・4・10はS=1/3、2・5・7~9・11~13はS=1/4、6はS=1/8)

による浮彫、背面に掛ける円形の孔が施される。

磁器 (第267～269図、図版82)

99から118は煎茶碗である。99から109は丸形で、口縁部は端反りである。105・111は広東碗である。107は体部下半に面取りが施される。112は腰が広く、高台は「八」字形を呈する。116は破片で、湯呑碗との中間の形を呈する。113から118は湯呑碗である。118のみ、口縁部が端反りである。119から122は飯碗である。119・122は内面が浅い。123から126は小坏である。



第262図 SK519上層出土遺物実測図② (S=1/3)



第263図 SK519上層出土遺物実測図③ (S=1/3)

123は丸形で、それ以外は内面が浅い。139は蓋で、体部が長く、外底は削り出し成形により浅い造りである。128から134は皿である。128・129は稜花皿である。129・132・133の外底は、蛇の目刺しが施される。135は角皿の底部付近である。136は紅皿である。87・137から140は蓋である。87・137・139・140は外面に型紙摺りが施される。138は輪状つまみをもつ。141は筆洗器で、3部屋に分かれている。142はパレットの破片で、円形を呈する。

石製品 (第269図、図版82)

143・144は石盤で、144の背面に文字が刻まれるが、解説不明である。145は碗の破片である。瓦 (第269図、図版82)

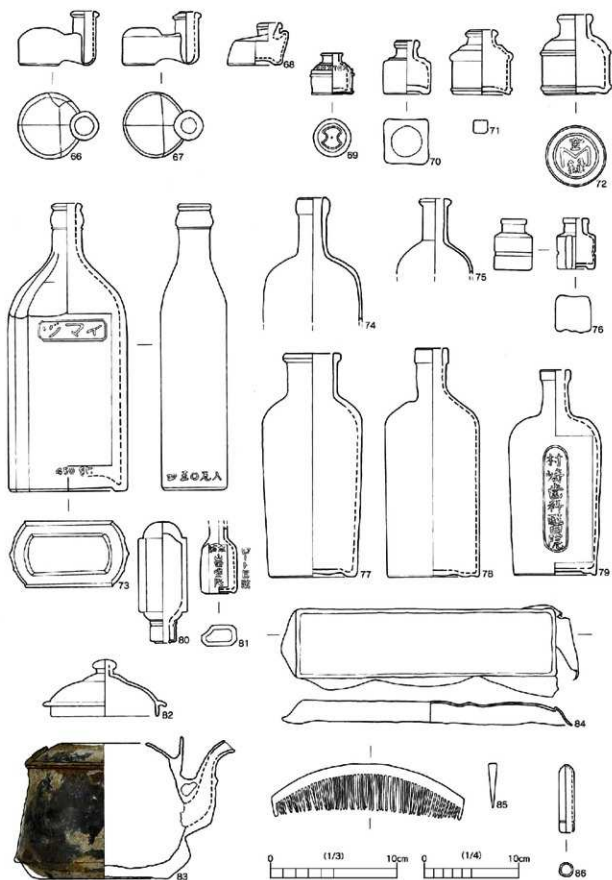
147は瓦の二次加工品で、スタンプと考えられる。

ガラス製品 (第269図、図版82)

148は口縁部が残存する瓶である。149は楕円形を呈する薬瓶と考えられ、「○帝國堂」とエンボスが認められる。150は薬瓶で底部から体部の一部は、半円状に窪む。151は用途不明の小瓶である。



第264図 SK519上層出土遺物実測図④ (50はS=1/4、51～65はS=1/3)



第265図 SK519上層出土遺物実測図⑤ (66~81・83~86はS=1/3, 82はS=1/4)

SK519南 (第255図、図版66・67)

調査区のB・C-8・9に位置する。遺構の規模は残存長で、上端が1.80×0.80m、下端は0.50×0.42mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深さは0.40mである。床面は平坦である。埋土は黒色土である。遺構の性格は、埋土の堆積状況から廃棄土坑と判断した。

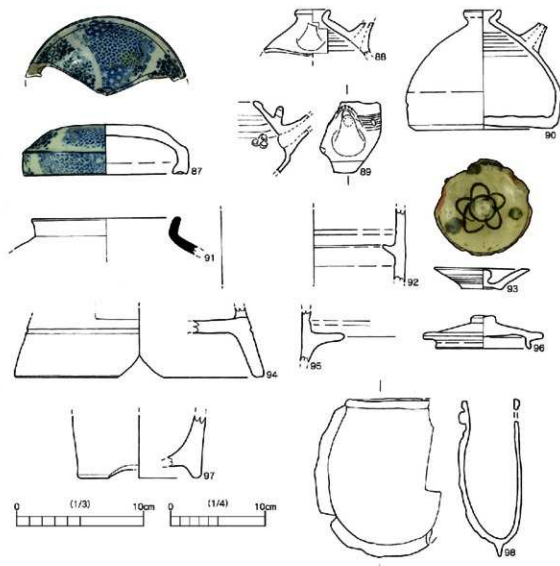
出土遺物

磁器 (第270図、図版82)

152は飯碗である。153・154は角皿で、154の口縁部は波状を呈し、外底は削り出しである。155は、輪状つまみを持つ蓋である。156はキャップである。

ガラス製品 (第270図、図版82)

157は目薬瓶で、「本舖 山田安民」、「ロート目薬」とエンボスが認められる。159から162はインク瓶である。159は外底に「M 登録」とエンボスが認められる。160・161の底部は円形、162の底部は方形と形態に相違がみられ、外底は、三角形を重ね「NB」とエンボスが認められる。160の外面は、山のエンボスが認められる。163は角瓶で、「ADEMAPRC」とエンボスが認められる。164は整髪瓶で、鈴虫と草文と「鈴虫香油」のエンボスが認められる。



第266図 SK519下層出土遺物実測図①

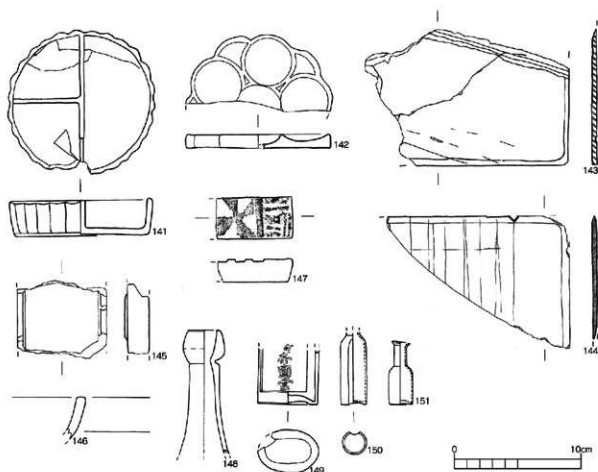
(87・88・90・91・93・95~98はS=1/3、89・92・94はS=1/4)



第267图 SK519下層出土遺物実測図② (S=1/3)



第268图 SK519下層出土遺物実測図③ (S=1/3)



第269図 SK519下層出土遺物実測図④ (S=1/3)

アルマイト製品 (第270図、図版82)

158は櫛である。

金属器 (第270図、図版82)

165は匙である。

SK556 (第273図、図版67)

調査区のC-4・5に位置する。遺構の東側は、校舎基礎による削平の影響を受ける。東側は段を設ける。遺構の規模は残存長で、上端が 4.04×1.10 m、下端は 3.87×0.92 mを測り、形状は長方形を呈する。壁面は直で立ち上がり、深さは0.70 mである。床面は平坦である。埋土は茶褐色粘質土である。遺構の性格は、学校史より戦時中の防火水槽と考えられる。

出土遺物

なし。

SK559 (第274図、図版67)

調査区のC・D-3・4に位置する。遺構は西側の一部を、削平の影響を受ける。遺構の規模は、上端が 6.70×1.50 m、下端が 5.77×0.92 mを測る。壁面は直で立ち上がり、東西は段を設ける。深さは0.75 mである。床面は平坦である。埋土は茶褐色粘質土である。遺構の性格は、学校史より戦時中の防火水槽と考えられる。

出土遺物

プラスチック（第275図、図版83）

1は把手付のカップで、把手に円形の透かしが認められる。外底には、「MSG」と認められる。2は三角定規で、メモリは0から10単位で90まで記されている。

ガラス製品（第275図、図版83）

3は瓶である。

磁器（第275図、図版83）

4は配線用差込接続器のコンセントである。円形を呈し、外面に「草」と「PAT02S7.4.22」と認められる。

SK582

調査区のC-8に位置する。遺構は規模は残存長で、上端は1.50×0.97m、下端は1.44×0.80mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、遺構の性格は、形態や埋土の堆積状況から廃棄土坑と判断した。

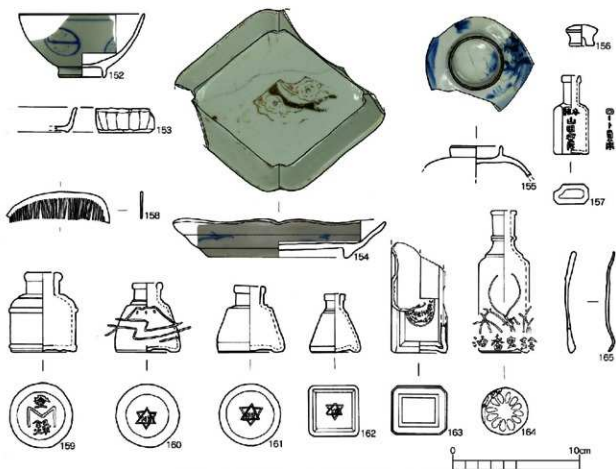
出土遺物

磁器（第275図、図版83）

5は小坏で、外面に龍が描かれる。

ガラス製品（第275図、図版83）

6から9は内部にインク溜が残るインク瓶である。6・7は、胴部に逆「L」字状の溝と、「開明墨地 新案特許」とエンボスが認められる。8・9は6・7と同形態の、アルミ容器に入ったインク瓶である。6・7の胴部の凹みは、アルミ容器を瓶に嵌め込む溝と考えられる。

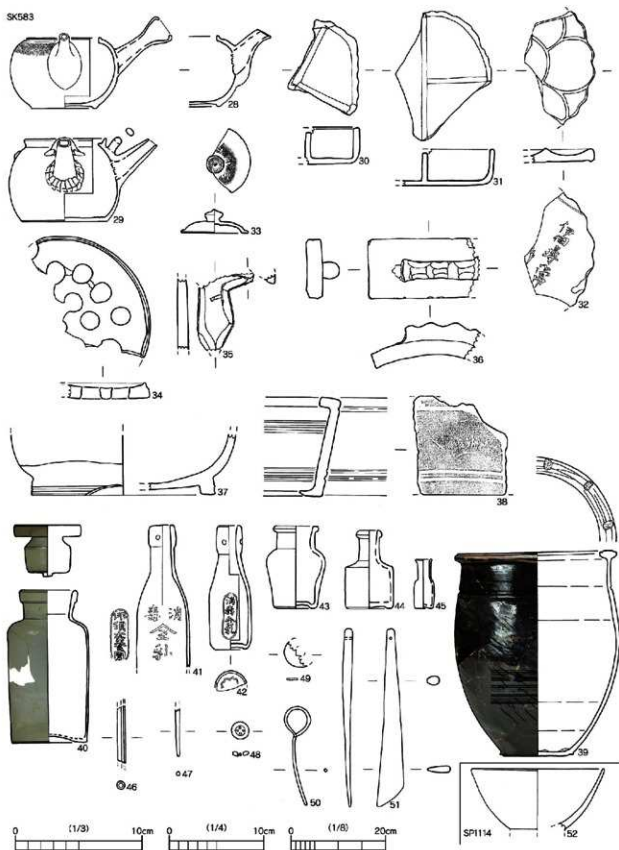


第270図 SK519南出土遺物実測図 (S=1/3)



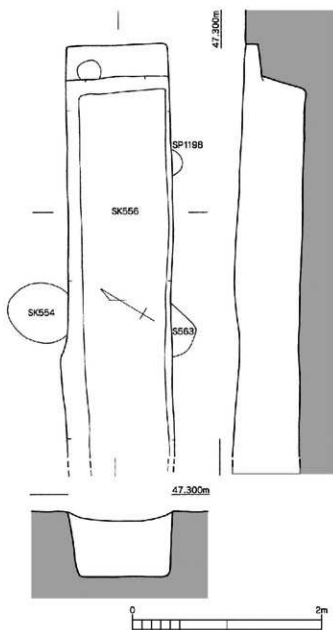
第271図 SK583出土遺物実測図① (1～25はS=1/3、26・27はS=1/4)

SK583



第272図 SK583②・SP1114出土遺物実測図

(28・30～32・37・43～52はS=1/3、29・33～36・38・40～42はS=1/4、39はS=1/8)



第273図 SK556実測図 (S=1/40)

金属器 (第275図、図版83)

9は2本の板状金属に装飾を付けた髪留めと考えられる。挟まれた間は、錆の付着が著しい。

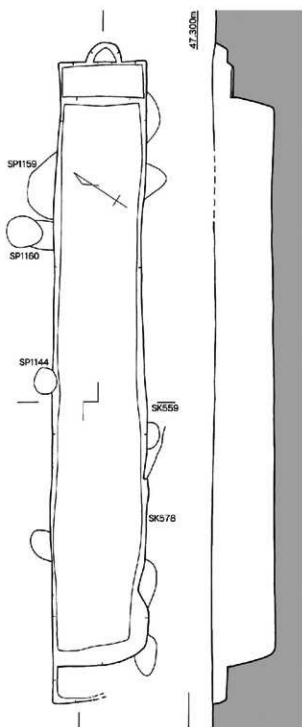
SK583 (第255図)

調査区のC-9に位置する。遺構規模は残存状況で、上端は 1.92×1.65 m、下端は 1.43×0.95 mを測る。壁面は逆「八」字形で立ち上がり、埋土は黒色土である。遺構の性格は、埋土の堆積状況から虎棄土坑と判断した。

出土遺物

陶器 (第272図、図版83)

29は急須で、朱泥製である。33は蓋で、貝殻



第274図 SK559実測図 (S=1/40)

文が施される。34はサヤである。36は天地不明の装飾具と考えられる。36は把手が付き、火鉢の空気入れの扉と考えられる。37は壺で、高台は三条の沈線を通らし、窓を設ける。38は口縁が内面へ屈曲する。外面は、「筑前博多産物」と刻印が認められる。39は甕で、口縁部は内面へ突出し、胴部上半の一条の沈線から外面へ膨らむ。口唇部と外底は楕円形の砂目が認められる。胴部は斜位のタタキが後横位のハゲが施される。軸は口縁部から胴部に鉄軸が施される。内底は、胎土目跡が残る。

磁器 (第271・272図、図版83)

1から7は煎茶碗である。形態は1が広東碗、2から4が丸碗、5は口縁部が内湾、6は口縁部が端反り、外底は蛇の目を呈する。8から10は湯呑碗である。8が体部から端反り、9は体部に面取り、10の口縁部は端反りが施される。11から14は飯碗である。11の内底は、蛇の目軸刺ぎが施される。12・13は内面の深さが浅い形態を呈し、13の内底は、胎土目跡が認められる。14は丸碗である。15・

16・22は、小坏である。17・18は容器で、口縁部は軸刺ぎと外底は削り出しが施される。19は鉢で、口縁部は平坦で、外底は蛇の目軸刺ぎが施される。20・21は皿である。20は高台が低く、21は口縁部が内湾する。26・27は同一個体と考えられる瓶で、口縁部は緩やかに外反する。23から25は蓋で、外面に型紙摺りが施される。28は急須である。30・31は筆洗器で、30は四角形、31は円形を呈する。32は絵画道具のパレットで、底部に「伊田尋常〇」と墨で記される。

ガラス製品 (第272図、図版83)

40は蓋と瓶が残存する薬瓶である。41・42は牛乳瓶で、41は口縁部に金具付の柄孔を設け、「那須養老園」、「消毒全乳」、42は「消毒全乳」とエンボスが認められる。43から45は容器である。51は管状を呈する。

骨製品 (第272図、図版83)

47は先端のみ残存する簪である。51はヘラで、和裁に用いたと考えられる。

金属器 (第272図、図版83)

49は銭で、全体に摩耗が認められる。

プラスチック (第272図、図版83)

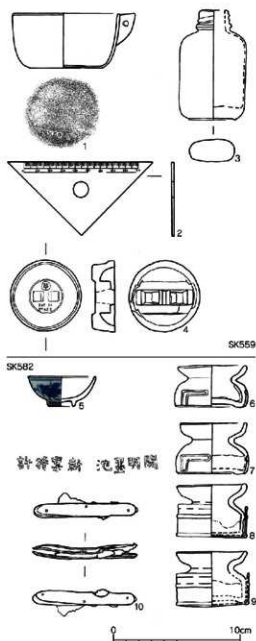
48は釘で、四孔認められる。50は用途不明の製品である。

(3) 柱穴跡

SP

磁器 (第272図)

52はSP1114から出土した飯碗である。



第275図 SK559・582出土遺物実測図 (S=1/3)

第Ⅵ章 自然科学分析

第1節 上本町遺跡における考古地磁気学的研究

北原 優¹、大野 正夫¹

1. 九州大学大学院 比較社会文化研究院

1 はじめに

考古地磁気学とは、被熱試料に記録された磁気的情報（熱残留磁化）をもとにして、その試料が焼かれた年代や被熱状況を推定する理化学的な分析手法のひとつである。

磁性鉱物（磁鉄鉱や赤鉄鉱など）を含む土壌や岩石、土製品などは、それが焼かれた際に周囲の磁場（通常は地球磁場）の情報（方位と強度）を記録する（磁化する）性質を持つことが知られている。この記録された熱残留磁化（とくに磁化方位）は各種磁力計を用いた精密な測定によってかなり正確に復元することができる。

また、地球磁場（地磁気）は、地球深部にある鉄とニッケルを主成分とする液体金属核（外核）が、その深度方向に存在する熱化学的勾配を動因として対流することによって生成されるため、さまざまな時間スケールにおいて複雑かつ不規則な変動を示すことが知られている。従って、さまざまな年代の被熱遺物や火山岩を採取して当時の地磁気を復元し、年代ごとにデータを集めて地球磁場の変動モデル（地磁気永年変化曲線）を構築すれば、年代が未知の被熱遺物や火山岩に年代値を与えるためのひとつの指標として活用することができる（このほかに、海底や湖底の堆積物も堆積残留磁化という磁気情報を記録していることが知られており、こちらも年代決定に応用することが可能である）。

本稿では、福岡県上本町遺跡における5ヶ所の被熱遺構より採取した焼土試料から考古地磁気方位（残留磁化方位）を復元し、日本において報告されている2種類の地磁気永年変化曲線と比較することにより、各遺構の年代推定を試みた。

2 試料採取

本稿における考古地磁気分析には、2015年7月23日・8月8日、2016年8月18日、2017年11月28日に、福岡県立西田川高等学校（福岡県田川市上本町7番11）敷地内に位置する上本町遺跡（北緯33°37′・東経130°47′・標高49m）の5ヶ所（SC240・SK8・SC374・SK378・SC480）の遺構内被熱箇所において採取した焼土試料を使用した。同遺跡の周辺の地質は後期更新世前期の堆積岩（段丘堆積物）に分類され[1]、発掘された遺跡の生活面は茶褐色～赤褐色を呈している。

試料は約10cm角のブロック状のものをSC240の被熱部より4個、SK68の被熱部より4個、SC374の被熱部より2個、SK378の被熱部より3個、SC480の被熱部より9個定方位採取した（第1図a, b, c, d, e）。なおSC480においては非被熱部からも比較のためにブロック状試料を1個定方位採取したが、その結果に関しては本報告書内では省略する。試料の採取方法に関しては、畠山ほか（2016）[2]を参照されたい。試料のオリエンテーションに関しては、SC240・SK68・SC374においては磁気コンパスを使用して測定を行っているために現在の偏角値で補正する必要があるが、同3遺構はコンパスに影響を及ぼすような周囲の建物から十分に離れていると判断したため、国際標準磁場モデル[3]から緯度・経度を指定して算出した値（ -7.2° ）を用いた。SK378においては磁気コンパスを設置できない状況での採取であったため、地面に溝を掘りブロック状の土塊を作る段階で、定方位のための基準平面（試料上面）が水平になるように水準器で調整し、基準線を地理座標に固定した測線と平行になるように基準平面上に記入した後にブロック試料を地面から切り離れた。SC480においては遺構のすぐ近くに金属製の水道管や鉄筋コンクリートのブロックがあり、実際に磁気コンパスを動かしてみると局所的な磁気異常が確認されたため、太陽コンパスを用いて同遺構付近の偏角を測定し（太陽コンパスは試料15と19の近くに設置して測定した）、得られた値（ -24.5° ）を偏角補正に使用した。

採取したブロック試料は、実験室にて十分乾燥させた後、定方位の基準線を維持しつつ岩石カッターを用いて1.5cm角のキューブ状試片に整形し（第1図f）、以下に述べる考古地磁気方位測定に用いた。

3 考古地磁気方位測定

考古地磁気方位測定は、SC240に関しては4ブロックから切り出した20試片、SK68に関しては4ブロックから切り出した20試片、SC374に関しては2ブロックから切り出した10試片、SK378に関しては2ブロックから切り出した10試片、SC480に関しては3ブロックから切り出した10試片について実施した。測定には高知大学海洋コア総合研究センターのスピン磁気計（夏原技研製、SMM-85）・交流消磁装置（夏原技研製、DEM-95C）、全自動交流消磁装置付きスピン磁気計（夏原技研製、DSPIN）および九州大学比較社会文化研究院の全自動交流消磁装置付きスピン磁気計（夏原技研製、DSPIN）を使用した。保磁力（磁性鉱物の粒径や構造に依存する磁化安定性の指標）の小さな磁性鉱物が担う磁化から段階的に消磁していく段階交流消磁（磁氣的クリーニング）をしながら残留磁化の測定を行うことで、遺構焼成時に獲得した熱残留磁化以外の二次的な磁化（時間経過に伴う酸化変質や緩和現象によって生じる磁化）を選択的に除去した信頼性の高い考古地磁気方位を得られるようにした。なお段階交流消磁は、DSPINを使用した試片に関しては原則的に0mTから100mTの保磁力範囲における全30段階で実施し、SMM-85・DEM-95Cを使用した試片に関しては0mTから20mTの保磁力範囲における全11段階で実施した。

上記の各試片に対して段階交流消磁を行い、残留磁化が減衰していく様子を観察したところ、SK68・SC374・SK378・SC480の試片においては一定水準以上の安定した残留磁化成分が認められた一方、SC240の大多数の試片においては安定した残留磁化成分が確認できなかった。この結果は、遺構SC240（のブロック試料を採取した部位）が他の4遺構に比して高温で焼成されていなかったことを示唆している可能性がある（体積規格化した消磁前の残留磁化強度もSK68が最小0.204～最大3.24 A/m、SC374が最小0.821～最大4.42 A/m、SK378が最小0.283～最大1.03 A/m、SC480が最小0.0845～最大0.473 A/mであるのに対して、SC240は最小0.0226～最大0.152 A/mと5遺構の中では最も弱い）。この件に関しては、今後さらに岩石磁気実験（試料の磁気的な諸特性を調べる実験）や段階熱消磁（加熱による磁気クリーニング）などの諸実験を追加的に実施し、考察を深めていく予定である。

4 最終被熱年代推定

大部分の試片において安定した残留磁化成分が認められたSK68・SC374・SK378・SC480の4遺構に関して、遺構ごとに自然残留磁化ベクトル終点投影図[4]（段階交流消磁結果の投影図：代表例を第2図a, b, c, dに示す）を主成分解析[5]し（第1表）、平均磁化方位を求めた。各遺構の平均磁化方位は、SK68が偏角＝ -1.1° ・伏角＝ 33.6° ・95%信頼限界角＝ 1.8° 、SK374が偏角＝ -11.7° ・伏角＝ 45.5° ・95%信頼限界角＝ 1.5° 、SK378が偏角＝ -15.8° ・伏角＝ 51.6° ・95%信頼限界角＝ 2.3° 、SC480が偏角＝ 5.2° ・伏角＝ 32.0° ・95%信頼限界角＝ 3.4° となった（第2表）。

相対年代に関して言えば、これら4遺構の平均磁化方位は誤差（95%信頼限界角）の範囲で一致しないため（第3図）、それぞれが異なる年代に焼かれて形成された被熱遺構であると判断できる。また4遺構ともに誤差（95%信頼限界角）が非常に小さいため、これらの測定結果は高い信頼性を有するものであると言える。

続いて、絶対年代を求めるために古地磁気（考古地磁気）永年変化曲線との対比を行った。使用した古地磁気永年変化曲線は、日本の考古試料から復元されたもの（広岡曲線：第4図）[6]と琵琶湖堆積物から復元されたもの（Ali曲線：第5図）[7]の2種類である。考古試料に基づく曲線は、一般的に時間分解能が非常に高いという長所と網羅する年代区間が狭いという短所を持ち、堆積物

に基づく曲線は、一般的に時間分解能が低いという短所と網羅する年代区間が非常に広いという長所を持つ。このような各特性を考慮した上で、本稿では両標準曲線を併用し、絶対年代註1を求めた。

SK68の平均磁化方位を広岡曲線と比較すると西暦1475年－1525年の曲線と誤差の範囲で一致し（第4図）、Ali曲線と比較すると約550年前（西暦1400年周辺）および約2300年前（西暦紀元前350年周辺）の曲線と誤差の範囲で交差する（第5図）。以上の結果から、両曲線が示唆する年代値を勘案し、西暦1475年－1525年を遺構SK68に対する考古地磁気学的推定年代の第一候補、西暦紀元前350年周辺を第二候補とする。

SC374の平均磁化方位を広岡曲線と比較すると西暦500年－525年の曲線と誤差の範囲で一致し（第4図）、Ali曲線と比較すると約1200年前（西暦750年周辺）および約2800年前（西暦紀元前850年周辺）の曲線と交差する（第5図）。以上の結果から、両曲線が示唆する年代値を勘案し、西暦500年－525年を遺構SC374に対する考古地磁気学的推定年代の第一候補、西暦750年周辺を第二候補、西暦紀元前850年周辺を第三候補とする。

SK378の平均磁化方位を広岡曲線と比較すると西暦550年－600年の曲線と誤差の範囲で一致し（第4図）、Ali曲線と比較すると約1300年前（西暦650年周辺）の曲線と交差する（第5図）。以上の結果から、両曲線が示唆する年代値を勘案し、西暦550年－600年を遺構SK378に対する考古地磁気学的推定年代とする。

SC480の平均磁化方位を広岡曲線と比較すると西暦1550年－1600年の曲線と誤差の範囲で一致し（第4図）、Ali曲線と比較すると約550年前（西暦1400年周辺）および約2300年前（西暦紀元前350年周辺）の曲線と誤差の範囲で交差する（第5図）。以上の結果から、両曲線が示唆する年代値を勘案し、西暦1550年－1600年をSK68に対する考古地磁気学的推定年代の第一候補、西暦紀元前350年周辺を第二候補とする。

しかしながら、今回使用した広岡曲線について、5世紀～9世紀（陶器窯[8][9][10]最盛期）を除く年代区間の曲線に関しては、1世紀あたりの曲線描画に用いたデータ数が20個以下と少なく、十分な信頼性が保証されているとは言えず、Ali曲線についても先述した通り、全体的に時間分解能が低いという問題があるため、本稿において提案する上記4遺構の考古地磁気学的推定年代が正確なものであると現時点において断言することはできない。

今後は上記の課題を踏まえ、同3遺構の考古地磁気学的推定年代値をより正確なものとするを目標に、先行研究がなされている個々の考古遺跡から得られた考古地磁気方位のデータ註2の詳細な検討や、日本海堆積物[11]や日本における火山岩[12][13]の古地磁気データ、韓国における考古地磁気データ[14][15]との比較などを順次実施していく予定である。

謝 辞

田川市教育委員会および上本町遺跡発掘調査関係者のみなさま、並びに九州大学比較社会文化研究院・アジア埋蔵文化財研究センターの田尻義隆准教授には、試料採取に際して便宜を図っていただくとともに、考古学に関してご指導を賜りました。また、岡山理科大学情報処理センターの畠山唯達准教授には、考古地磁気学的分析とデータの解釈に関してご指導を賜りました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

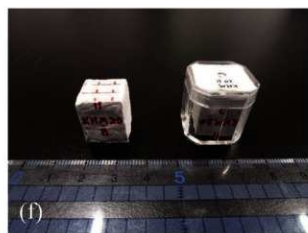
なお、本研究の一部は高知大学海洋コア総合研究センターにおける共同利用・共同研究に係る課題研究（課題番号：16A046・16B073）として実施しました。

註1 この推定年代値はあくまで考古地磁気学的手法のみに基づくものであり、考古学やその他の理化学的分析手法に基づく年代解釈などは一切反映させていない。

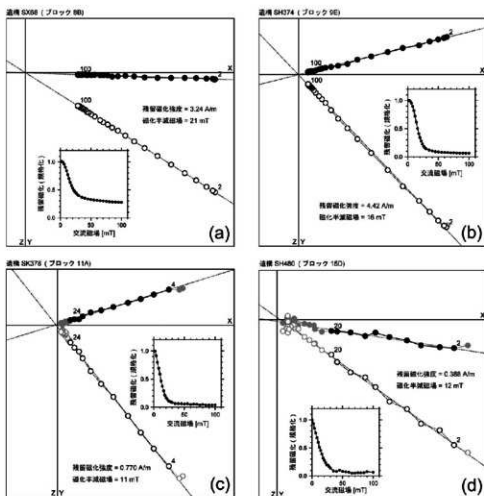
註2 特に今回のSX68およびSH480に見られたような特徴的な浅い伏角値を報告している遺跡のデータ（例：喜志遺跡（大阪府富田林市）[11]や宮の前遺跡（大阪府池田市）[17]、田能遺跡（兵庫県尼崎市）[18]）などが挙げられる。

引用文献

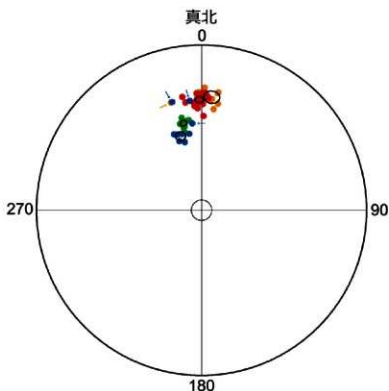
- [1] 産業総合研究所 地質調査総合センター 2018 『20 万分の 1 日本シームレス地質図』
<https://gbank.gsj.jp/seamless/>
- [2] 高山唯達 ほか 2016 「考古地磁気学における試料採取および整形—測定精度の向上に向けて—」
『Naturalistae Vol.20』 1-12
- [3] Thebault E. et al. 2015 「International Geomagnetic Reference Field: the 12th generation」
『Earth, Planets and Space Vol.67 No.79』 doi: 10.1186/s40623-015-0228-9
- [4] As J.A. & Zijdeveld J.D.A. 1958 「Magnetic cleaning of rocks in paleomagnetic research」
『Geophysical Journal of the Royal Astronomical Society Vol.1』 308-319
- [5] Kirschvink J.L. 1980 「The least-square line and plane and analysis of palcomagnetic data」
『Geophysical Journal of the Royal Astronomical Society Vol.62』 699-718
- [6] 広岡公夫 1977 「考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向」
『第四紀研究 Vol.15 No.4』 200-203
- [7] Ali M. et al. 1999 「Holocene palaeomagnetic secular variation at Lake Biwa, central Japan」
『Geophysical Journal International Vol.136 No.1』 218-228
- [8] 大阪府教育委員会 1976 『陶邑Ⅰ』
- [9] 大阪府教育委員会 1977 『陶邑Ⅱ』
- [10] 大阪府教育委員会 1978 『陶邑Ⅲ』
- [11] 富田林市遺跡調査会 1998 『喜志遺跡』
- [12] 池田市教育委員会 2012 『2011 年度池田市埋蔵文化財発掘調査概報』
- [13] 大阪府教育委員会 2000 『山能地区遺跡確認調査概要—農地還元利活用事業(榎田地区)の調査—』
- [14] Yamazaki T., et al. 2003 「Rock-magnetic changes with reduction diagenesis in Japan Sea sediments and preservation of geomagnetic secular variation in inclination during the last 30,000 years」
『Earth, Planets and Space Vol.55 No.6』 327-340
- [15] Kinoshita H. 1971 「Lists of archeomagnetic and paleomagnetic results」
『Journal of geomagnetism and geoelectricity Vol.22 No.4』 507-550
- [16] Yoshihara A. et al. 2003 「Secular variation of the geomagnetic field intensity during the past 2000 years in Japan」
『Earth and Planetary Science Letters Vol.210 No.1』 219-231
- [17] 成亨美・広岡公夫 2000 「韓国の考古地磁気変動に関する研究とその考古学的応用」
『考古学と自然科学 Vol.39』 15-32
- [18] 성형미 2013 「한반도 신석기시대의 고고지자기 변동: 중서부지역 유적을 중심으로」
『보존과학회지 Vol.29 No.3』 223-229



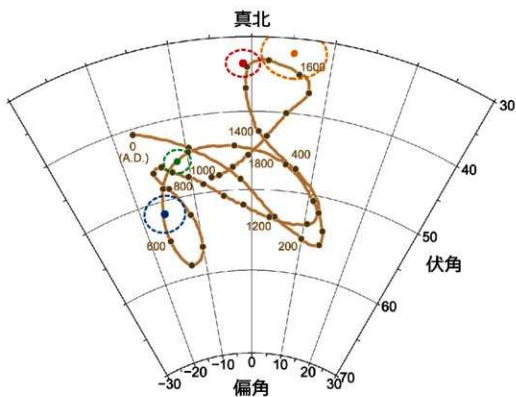
第1図 (a) SC240、(b) SK68、(c) SC374、(d) SK378、(e) SC480 における考古地磁気測定用ブロック状試料採取の様子（試料表面は石膏でコーティングされている）
(f) 残留磁化方位測定に用いたキューブ状試片



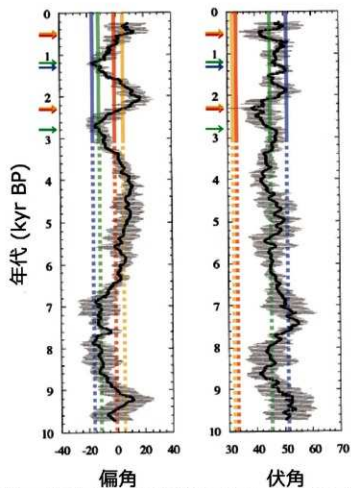
第2図 (a) SK68, (b) SC374, (c) SK378, (d) SC480 おける代表的な自然残留磁化ベクトル終点投影図



第3図 各キューブ状試片の磁化方向の投影図



第4図 各遺構の平均磁化方位と日本の考古試料に基づく考古地磁気永年変化曲線との比較



第5図 各遺構の平均磁化方向と琵琶湖堆積物に基づく古地磁気永年変化曲線との比較

第2節 放射性炭素年代 (AMS 測定)

1 はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である (中村, 2003)。

ここでは、上本町遺跡で出土した竪穴遺構 (住居跡)、土坑の構築年代を明らかにする目的で、放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

測定試料は、6遺構で採取された炭化物6点である。表1に、測定試料の詳細と前処理・調整法及び測定法を示す。測定は、試料の前処理・調整後、加速器質量分析計 (コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて行った。次表に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

試料No.	試料の詳細	種類	前処理・調整法	測定法	備 考
No.2	土坑跡, SK47, 6層	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS	H28年度実施
No.4	土坑跡, SK102, 2層	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS	
No.9	竪穴住居遺, SC374, 5層	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS	
No.10	土坑跡, SK378, 9層	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS	
No.1	土坑跡, SK415土層番号9	炭化材 (タケ亜科)	超音波処理, 酸-アルカリ-酸処理	AMS	H29年度実施
No.1	土坑跡, 6層室内	炭化和実	超音波処理, 酸-アルカリ-酸処理	AMS	H30年度実施

※ AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3 測定結果

加速器質量分析法 (AMS: Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (校正年代) を算出した。表1にこれらの結果を示し、図1に暦年校正結果 (校正曲線) を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例により Libby の5568年を用いている。統計誤差 (±) は $\pm 68.2\%$ (確率) である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年校正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年校正年代値も併記した。

(3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを校正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代校正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C

年代の比較により作成された校正曲線を使用した。校正曲線のデータはIntCal 13、校正プログラムはOxCal 4.2である。

暦年代(校正年代)は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により 1σ (68.2%確率)と 2σ (95.4%確率)で示した。校正曲線が不安定な年代では、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

表1 放射性炭素年代測定結果

試料No.	測定No. (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	14C年代:年BP (暦年校正用)	暦年代(校正年代):cal-	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
No.2	32518	-26.58 ± 0.26	2485 ± 20 (2486 ± 20)	BC755-734 (10.6%)	BC767-540 (95.4%)
				BC689-680 (4.7%)	
				BC671-662 (4.2%)	
				BC649-606 (21.9%)	
				BC597-546 (26.7%)	
No.4	32519	-27.53 ± 0.24	2245 ± 20 (2244 ± 20)	BC375-356 (18.8%)	BC386-350 (27.3%)
				BC286-234 (49.4%)	
No.9	32520	-27.62 ± 0.27	1595 ± 20 (1594 ± 19)	AD420-433 (13.8%)	AD414-537 (95.4%)
				AD460-466 (4.8%)	
				AD489-532 (49.5%)	
No.10	32521	-30.78 ± 0.27	2255 ± 20 (2253 ± 19)	BC383-357 (32.4%)	BC391-352 (39.2%)
				BC283-256 (27.6%)	
				BC246-236 (8.2%)	
No.1	35875	-12.15 ± 0.22	2275 ± 20 (2276 ± 22)	BC395-360 (63.9%)	BC400-356 (69.0%)
				BC269-264 (4.3%)	
No.1	36605	-26.39 ± 0.13	2212 ± 19 (2210 ± 20)	BC358-349 (6.4%)	BC363-338 (13.0%)
				BC314-280 (25.7%)	
				BC257-209 (36.2%)	

BP: Before Physics (Present), cal: calibrated, BC: 紀元前, AD: 西暦

4 所見

上本町遺跡において出土した構築年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定を行った。その結果、No.2の炭化材では 2485 ± 20 年BP (2σ の暦年代でBC 767 ~ 540年)、No.4の炭化材では 2245 ± 20 年BP (BC 386 ~ 350, 307 ~ 209年)、No.9の炭化材では 1595 ± 20 年BP (AD 414 ~ 537年)、No.10の炭化材では 2255 ± 20 年BP (BC 391 ~ 352, 296 ~ 228, 221 ~ 211年)の年代値が得られた。このうち、No.1、No.2、No.4では暦年代の年代幅がかなり広がっているが、これは該当時期の校正曲線が不安定なためである。SK415の土層番号9で出土した炭化物(タケ亜科)は、 2275 ± 20 年BP (2σ の暦年代で400 ~ 356 cal BC, 288 ~ 234 cal BC年)の年代値であった。SK552の6層壺内で出土した炭化種実は、 2210 ± 20 年BP (2σ の暦年代で363 ~ 338 cal BC, 329 ~ 204 cal BC年)の年代値であった。

文献

- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」。日本第四紀学会, p.3-20.
- 中村俊夫(2003)放射性炭素年代測定法と暦年代校正。環境考古学マニュアル。同成社, p.301-322.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
- Paula J Reimer et al. (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55,

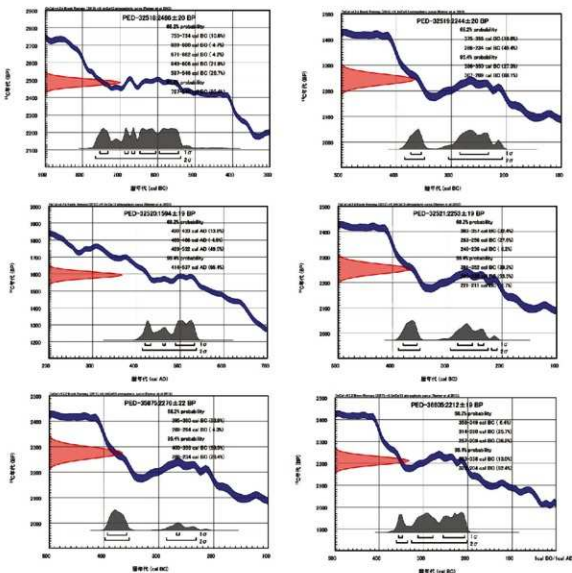


図1 暦年校正結果

第3節 樹種同定

1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。また、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。

本報告では、上本町遺跡より出土した炭化材について樹種同定を行い、当時の周辺植生や木材利用について検討する。同一層より出土した炭化物を用いて、放射性炭素年代測定も行われている（第2節参照）。

2 試料と方法

試料は、弥生時代の土坑跡から採取された炭化材片で平成28年度が6点、平成29・30年度が各1点である。試料の詳細を表2に示す。なお、平成28年度の試料は5mm以下の小片であり、焼き膨れが著しく軟質な消し炭（からけし）状であったため、試料を洗浄して付着した異物の除去を行った。その後、試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柃目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスバッ

タにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行った。同定は、所有の現生標本と対比して行った。

3 結果

表2にて同定結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表2 上本町遺跡における樹種同定結果

番号	結果 (学名/和名)	遺構番号	遺構	状態	備考
1	Fagaceae	ブナ科	S47 4層	土坑跡	軟質な消し炭
3	<i>Castanea crenata-Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	クリ-コナラ属コナラ節	S102 2層	土坑跡	軟質な消し炭
5	<i>Castanea crenata-Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	クリ-コナラ属コナラ節	S199 4層	土坑跡	軟質な消し炭
6	Fagaceae	ブナ科	S299 4層	土坑跡	軟質な消し炭
7	<i>Castanea crenata-Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	クリ-コナラ属コナラ節	S305	土坑跡	軟質な消し炭
8	Fagaceae	ブナ科	S364 8層	土坑跡	軟質な消し炭
2	Gramineae	イネ科	S415	土坑跡	平成29年度実施
1	<i>Castanopsis sieboldii</i> (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashib.	スダジイ	S462	土坑跡	平成30年度実施

1) クリ-コナラ属コナラ節 *Castanea crenata-Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が配列する環孔材である。晩材部では火災状に配列する小道管が見られる。放射組織は単列で同性放射組織型である。

以上の特徴からクリ-コナラ属コナラ節に同定される。クリは単列の放射組織のみが存在し、コナラ属コナラ節の放射組織は単列のものと大型の広放射組織が存在するが、試料はいずれも5mm以下の小片であり、広放射組織の有無など広範囲の観察が困難なため、クリ-コナラ属コナラ節の同定にとどめた。

2) ブナ科 (クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれか) Fagaceae

部分的ではあるが大型の道管と火災状に配列する小道管が見られる。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からブナ科のクリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかである。いずれの試料も極めて小片であり、広範囲の観察が困難なため、ブナ科の同定にとどめた。

3) イネ科 Gramineae

向軸側の原生木部、その左右の2個の後生木部、背軸側の節部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の稈である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は比較的薄い。

イネ科は、タケ亜科やキビ亜科など7亜科がみられる単子葉植物であるが、対照標本が少なく、同定までには至らなかった。

4) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が断続的に並び、晩材部では径を減じた道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列となる。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

4 所見

弥生時代の土坑跡から採取された炭化材片について樹種同定を行った。その結果、平成28年度の試料は極めて小片で広範囲の観察が困難であったが、クリ-コナラ属コナラ節3点、ブナ科 (クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれか) 3点が同定された。なお、いずれも焼き膨れが著しく軟質

な消し炭（からけし）状であり、炉などの燃焼や火災によって生成された炭化材と考えられる。クリやシイ属、コナラ属コナラ節は重硬かつ強靱な材で、建築材によく用いられ、燃料としては火持ちが良く火力も高い材である。クリ、コナラ属コナラ節はともに温帯域に広く分布する落葉高木で、やや乾燥を好み台地や丘陵地に生育し、二次林種でもある。シイ属は温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは二次林要素の常緑高木である。いずれの樹種も当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

SK415 から出土した炭化材は、イネ科であった。試料は、焼けた建築材（屋根材）や、燃料材の残渣などの可能性が考えられるが、詳細は不明である。遺跡周辺に生育していたイネ科植物を伐採し、利用していたと考えられる。

SK462 から出土した炭化材は、スダジイであった。スダジイはやや堅硬だが加工性は悪くない樹種である（伊東ほか、2011）。またスダジイは福岡県下では普通に生育する樹種であり（伊東ほか、2011）、遺跡周辺に生育していたスダジイを伐採利用していたと考えられる。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌、238p、海青社。

文献

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学。出土木製品用材データベース、海青社、449p。

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造、文永堂出版、290p。

島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p。

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成

—用材から見た人間・植物関係史、植生史研究特別1号、植生史研究会、242p。

第4節 種実同定

1 はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出し、その群集の構成や組成を調べることで、植生や群落の構成要素から古環境を推定することが可能である。また検出された単体試料等を同定することで、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

ここでは、上本町遺跡で出土した炭化種子を同定し、当時の植物利用について検討する。

2 試料と方法

試料は、土坑SK415の土層番号9、土坑SK420の土層番号5より出土した炭化種子である。想定されている時期は、SK415は弥生時代中期前半頃、SK420は弥生時代前期末～中期前半である。

種実同定は、試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本と対比して行った。

3 結果

SK415

(1) 分類群

樹木1、草本1の計2分類群が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

・イチイガシ *Quercus gilva* Blume 子葉 プナ科

炭化していて黒色で、楕円形を呈する。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。表面のシワを観察すると、乾燥したのち炭化したと思われる。

上本町遺跡の炭化材 I



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
分析番号 1 ブナ科 S47 4層 土坑跡

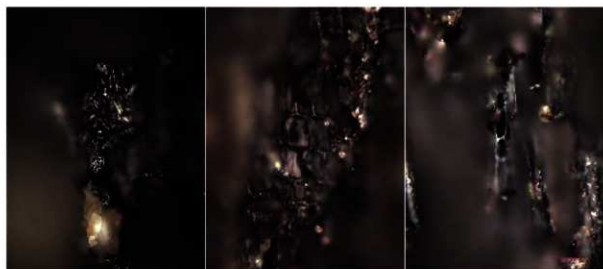


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
分析番号 3 クリーコナラ属コナラ節 S102 2層 土坑跡

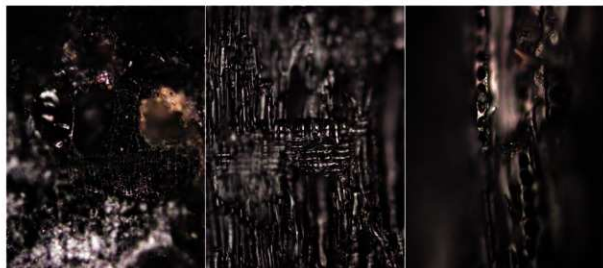


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
分析番号 5 クリーコナラ属コナラ節 S119 4層 土坑跡

上本町遺跡の炭化材Ⅱ



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
分析番号6 ブナ科 S299 4層 土坑跡

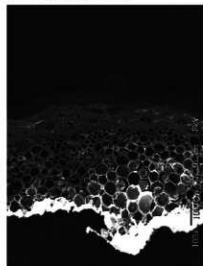


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
分析番号7 クリーコナラ属コナラ節 S305 土坑跡



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
分析番号8 ブナ科 S364 8層 土坑跡

上本町遺跡の炭化材



イネ科 横断面

0.3mm

〔草本〕

・イネ *Oryza sativa* L. 果実 イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分
がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

SK420

樹木 1 分類群が同定された。学名、和名および粒数を表 1
に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる
形態的特徴、写真に示したもののサイズを記載する。

〔樹木〕

イチイガシ *Quercus gilva* Blume 子葉 ブナ科

炭化して黒色で、楕円形を呈する。表面はなめらかで、
縦方向に一条の凹線が入る。

コナラ属 *Quercus* 子葉(破片・細片) ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑



1a



1b



1c

1a-1c. スダジイ (No.1)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

である。この分類群は破片のため、属レベルの同定までである。また、表面模様に皺が少なく平滑
であり、破片ではあるがイチイガシの破片と考えられる。

(2) 種実群集の特徴

1) SK415 土層番号 9

草本種実のイネ果実 11 が同定された。大きさを計測し表 2 に示した。佐藤 (1988) に基づき粒
形を示した。いずれも短粒で大きさは小から極小に属する。

2) SK420 土層番号 5

樹木種実のイチイガシ子葉 1 が同定された。

3) SK462 下

樹木種実のイチイガシ完形 3、半形 2、コナラ属破片 44、細片 (+) が同定された。

4 考察とまとめ

上本町遺跡の土坑より出土した炭化種実について同定を行った。その結果、SK415 の土層番号 9

上本町遺跡の炭化種実

※○内は、検出箇所



・S468 下出土



では草本種実のイネが、SK420の土層番号5では樹木種実のイチイガシが、SK462下では樹木種実のイチイガシ、コナラ属の子葉が同定された。イネの炭化果実（炭化米）は栽培植物であり、弥生時代以降よく検出され、出土例が多い。佐藤（1988）に基づく粒形評価では、本遺跡のイネは短粒で大きさは小から極小に属する。西南日本の弥生時代から古墳時代ないし古代では、標準的な粒形・大きさである。イチイガシは西南日本に分布する照葉樹林を構成する主要高木で、カシ類の中で渋抜きなしに食べられる唯一の種類である。内部の子葉は炭化しなければならず、人為的に火を受けた可能性が高い。また、イチイガシは自然度の高い森林に分布し、周辺にはイチイガシの照葉樹林の一次林が分布していたとみなされる。

参考文献

- 佐藤敏也（1971）日本の古代米，雄山閣出版株式会社。
 笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p。
 笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類，弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣 出版，p.131 - 139。
 佐藤敏也（1988）弥生のイネ，弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣出版株式会社，p.97-111。
 南木陸彦（1991）栽培植物，古墳時代の研究第4巻生産と流通1，雄山閣出版株式会社，p.165 - 174。
 南木陸彦（1993）葉・果実・種子，日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276 - 283。

第5節 骨同定

1 はじめに

田川市上本町に位置する上本町遺跡の発掘調査では、土坑等から哺乳類骨と動物遺体が出土した。ここでは、哺乳類骨と動物遺体について同定を行った結果を報告する。

表1 動物遺体一覧

遺構	分類群	部位	左右	部分・状態	数量
S583	マダイ	前頭骨	—	左右に割れ1/2残	1
S518	イヌ?	下顎骨	右	下顎体	1
S518	イヌ?	下顎骨?	不明	破片	1
S518	イヌ?	脛骨	右	近位端～骨幹	1
遺構検出 (25マス)	ウシ	上腕骨	右	骨幹破片	1

2 試料と方法

試料は、土坑SK455から出土した哺乳類骨1点、近代の遺構SK583とSK518、遺構検出(C-7)から出土した動物遺体計5点である。試料を肉眼で観察し、標本との比較により部位と分類群を同定した。

3 所見

土坑SK455から出土した哺乳類骨1点は、陸生の哺乳綱(Mammalia)であり、椎骨の可能性はある。解体痕は確認できないが、焼けており、黒灰色～白色を呈することから、人為的に焼かれた可能性も考えられる。

SK583では、海産魚であるマダイ(*Pagrus major*)の前頭骨1点が見られた。日本海あるいは瀬戸内海で捕獲されたマダイが上本町遺跡に持ち込まれたと考えられる。前頭骨は左右に割れており、調理の際に頭部を縦方向に分割した可能性がある。SK518では、イヌ(*Canis lupus familiaris*)の可能性のある右下顎骨、下顎骨?破片、右脛骨各1点が見られた。

遺構検出(C-7)の骨は、ウシ(*Bos taurus*)の右上腕骨骨幹破片1点であった。上本町遺跡において、ウシが家畜として飼育されていた可能性が考えられる。

上本町遺跡の動物遺体



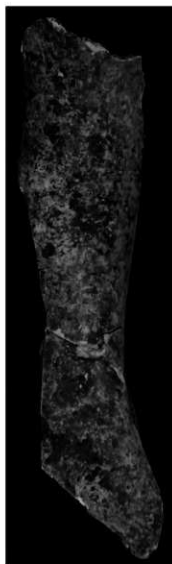
1



2



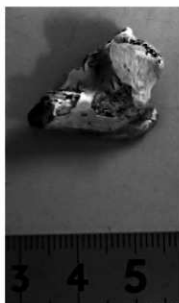
3



4

5cm

1. マダイ前頭骨 (S583)
2. イヌ?右下顎骨 (S518)
3. イヌ?右脛骨 (S518)
4. ウシ右上腕骨 (遺構検出 25 マス)



哺乳骨

第6節 土壌分析 (リン・カルシウム分析、成分分析)

1 はじめに

上本町遺跡の発掘調査では、土坑SK460、46より白色物が検出された。ここでは、この白色物の材質を検討する目的で、蛍光X線分析を実施した。

2 試料と方法

試料は、土坑SK460の土層番号10 (図版1) と、SK46より採取された白色物質である。

蛍光X線分析では、マイラーフィルムを張った試料ホルダに乾燥させた白色物質を入れて、測定試料とした。分析装置はエスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製エネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置は、X線管が最大50kV、1000 μ Aのロジウム (Rh) ターゲット、X線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器 (Vortex) である。この装置は、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することでS/N比の改善が図れる。検出可能元素はナトリウム (Na) ~ウラン (U) であるが、軽元素の感度は蛍光X線分析装置の性質上若干低く、特に定量分析におけるナトリウムの精度は低い。測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが15kV (一次フィルタ無し・Cl測定用)・50kV (一次フィルタPb測定用・Cd測定用)

の4条件で、測定時間は各条件 500～1000s、管電流自動設定、照射径 8mm、試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、酸化物の形で算出し、ノンスタンダードFP法による半定量分析を行った。

3 所見

表2に蛍光X線分析の半定量分析結果を示す。

SK460の試料から検出された成分は、マグネシウム (MgO)、アルミニウム (Al_2O_3)、ケイ素 (SiO_2)、リン (P_2O_5)、硫黄 (SO_3)、カリウム (K_2O)、カルシウム (CaO)、チタン (TiO_2)、マンガン (MnO)、鉄 (Fe_2O_3)、亜鉛 (ZnO)、ストロンチウム (SrO)、ジルコニウム (ZrO_2)、バリウム (BaO) であった。

リン (P_2O_5)、カルシウム (CaO) の含有量が少ないことから、白色物は漆喰や骨などのカルシウム系の物質の可能性は考えにくい。アルミニウム (Al_2O_3) もそれほど多くなく、ケイ素 (SiO_2) が約 90% と非常に多く検出された。

SK46の試料から検出された成分は、ナトリウム (Na_2O)、マグネシウム (MgO)、アルミニウム (Al_2O_3)、ケイ素 (SiO_2)、リン (P_2O_5)、硫黄 (SO_3)、カリウム (K_2O)、カルシウム (CaO)、チタン (TiO_2)、マンガン (MnO)、鉄 (Fe_2O_3)、亜鉛 (ZnO) であった。

リン (P_2O_5) やカルシウム (CaO) の含有量が少ないことから、白色物は漆喰や骨などのカルシウム系の物質である可能性は考えにくい。アルミニウム (Al_2O_3) もそれほど多くはなく、ケイ素 (SiO_2) が約 94% と非常に多く検出された。

両者を簡易的に生物顕微鏡で観察を行ったところ、植物珪酸体とみられる物質が多量に認められた。珪酸質の植物灰と考えられたため、引き続き灰像分析 (植物珪酸体分析) を行った。

表2 半定量分析結果 (mass%)

SK460	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	ZnO	SrO	ZrO_2	BaO
	0.14	7.29	90.50	0.45	0.03	0.23	0.42	0.17	0.06	0.67	0.02	0.01	0.01	0.01
SK46	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	ZnO			
	2.90	0.19	0.67	94.22	0.45	0.10	0.19	0.44	0.19	0.05	0.58	0.01		

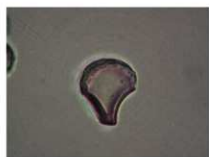
補足. 灰像 (植物珪酸体) 分析

1 はじめに

上本町遺跡の発掘調査では、材質不明の白色物が出された。蛍光X線分析を行ったところ、ケイ素 (SiO_2) が 90% 以上の高い値で検出された。簡易的に顕微鏡観察を行ったところ、植物珪酸体とみられる粒子が多量に確認された (第6節参照)。そこで、白色物の材質を検討する目的で、灰像分析 (植物珪酸体分析) を実施することになった。



図版1 白色物質



1. イネ



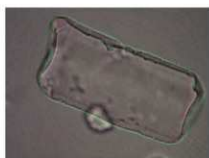
2. イネ



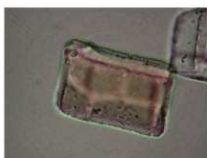
3. イネ



4. イネ



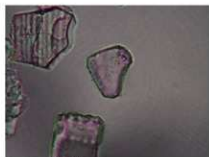
5. キビ族型



6. キビ族型



7. ススキ属型



8. ススキ属型



9. 葉身灰像

1~8 :  50 μ m 9 :  50 μ m



1. イネ



2. イネ



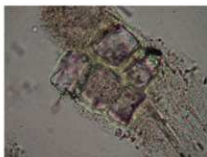
3. イネ



4. ススキ属型



5. ススキ属型



6. 葉身灰像

 50 μ m

図版2 上本町遺跡の植物珪酸体

2 試料と方法

試料は、弥生時代前期末頃の土坑SK460より採取された白色物質である。

灰像分析は、植物珪酸体分析法に基づいて以下の方法で行った。なお、今回の調査目的は植物種を確認することであることから、分析は定性分析で実施した。

- 1) 試料約10 cm³を採量し、105℃で24時間乾燥（絶乾）する。
- 2) 植物組織を観察するために、一部を封入剤（オイキット）中に分散してプレパラートを作製する。
- 3) 乾燥した試料を超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）により分散する。
- 4) 沈底法により20 μm以下の微粒子を除去する。
- 5) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラートを作製する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。

3 所見

試料から検出された植物珪酸体は、SK460がイネ、ススキ属型、キビ族型、SK46がイネとススキ属型である（表1）。

SK460は、イネが極めて多い。ススキ属型は少量であり、キビ族型は非常に少ない。試料

は白色を呈し、炭化物は確認されない。また、葉身が組織の状態でも多く観察され、有機質が土壌動物や微生物により接触・分解を受けた痕跡は少ない。こうしたことから、当該白色物質は、稲藁等が焼かれた後、灰部分が集積されたものと考えられる。ススキ属やキビ族はイネに混じって焼かれたものと思われる。

SK46は、イネが極めて多く、ススキ属型は少量である。試料は白色を呈しており、炭化物は確認されない。また、葉身組織が観察され、有機質が土壌生物により接触・分解された痕跡は少ない。以上のことから、当該白色物質は、稲藁等が焼けた後、灰部分が集積されたものと考えられる。ススキ属はイネに混じって焼けたものであろう。この結果は、昨年度検出されたSK460とほぼ同様である。

参考文献

- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社。p.189-213。
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）
—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学。9。p.15-29。

表1 上本町遺跡出土白色物質の植物珪酸体分析結果

試料	出土遺構	イネ	ススキ属型	キビ族型
白色物質	土坑SK460	++++	+	(+)
白色物質	土坑SK46	++++	+	

++++：極めて多い、+++：多い、++：中程度、+：少ない、
(+)：非常に少ない

第Ⅶ章 まとめ

第1節 各遺構について

主要な遺構ごとの時期をまとめると、次のようになる。

(1) 竪穴住居跡 10 基

弥生時代前期末～中期初頭	8、20、41、62、70、480
中期前半	7、75、240
古墳時代中期後半	374

(2) 土坑

・円形（フラスコ状）33 基

弥生時代前期末	26
中期初頭	95、160、175、255、297(前期末～)、560
中期前半	135、142、220、455、460(中期初頭～)、462(中期初頭～)、475、484、490、505(中期初頭～)、552、570(中期初頭～)
中期中頃	300、427
時期不明	53、176、230、243、253、255、297、317、433、442、457、459

・円形 27 基

弥生時代中期初頭	24、40、54、90、136、183、215、(218,219)、417
中期前半	257、410、445(中期初頭～)、455(中期初頭～)、549、554
中期中頃	270(中期初頭～)、352
時期不明	42、91、150、254、305、337、342、433、545

・長方形（深）51 基

弥生時代前期末	47、87、200
中期初頭	6、56(前期末～)、(81)、92、122、126、140、361(前期末～)、397、464、466、540
中期前半	5、72(中期初頭～)、85、(190)、275、280、309、362、363、415、419(中期初頭～)、454、525(中期初頭～)、550(中期初頭～)
中期中頃	103、130、170、(194)、199、265、365
時期不明	16、30、58、86、99、102、108、109、123、165、195、266、320、335、349

・長方形（浅）35 基

弥生時代中期初頭	(45)、96、110、(120,132,144)、355、378、424、426、435、470、485
中期前半	(4、9、60、80)、213、(222,291,292)、311・312(中期初頭～)、340、451
中期中頃	185、235、264、335(中期前半～)
後期初頭	229
時期不明	303、330、341、350、378、512

・方形 17 基

弥生時代前期末	520、541
中期初頭	578
中期前半	290、468、491(中期初頭～)、533
中期中頃	278、295、347、567、568
時期不明	423、434、538、547、548

・その他（時期が判明する遺構のみ）

弥生時代前期末	296
中期初頭	21、269
中期前半	10、11、27、141、331
中期中頃	127、208、367、371

・古代 15 基

8 世紀後半～8 世紀末	55, 146, 198
9 世紀前半～10 世紀代	41, 98, 125, 437

遺構数および出土資料数が限られ、時期が判明するのは 7 基である。

(3) 甕棺墓 1 基

弥生時代中期後半頃	205
-----------	-----

単独で構築される。

(4) 落とし穴遺構 1 基

時期不明	261
------	-----

周囲に同様な遺構の展開が見られないことから、縄文期の可能性がある。

(5) 近代

・土坑

19 世紀	69, 79, 82～85, 93, 94, 216, 217, 231, 232, 233, 236, 237, 239, 241, 246, 251, 372, 399, 306, 556, 559, 582
-------	--

・学校関係

19 世紀	402, 404, 478, 517, 518, 519, 583
-------	-----------------------------------

弥生時代の遺構について、述べる。

① 竪穴住居跡

弥生時代の住居形態は円形 5 基 (SC8、20、41、240、480)、方形 2 基 (SC7、75)、楕円形 1 基 (SC70) に分かれる。出土資料が限られるが時期は、前期末から中期前半頃と考えられる。いずれも、検出面から床面までの深さは浅い。このうち、SC41・480 は柱跡を確認し、住居の中心から複数配される形態が想定される。また、楕円形の SC70 は、2 本の柱跡である。一方、円形の SC8・20 や方形の 62 から柱跡は、確認できなかった。

古墳時代は残存状況が良好ではなかったが、方形を呈し、柱跡を確認できなかったものの礎を備える。

② 貯蔵穴跡・土坑跡

検出段階で判明した平面形態および断面形状より、円形 (フラスコ状・円形)・長方形 (深・浅)・方形・その他に分類を行った。検出した 248 基の土坑のうち、時期が判別できるものは 128 基である。時期は前期末が 7 基、中期初頭が 44 基、中期前半が 52 基、中期中頃が 24 基、後期初頭が 1 基である。形態の変遷は、遺構検出段階は円形→長方形 (深)→長方形 (浅) と捉えていた。出土資料と重ねると、出現時期に円形と隅丸長方形に時期差はみられないが、時期が下ると円形の基数が減少する傾向が認められた。埋土の堆積状況は土層図を可能な限り記録したが、1 次調査は調査工程の関係および校舎基礎の削平を受けている調査環境であったため、記録が限られる要因の一つである。その中で、61 基の堆積状況の大半はレンズ状堆積を示し、ブロック状堆積は 2 基と僅かであった。また、SK140 は土層が層状を呈し、半ばほどで掘り返しとみられる堆積状況がうかがえた。壁面形態は円形 (フラスコ状) 以外、大半は断面が「ハ」字形を呈する。

③ 甕棺墓について

この遺跡で検出された唯一の弥生時代の墓である。田川地域での甕棺墓の検出は初例となった。甕棺は糸田町上糸田遺跡、福智町宝珠遺跡に続き 3 例目である。墓壇は平面形が隅丸長方形を呈し、二段堀で横穴気味に墓壇を掘削する事例は、桂川町十三塚遺跡で確認できる。甕棺は、上甕を鉢形土器で、下甕は筑豊地域特有の三条突帯を巡らす須玖式甕棺である。墓壇掘削と甕棺の特徴から、筑豊地域で甕棺葬最盛期に嘉飯地域から影響を受けて、導入した流れが読み取れる。また、単独であり、地域の拠点となる遺跡の墓として導入されたと捉えられる。

第2節 石器の様相

遺構別石器組成は以下のとおりである。

遺 構	時 期	石	鐵	石 庖丁	石 鎌	石 斧 類			砥 石	磨 石	石 剣	石 戈	その他	計
		打 製	磨 製			太 鋸	柱 片	扁 平						
竪穴住居跡 (7軒)	弥生時代 前期末～ 中期中頃	0	0	5	0	4	6	0	6	0	1	0	Ob剥片 An剥片	28
土 坑 跡 (108基)	弥生時代 前期末～ 中期中頃	5	1	36	2	17	16	0	92	1	15	2	Ob剥片 An剥片 打 斧	205
柱 穴 跡	弥生時代 前期末～ 中期中頃	0	1	5	0	5	3	1	12	1	1	1		30

堅穴住居跡から収穫具の石庖丁、伐採具の太形蛤刃石斧や加工用石斧の柱状片刃石斧が顕著であるが、狩猟具である石鏃等が見られない。また、砥石の出土が顕著であるSC41は、作業場としての使用も考えられる。土坑跡も堅穴住居跡の石器組成と同様で、石庖丁や太形蛤刃石斧、柱状片刃石斧出土数が顕著である。また、石剣と砥石は高率である。砥石は、集落内で石器加工に重きを置いていた傾向がうかがえる。一方で、狩猟具である石鏃が少ない。このように、堅穴住居跡と貯蔵穴の同傾向は、保有と廃棄を集落内で完結していたと捉えられる。

第3節 近代の遺構・遺物について

調査では、近代の遺構・遺物を確認した。特に4次SK517から519・583は造成土であったが時期について、学校史と合わせて述べる。西田川高等学校は1897（明治30）年、弓削田尋常高等小学校として現在地に創立する。明治35（1902）年、同尋常高等小学校敷地内に弓削田尋常高等小学校実業補習科を設置、西田川高等学校の前身である。その後、1911（明治44）年には田川郡立技芸女学校へ昇格する。1917（大正6）年田川郡立田川高等女学校、1921（大正10）年福岡県立田川高等女学校として県営に移管する。1925（大正14）年福岡県田川高等女学校に改称する。戦後の1948（昭和23）年に男女共学となり、翌年福岡県立西田川高等学校と改称して、現在に至る。

SK517から519は調査区の西側に位置し、丘陵先端に位置する。調査前の現地確認では、東から丘陵が続くと想定していたが、表土剥ぎによって斜面を造成している状況が確認できた。その深さは3mを超えており、一部、造成下端を重機にて確認後、埋め戻している。SK517から519・583の土層は、ボタと土を互層に造成し、上(SK519上)・下(SK517～519下・583)層に分層が可能である。出土遺物は多く、特に陶磁器、瓶が豊富である一方、石盤や筆洗器など教材関係の資料も確認できる。時期は、SK583出土の陶磁器や「伊田尋常〇」の墨書絵具、機械栓の牛乳瓶などから、大正期として捉えられる。SK519上・下からも陶磁器や瓶が多く出土した。その中で、インク瓶は丸善のアデナインキであり、1916(大正5)年から製造・販売する。一方、同高の敷地変遷では開校以降、記録が伝わる1917(大正6年)よりSK517から519・583付近の敷地拡張は行われていないため、明治末期～大正前期頃の資料と捉えられる。

以上のように、時期の分かる遺構を中心に遺跡の変遷について考察を行った。今回の調査は各時代にわたり、多くのことが明らかとなった。今後は周辺に存在する遺跡と検討を重ね、さらなる検討が必要であろう。